

ライダーがいないので、  
ショットカーを作りました。  
た。

オールF

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

仮面ライダーに憧れた少年がいた。平成生まれだけど、昭和ライダーに憧れた少年がいた。少年は大人になって、事故で死んで転生した。しかし、そこには個性を使うヒーローはあれど、自分の憧れた仮面ライダーはいなかった。「だったら作ればいいか」と少年は授かった個性で犠牲を省みず、己の理想のために仮面ライダーを作るための土台を作っていく。

# 目次

原作開始前

シヨツカー誕生	1
シヨツカー始動	15
怪奇蜘蛛男	25
シヨツカー始動(2回目)	36
恐怖! 蝙蝠男	46
シヨツカー、巨悪と手を結ぶ	66
首領 閃く	85
シヨツカー誕生 2周年	105
オールマイイト vs シヨツカー	126
誕生! 仮面ライダー	157

その名は仮面ライダー	186
ヒーロー/偽善者を狩る者	212
迫るシヨツカー	227
恐怖! 蝙蝠男!(2回目)	243
強くなるろう	264
大首領の苦悩。	275
出現! サソリ男!	287
大首領のお仕事	307
トカゲロンと怪人軍団	314
幕間: NEXT STAGE	329
お見せしよう! 仮面ライダー!	337
仮面ライダー2号	349



# 原作開始前

## シヨツカー誕生

俺は仮面ライダーが好きだ。

仮面ライダー。正義の味方。正体を隠して、悪と戦う。

彼らのそんな姿に憧れた俺は、幼少期を仮面ライダーで過ごした。

家では仮面ライダーのソフビ人形で遊び、ビデオを見た。

外では友達と仮面ライダーごっこをした。

けれど、友達の知っている仮面ライダーは俺の知っているライダーではなかった。

クワガタは知らない。

アギトってのも知らない。

ドラゴンとか剣も知らない。

響とかキバ、ファイル？ とかも知らない。

電車の王様とかもいたらしいけど、はつきり言っただけ知らない。

けれど、ディケイドとダブルは知っていた。

ディケイドには俺の知ってるライダーが出ていたからだ。

ダブルは俺の好きなライダーのようなシンプルなデザインに惹かれたからだろう。

そうして、小学校になって物心が着いた頃に理解した。

俺が好きだったのはみんなが見ていた仮面ライダーではない。

俺が生まれたのは平成。ならば、みんなが見ているのは当然のように平成に誕生した仮面ライダーだ。

けれども、俺は違った。昭和生まれの父親から教えてもらった。

本郷猛は最高のヒーローだと。一文字隼人は一番かっこいいと。

その2人の力を持つ風見志郎はすごいんだと。

俺はそれを言葉で貰って、映像で実感した。

本郷猛。仮面ライダー1号。

俺が生まれて初めて知ったヒーローにして最高のヒーロー。

仮面ライダーが生まれたのは昭和のこと。

そして、1号は仮面ライダーの原点。つまりは生まれたのは昭和。

俺が生まれる前から彼は、俺の父親のヒーローをしていたのだ。

それは平成に生まれた俺でもわかった。

黒いマスクの時もかっこよかったが、やはり多くの技を携えて帰ってきた銀色のマスクと赤い目とマフラーをした新1号の方がかっこいい。

でも、友達は知らなかった。いや、知っていたけど、古くないかと言われた。今の仮面ライダーは携帯とかコウモリ、カードで変身するんだと言われた。

いや、仮面ライダーは変身ポーズを構えるだけでは無いのかと思つたが、平成ライダーというのはかなり異質だったようだ。

だが、同じく仮面ライダーに憧れた者同士ということで、俺は否定しなかった。でも、特別なフォームというのを持たないからという理由で、仮面ライダーごっこではいつも1号は負けていた。

おかしい。技の1号だから、どんな逆境でも跳ね返せるだけの技がたくさんあると言つても、武器もなしに勝てるわけがないと言われた。

なので、俺は仕方なく特別なフォームもあつて、武器が刺さつてしまえばどんな相手も関係ない仮面ライダーRXを持ち出した。

何があつても「その時、不思議なことが起こつた」で跳ね返してきたがずるいと言われた。大人になった今だから言えるが、確かにずるい。

しかし、それもそのはず。RXはギリギリ昭和ライダーで、放送時には平成に入つていたらしいのだ。

やはり平成か……と思つてしまつたが、スーパーワンやストロンガー、なんならゼクロスもかなりチートだったので、ごっこ遊びで使つた。

けど、歳を経ることにそういうことはしなくなつた。

自分も今のライダーはどんなのがいるのだろうと興味を持って見たのがダブルで、その後は見ていない。

さて、ここまで長つたらしい自分語りに付き合ってもらつたが、俺は別に平成ライダーが嫌いではない。むしろ、1号から続いた仮面ライダーの歴史を継承してくれてることに感謝しているくらいだ。

いつの間にか令和に変わっていた訳だが、そこは置いておこう。令和に関しては名前くらいしか知らない。

その理由は簡単。俺は令和に変わって死んだのだ。

人の人生とは呆気ないなど、非人間の敵が思いそうな事を思いながらまどろみの中をさまよつた。

そして、俺はそこで思った。そういえば、昭和ライダーは死にかけてからの改造手術によるライダー化が鉄板だつたなど。

ん？ いや、それはV3とライダーマン以降か。1号、2号は優秀な肉体と脳を持つてるから誘拐されたんだつた。



自分はライダーに憧れただけで、なろうとしなかった。いわば、落ちこぼれとか憧れるだけの軟弱者だ。そんな男が今更、仮面ライダーになれる機会を与えられるなんて烏澁がましい。そう思った。

次の人生では仮面ライダーになれるといいな。

友人から聞いた話では、最近の流行りは転生してからの俺TUEEE！ 無双ハーレムチートはこれまた大定番らしい。長文タイトルとか、学園ラブコメの時代はとづくに終わったそうさ。

ならば、俺も、現実ではないけれども、もしかしたらそういった世界に転生して、神様から仮面ライダーの力を与えられる。

なんて考えてたら敵側の力を与えられたよ、ちくしょう！

ここからは転生というやつをした俺の話だ。

これまた長い自分語りになってしまいが、それでも良ければ聞いて欲しい。

近畿地方のとある県で、俺は再び世界で命を与えられた。

赤ん坊だったから、生まれた時の記憶はないが、物心がついて日本とか県の名前とかにとても聞き覚えがあつたことを今でもよく覚えている。

けれども、何か足りないのだ。

そう、圧倒的に。

俺の心を満たしてくれるものが。

生活には困っていない。父親はサラリーマンで、母親も共働きでパートをしていた。

おもちゃやゲームも興味を示せば、誕生日やクリスマスにプレゼントとしてくれた。

でも、違うのだ。俺はそう思いながら、テレビに目をやる。

するとそこに映っているのは、超人的な能力を持ったヒーローと呼ばれる職を持った人達が、ヴィランと呼ばれる現実的な悪と戦うニュース映像だ。

普通なら、みんなはヒーロー達の活躍に一喜一憂し、心を湧かせるのだろう。だが、俺は湧かない。興奮しない。

何故だ。

次の日、学校に行けば友達は何昨日のヒーロー達のこと話している。

かつこよかった。強かった。俺もあなりたいたと。

本当にそうか？

俺は首を傾げた。

違うんだ。決定的に何かが。

水を出したり、音速で移動するのはかつこいいと思う。

でも、俺の憧れていたヒーローはそんなものでは無いと、心の中に違和感を抱え込んでいた。

そして、ある日俺は遠足で訪れた山で運命的な出会いをした。

トノサマバツタだ。

まあ、誰でもとまでは言わないが、比較的知名度の高い昆虫だ。

図鑑では見たことあるけど、実際に見るのは初めてだなと俺はそいつを掴んで真正面から見た。

その時だった。俺の頭の中に何かピースがハマリ始めた。

んん？ と思いながら、足りないものを付け足していく。

なんか緑過ぎないかと、脳内でトノサマバツタを黒くする。

目は黒かったつけ……？ といろんな色に変えると赤が何やらしっくり来た。

首？ バツタに首はあるか分からないが、何か巻いてみたくなるなど適当な葉っぱを巻く。それに目と同じ色をつけると仮定した。

かなり近づいた気がするけど、まだ不足な気がするぞと唸っているとバツタが逃げ出ししてしまう。

ここで逃がしては、俺は一生後悔するとバツタを追いかけた。

そして、向かった先で最後のピースがハマった。俺の追いかけていたバツタを捕まえてくれた友人はとあるアイデンティティを持っていた。

それは世間を賑わせるヒーローやヴィランから、自分の父や母、クラスメイトも持っている不思議な力。人々が個性と呼んだ力だ。

残念ながらこの時の俺にはなかったが、その友人にはあった。

小学生からは考えられない胸筋の発達具合。そこに先程まで描いていたトノサマバツタが結びつく。

あつ。

そう漏らした俺の中で今まで足りなかったものが浮かび上がってくる。

そして、不幸か幸運なのか。俺の中でとある個性が芽生えた。

これがバツタ人間とか、電気カブト虫人間みたいなのなら、どんなに良かっただろう。けれども、俺の肉体に大きな変化はなく、変身ポーズをとったところで何も起きない。あつたのは他者の精神に干渉して洗脳する力。

えっ、これ完全に敵側の能力じゃん。

個性が目覚めて喜んだのもつかの間、手に入れた個性に愕然とする。

しかも、こんな個性が出たとバレれば、周りにそういう扱いをされるのは目に見えていた。

オマケに個性には複合型と呼ばれる2つ以上の力を使うことが出来るタイプもいて、俺がそれに該当した。

有機物や無機物を1つにする力。くつつけたものは戻せなくなるけど、くつついたもの同士の相性が良ければ、多大なる力を発揮できる。

なるほど、DIY型改造手術かと不用意にその辺にいた蜘蛛とホームレスのおじさんを合体させてしまった俺は思った。

この個性は自分以外に作用するも、自分には一切作用しない。バツタを身体にねじ込もうと思ったら、普通に死んだ。他にもカブト虫で試したけどダメだった。普通に角が刺さって痛かった。

そんなわけで積み木とレゴなどの無機物から、自分を含まない有機物と有機物で試してからは感情や理性のブレーキが外れた俺は、怒りで襲いかかってきた蜘蛛男となったホームレスを傀儡にしてある計画を立てた。

俺が仮面ライダーになれないなら、誰かを仮面ライダーにしてしまえばいいと。

そうすれば、この世界のみんなも仮面ライダーの良さに気付くだろう。

残念ながら、この世界は俺の知ってる世界とは別で、普通の人は何らかの特殊能力を持った代わりに、超常現象が普遍になった世界。

初めから特別な力を持って、それを育て上げたヒーローが輝く世界で、改造されてヒーローとなった悲しみの仮面ライダーは存在しないのだ。

ならば、俺が作ればいい。

幸い、その力は手元にある。

お金？ そんなもの金持ちを傀儡にすればいい。

人材？　いくらでもいる。

場所？　かつてのシヨツカーは至る所に基地を作っていた。しかも本部は太平洋の遙か下。ならば俺もそれに倣えばいい。

俺は安全に活動できる時まで、ずっと待った。

学生ではダメだ。活動範囲に限界がある。

それに深夜に歩けないのもマイナスポイントだ。

だから、始めるなら卒業してからだ。

それでも計画は進める。

第1の個性には弱点はない。

だが、自我が強い者は支配するのに時間がかかることが分かった。

寝てさえいれば、割と簡単だったりする。

けれども、先人であるシヨツカーに倣って俺は医学を学んだ。

なんでって？　脳改造。

次に第2の個性だが、これが厄介だった。

なんと個性がある人間に、その他の生物を混ぜると拒絶反応を起こすのか、あるいはその変化に肉体が耐えきれないのか、融合が果たせず死んでしまうのだ。

これには非常に困った。

幸運なことに、死んだ人は脳梗塞やら脳卒中などの脳関係の死因として片付けられたようで、俺は新聞やニュースを、毎日バクバクと心臓を鳴らして見ていた。

その経験から第2の個性で改造人間を作るには無個性の人間が必要であり、そして、俺はまだまだ非道に徹してきれていないことを理解した。

結果として、医大を卒業した俺は細々と医者をしながら、自らの傀儡になりそうな人に当たりをつけていった。他にも、蜘蛛男に情報収集をさせて、ホームレスにいる無個性の人間を攫ってもらったりした。

「な、なんだここは！」

「ハイッ!? 俺たちをどうしようって言うんだ!!?」

当たり前だが、さらってきた人間は軒並みこの反応だ。





める前に、俺は別室へと移る。

俺の姿は知られてはならない。知られれば、俺のような自分では何も出来ない愚か者では、ヒーローに簡単に殺られてしまう。

なるべく、俺が悪人とは悟られてはいけない。でも、彼らを導くものが必要だ。

赤の装束を身に纏い、工学部の連中を洗脳して作らせた変声機を取り付けた俺は、次々と改造人間がめざめていくのをカメラで確認した後、マイクへと口を近づけた。

『諸君、お目覚めかな？』

さあ、俺の理想の第一歩だ。

## シヨツカー始動

シヨツカーを結成してから早数年、秘密結社という体裁を保ちつつ、俺は怪人を使って悪事を行ってきた。

その過程でいくつか俺は気づいたことがある。

戦闘員がいない。

シヨツカーといえはく？ と聞いたら確実に出てくる黒ずくめの衣服に骸骨の意匠が表されたのを着て「イーッ！」と高らかに手を挙げてる奴らがいないのだ。

これはまずいと俺はすぐさま集めようとしたが、無個性の人間よりこちらの方が難儀であった。

まず、戦闘員とは怪人より弱く、そしてベースが一切存在しない。シヨツカーがゲルダムと結託して生まれたゲルシヨツカーならば、ゲルダムの過酷な訓練を受けた上で特殊な薬を服用している真人間からパワーアップした戦闘員がいる。

しかし、シヨツカーやデストロンはおそらく、そのまんまの改造人間。ちよつと身体能力を強化して、上司である首領や怪人の言うことを聞いては、無惨に仮面ライダーやその相棒のFBIやおやっさんにやられるだけの役だ。

そんな言葉にすると同情の念を浮かべてしまう彼らだが、仮面ライダーを作る上では必須である。本郷猛のバイクを横転させたのは蜘蛛男だが、彼を連れ去ったのは戦闘員のはずなので確実に必要となる。

けれども、無個性の人間は怪人の素体にしたいからなるべく使いたくないし、これ以上攫うと流石に警察に感づかれてしまう。

次に幹部の不在である。

これは戦闘員は暇を持て余している野良ヴィランをヴィラン専門のブローカーに紹介してもらおうとなった時に、秘密結社の親玉自ら行く訳には行かないだろうとなって思い至った。

ショッカーには首領の命令に従う怪人よりも偉い存在、幹部がいたのだ。その幹部のどれも高い知性や戦闘能力に加えて、強力な怪人に変身できるという、敵ながら心の高まりを感じてしまうような設定を持っていた。

俺の個性では、無個性を強力な怪人にできる反面、力の反動のためか知性が欠ける傾向にある。命令には従順であるが、仮面ライダーに出てきた一部の怪人のように、簡単に嵌められて情報を引き出されそうなやつが多い。

一番知性的なのは、カメレオンの能力を付与されたことで、景色に溶け込みながら移動のできる死神カメレオンなのだが、残念ながら人間体に戻ることは出来ない。

ゲルシヨツカーには、死んだ人間の身体に乗り移るといふ能力を持つものもいたが、原理が不明な上に今の俺の個性ではどうにも難しい。

序盤は怪人が幹部を兼ねていたし、暫くは死神カメレオンに些事を引き受けて貰うことにした。

俺の力が強まれば、元の人間体と新たな怪人の身体の切り替えができるようになるかと樂觀視していたが、それでは仮面ライダーが作れないではないかと気付いて俺は焦った。

仮面ライダーはバツタの能力を埋め込まれた、というよりは付与されたといった方が近い。

おそらくは脳改造をされる寸前だったため、怪人バツタ男になる前だったから、人間と仮面ライダーで容姿を切り替えることが出来たのだと思う。

これを考慮すれば、脳改造をせずにバツタと融合させればいいとなるが、本郷猛や一文字隼人には改造人間であるが故に身体機能以外にも聴覚や嗅覚、視覚などの五感が強化されている描写が多々あった。

つまりはバツタを付与するだけでは、ただのバツタ男であり、優秀な身体をさらに強化する必要があるのだ。

俺はこれを知って、すぐさま人体改造の研究に取り組んだ。一からやるのでは時間がかかるので、洗脳を用いて人体手術のエキスパートからその技を見せてもらい、真似ることにした。

それに3ヶ月もかかったせいも、戦闘員はかなり集まっており、そいつらを実験体にしなから、肉體改造に着手した。

その際にヴィラン専門のブローカーから人工筋肉を購入していたので、それらを用いて戦闘員を作り出した。もちろん、その時に脳改造するのを忘れない。

だが、戦闘員第1号が思いのほか強くて、これ怪人でも苦戦するのでは……？ と なってお蔵入りになった。

今回は他の生物を混ぜていないから、あまり難しくなかったものの、人工筋肉の搭載数や密度で力が変わるので、第1号を参考に常人より僅かに強いレベルにしておいた。

個性がある今では常人について考えると哲学に発展しそうだ。ひとまずは改造人間が3発殴ったら死ぬくらいの耐久性だと思ってくれたらいい。

諸々の問題が片付いたところで、やっと悪の秘密結社らしいことを始められそうだと 思った頃、俺は世界征服に向けて具体的なプランを練ろうと、社会情勢への理解を深めるのも兼ねて新聞に目を通していく。

しかし、これといって目立った情報はない。

夫婦のヒーローが殺されたとか、新ヒーローの誕生を祝うものだったり、前世での新聞とは近いようで大きく離れている。

政治についても触れられているし、スポーツも一面のみだがあるにはある。天気予報や番組表一覧に関してはあまり代わり映えしていないが、やはりヒーローに関する記事が多いように見える。

このままだと、ヒーローばかりが脚光を浴びる世界に不満を持つヴィランの連合組織が出来そうだと顎に手を添える。その前にシヨツカーの力を磐石なものにして、警察の上層部とかに「何かしら」の存在感はアピールしておきたい。

確かシヨツカーの作戦は、有名な研究者の誘拐とか、改造人間候補の優秀な人材の誘拐……誘拐ばっかだなこいつら。

あとは、サボテンとか死の霧……紀伊半島に秘密基地……うーむ、世界征服とは一体。いや、一応あるにはあったが、途中から打倒仮面ライダーにシフトしていたせいもあるし、そんなので世界征服できるのかよって作戦が多かったような気もする。

世界中の火山を噴火させるというのがあったけど、それはシヨツカーも沈むのでは？という疑問にぶち当たったし。

ひとまずは日本とか世界征服よりも先に、仮面ライダーを作るまでの準備としてショッカーの名を世の中に知らしめたいところだが、あくまで秘密結社なので、穩便にやるとしよう。

手始めに、有能そうな科学者の誘拐からだな。

###

とある警察署の一室。

そこにはまだ警察官になって日も経っていない男と、これからヒーローとして世の中に名を知らしめることになる大男に、そのヒーローを頭脳面で支える細身で眼鏡をかけた男がいた。

彼らの目の前に置かれたホワイトボードには、いくつかの資料が貼られている。そこには警察署周辺で多数報告されている行方不明者のデータであった。

「これは……多いな」



呟いたのはメガネの男だ。3ヶ月前まではヴィランと呼ばれる存在のせいもあって、年々上昇していたにしても警察が目光らせていたおかげか行方不明者の数は抑制されていた。にもかかわらず、ここしばらく行方不明者の数が増加していた。

「ほとんどが無個性やホームレス……狙うにしてはやや不可解だ」

不可解な点は2つ。とある男の存在もあって、優秀な個性を持つ人間の誘拐ならば、理解が及ぶものの何の個性もない人間を攫うというのはこれまでに例がないことであつた。今や、超常社会が当たり前となつている世界で、無個性の人間は旧世代の人間として扱われている。

加えて、ホームレスという資産を持つわけでもない人間を攫うことのメリットが全く読めない警察官はこの目的の分からない犯罪行為に眉を顰める。

「強い個性ならば奴が餌食にするのはわかるんだけどね」

そう言いながら大男は視線を右にスライドさせる。ホームレス以外にも、報告されて

いる行方不明者には優秀な個性持ちや頭脳明晰な科学者達も含まれていた。

しかし、優秀な個性持ちとホームレスや科学者を攫っている人間は別の者であるというのがこの部屋にいる人間の総意だった。

「片方はキミの言う通り、奴と見て間違いないだろう」

「しかし、ホームレスや科学者の誘拐は別人。それもグループによる可能性が高いな」

警察官に続いてメガネの男が言うと、さらに資料が付け足される。調べてみれば驚くことに優秀な個性持ちの行方不明よりも、日本中から様々な科学者とホームレスがさらわれていることが分かった。

「所轄の人達に協力してもらったからこれだけのデータを集められたが、まだ行方不明者は大勢いるだろうね」

もしかすると、無個性の人間たちが集まって個性持ちに対する反旗活動をするのではと睨んだ警察官に、メガネの男が頷いてみせる。

確証は得られないも、流石にこれだけの行方不明者が確認されているならば、警察として、ヒーローとして、正義の味方を名乗るものたちだからこそやらねばならない。

「とりあえず、僕たちに今できることは、無個性の市民と、優秀な研究者の保護。協力が無理そうなら監視という形でもいいだろう」

「しかし、守ってばかりでは解決にならないぞ」

警察官の提案に大男が真剣な顔で意見する。だが、それくらいは警察官にも分かっている。情報が少なすぎる今、やれることは少ない。それでもやれることは確実にやり遂げねばと彼の顔が引き締まる。

「ああ、分かっているさ。だから、彼らを保護、監視していれば何かしらのアクションがあると思う。なければ、被害者が減るし、あればこちらは手がかりを掴める」

他に有用な手があるわけでもなく、大男とメガネの男は警察官の言葉に首肯すると、ひとまずの方針が決定する。それから直ぐに、今のところ被害に遭っていない無個性の

人間や研究者のところへと多くの警察官が事情を話して、保護を申し出た。

受け入れたものも居れば、自由を制限されると無下にした者もいる。そんな者には、彼らからバレないように遠くからの監視と地域ヒーローとの協力により被害を抑えつつ、敵の詳細も知るといふ作戦に至った。

だが、それでヒーロー達は知ることになる。

未知の存在を。

個性で生まれた命ではなく、作られし異形の命を。

自分たちとは相容れない真の怪物を。

次回 怪奇蜘蛛男

## 怪奇蜘蛛男

最近世間の話題は2つに分けることが出来る。

1つは個性を掌握する者。悪の象徴とまで謳われた男の話だ。

警察がひた隠しにしてきた魔王の存在も、今では表社会にも浸透し始めた。

曰く、強い個性を持つていれば、誘拐される。しかし、金や身体の要求はない。あるのは個性のみ。

攫われた人は翌日には帰ってくるもの、まるで抜け殻になったかのように虚ろな目になっており——個性が使えなくなっている。

全世界では、出生時及び成長に伴う個性の発現の有無とその能力を記して提出することが求められている。

しかし、中にはやはりそれを拒む者がいる。

その中でも最も悪用されれば恐ろしく、悲劇の連鎖を生む可能性がある個性は「個性」を奪う個性だ。

今のところ確認されている中では、たった1人が所有しており、その男は様々な個性を奪って、悪逆の限りを尽くすまさに魔王の名にふさわしい存在となっていた。

彼に立ち向かうべく多くのヒーローが挑むも、結果は彼がまだ生きていることから言うまでもないだろう。

しかし、彼の気まぐれから彼の永遠の絶頂は終わりに近づいていた。

個性を奪えるということは、与えることも出来た魔王は、個性をストツクするだけの個性を唯一の肉親である弟に譲渡したのだ。

それは個性のない弟への哀れみなのか、単なる遊びなのか。

いずれにしてもただの気まぐれで行った行為は、現在進行形で彼の首をじわじわと締めていた。

おっと、少し話しすぎました。ここから先の話はまたいずれ。

次はもうひとつ世間を湧かせているニュースとしましょう。

ここ数ヶ月で起こっていた連続失踪事件。

発覚したのは、これまた無個性の弟を持つ兄からの報告からであった。

兄は警察官であり、無個性故に学校内でいじめを受けて、酷く傷つけられた弟のことを——憐れなものだと嘲笑っていた。

兄自身は優秀とはいえないが、親から受け継いだ個性を持っていた。しかし、弟にはなく、兄にはその事が初めは不可解であったが、何の力も持たない弟を蔑んでいた。

しかし、警察官という立場を得てしまった以上、弟も守るべき市民の1人であると判断した兄は、1年以上前閉ざされた戸を叩いた。

だが、返事はない。寝ているのかと何度も叩いたが、反応がない。

これには兄も訝しんで、部屋のスペアキーを持つ両親を呼んでその扉を開けた。

すると、そこには弟はいなかった。家族も弟の事は気にかけてはいたが、不登校で卒業も叶わず、18歳となっても何もせず家に引きこもっているだけの人間に構うことはなかった。

それ故に、悪意ある第三者にさらわれたことに今まで気づかなかったのである。

一体いつからいなくなったのか。食事やトイレは部屋を出たがらなかったのも、個人に任せていたが、簡易トイレには排泄物はなかった。

しばらくすると、父親が弟が好物だからと勝手に自分のクレジットカードを用いて買っていたカップ焼きそばと、それを作るための水の減りが、買った日から今日まであまり減っていないことに気付いた。

兄が通報してしばらくして、複数の警察官がやってきて調査を行うも、いつから居ないかは分からず終いであった。

結果、兄は弟が家出したものだと両親に言つて納得させた。そして、これ以上家族に心配をかけさせまいと弟に帰ってくるようにと、ネットで呼びかけを行った。

するとどうだろうか。日本の様々な場所で無個性の人間を抱える家族から、その人間がいなくなったことが数多く報告された。

その家のように、無個性の人間に無干渉の家族もいたが、無個性だろうが家族と大事にしてきた家族からもさらわれており、これが単なる家出ではなく、本当に誘拐されたのだと兄は理解した。

さらに、数ヶ月後に無個性の人間が行方不明になつていないかという調査を実施すると、ホームレス達から何人かいなくなつていることが報告され、警察はこれを事件性が高いものと判断して捜査本部を設置した。

これだけ大規模な誘拐事件となれば、相手は複数だと睨んだ捜査本部は各所轄署と協力するも、有力な情報は得られずに、捜査は早々に難航した。

そこで警視庁は、とある人物の手を借りることにした。

1人はこの手の事件に精通しており、警察から役職を退いた今でもニュースのコメンテーターやアドバイザーとして、ヴィランの起こす様々な事件の解説を行うメガネを掛けたやや細身の男。

そして、もう1人はアメリカでの研鑽を終えて、堂々と日本に帰国したムキムキなナ



イスガイヒーロー。後に平和の象徴と謳われることになる男である。

警視庁は、担当警察官を1人用意して、その人物に2人へと今回の事件のことを説明した。

担当は、2人とも魔王の存在については把握しているため、新米警察官ではなくベテランを呼ぶべきとの声もあつたが、辞職したアドバイザーから新米だからこそ知っておくべきだという発言があつて、まだ警察官になつたばかりの男が彼らの担当となつた。

そして、説明を受けた2人は警視庁本部が下した結論とほぼおなじような判断をした。

これから狙われる可能性がある無個性の人物の保護と監視。加えて敵組織の実態把握である。これには多数の警察官と、地元ヒーローが駆り出されるほどの大捜査となつた。

このことをニュースで報道することで、意図的な抑制と挑発を行った警視庁本部は敵組織の出方を待った。

世界的に権威を持つとされる科学者の警護には、知人の関係にあつたことからアドバイザーが行つたがそこで悲劇は起こつた。

「南雲は今回の事件どう思う?」

「北原や西村も被害に遭っているからな。……他人事には出来ないな」

学部は違えど、大学時代の同期であった2人は入口と出口を警備する警察官がいるという安全な状況から、温かいコーヒーを飲みながら、今回の事件での、敵の目的を推察していく。

「研究者を誘拐してるということは、おそらく無個性の人を使って何かするんだろうな」  
「無個性の人間を使った改造人間とかありそうだな。攫われた奴らの専攻は人体に精通してる奴らばかりだ」

「攫われてない東山は人体ではなく、機械工学だったか。お前は……人体ではなく、生物だよな」

そう言ったアドバイザーの隣には、南雲博士の行う絶滅動物を復活させるための実験報告書がずらりと並んでいる。

これは多くのニュース番組に呼ばれたアドバイザーもよく知っており、最近では狼のDNAを復活させることに成功したとアナウンサーが言っていたのを思い出す。

「ああ。でもDNAだけではまだ復活とは言えないよ」

本物の狼は、犬のような身体に多くの毛を生やして、大地を駆け抜けるのだ。

DNAだけでは、狼復活の足がかりのみで、実現にはまだ程遠い。そう語りながら、コップを置いた瞬間、部屋の電気が全て消えて部屋は暗闇に包まれる。

「ん？　なんだ？　停電か？」

「ブレーカーでも落ちたか。見てくるよ」

そう言って立ち上がった博士に、アドバイザーは手で制すると、警護に向かわせるようとうと入口に待機している警察官達の方を見る。

しかし、そこには警察官の姿はなく、あつたのはドアの前にある警察官が着ていたのであろう衣服だけだ。

「な、なんだこれは!? あいつら、どこに行った!?!」

動揺するアドバイザーはそのまま怒り任せにドアを開けようとドアノブを掴む。しかし、何度ガチャガチャと音を立ててもドアは開く様子はない。

ドアを何度も、何度も叩いて外の警護に開けるように叫ぶも、反応はない。

そして、そこでアドバイザーは今回の事件の始まりと似ていると気付くと、恐る恐るといった様子で、やけに静かな同期が座る椅子を見た。

「な、なんだ……お前は……?」

そこに居たのは文字通りの化け物であった。

赤い「く」の字に曲がった2本の角。

3つの六角形が目のように並び、口は言葉で形容できないような不気味さを秘めており、顔から下は人間のように手足がそれぞれ2本生えているものの、緑の身体に浮かび上がる赤い模様が非人間さを醸し出している。

変異型のヴィラン……？ いや、自分が見たものでもここまで別の生物に迫った変

異型の個性はいなかったとアドバイザーは身震いする。

不気味で不快な蜘蛛のような姿をした人間と目が合い、その後ろでは守ると約束した同期が氣を失って横たわっている。

警備の人間は殺された。ならば、彼を助けられるのは自分だけと、かつて警察官だった自分の心を奮い立たせたアドバイザーはすぐさま近くにあった灰皿を手にする。

過去のドラマなどではよく殺害道具として扱われてきた灰皿であるが、個性が当たり前前の現在では相手の個性によってその殺傷能力の高さが異なるため、やや心許ないものの無いよりはマシだと自分に言い聞かせる。

「やあ——っ!!!」

恐怖心を捨て去るためにわざと大きな声を出しながら男が突進していくと、化け物は口から蜘蛛が吐くような糸を吐き出すかと思えば、外来種などがよく持つとされる毒針をその男に向かって発射した。

ブスツと。針は男に痛みを与えることなく刺さる。

この程度で俺を止められるものかとさらに自分を奮い立たせようと男は声を上げようとするも、すぐさま自分の身体の異変に気づいた。

「うわああああああつっつ?!? あつ……あああつ!! アアア……」

針が刺さった場所から徐々に身体がどんどん泡になっていくという未知の経験と、痛みもなく自分の身体が溶けていく恐怖から男は苦闘の叫びをあげるもそれはどんどん小さくなり、結局は彼の着ていた衣服だけを残して亡くなってしまふ。

「来い」

蜘蛛男は邪魔者を全て排除すると、廊下で待機させていた戦闘員達を呼びつける。

「運べ」

「イーツ!!」

上司の命令に従うように、眠った博士を担いだ戦闘員達は大学の裏口を通って外に出ると、移動用に用意していた車のトランクへ博士を放り込むと蓋を閉める。

予め、不要な人間達を先程のように身体を泡に変えるという毒針で刺すことで、目撃者や邪魔者を排除していた蜘蛛男は満足そうに今回の結果を首領へと伝えるべく車に乗り込む。

「往くぞ」

誰もいなくなった大学の1棟から走り出した車は、いつしか闇へと消えてしまう。

それからしばらくして、アドバイザーや南雲博士との連絡が途絶えたことを不思議に思った警視庁が気付いて現場に警察官を向かわせた頃には、蜘蛛男は彼らのアジトへと辿り着いていた。

## シヨツカー始動（2回目）

医師という表向きの仕事をしながら、俺が昼休みにテレビを見ていた時のこと。

多数のホームレスや無個性の人間が誘拐され、科学者もまた被害に遭っていることが警視庁から発表されて、所轄とヒーローが力を合わせて事件解決にあたる旨を警視庁のお偉いさんが記者会見で発表していた。

それを見たのが昼間で、夕方になった今、俺の前には蜘蛛男が攫ってきた多くの科学者達が俺の夢を叶えるべく、尽力してくれている。科学者の中には今日攫ってきた南雲博士の姿もある。

シヨツカーは反抗的な科学者は見せしめに殺したり、新改造人間の性能実験に使っていたが、俺のシヨツカーは違う。

個性のおかげですぐに大人しくなり、仮面ライダーや改造人間を作るための研究に手を貸してくれている。

人体や物理、機械工学に生物学と様々な分野においてエキスパートと呼ばれる科学者を多く攫って、院内の地下施設で日々研究をさせている。

代わりと言ってはなんだが、衣食住は保障してやつてるし、家族への手出しは禁じさ



せている。流石に目撃者となれば、話は別だが、気をつかって一人でいる所を狙って攫っているから死傷者は少ないだろう。

それも今日のように多くの警備員をつけていたら無理な話で、蜘蛛男には目撃者は必ず消せと言つてあるので、6人くらい殺してしまつたそうさ。幸運なことは、その場にヒーローが居合わせなかつたことだろう。

蜘蛛男は毒針や糸といった不意打ちや初見殺しが可能だが、格闘能力自体は高くない。一般人には勝てるだろうが、個性を扱うことを許されたヒーローに関してはまだ分からない。

これは調査の必要があると思つたが、ヒーローにもバラツキがあり、近接特化の者もあればその逆もあるし、オールラウンダーもいるはずだ。なので、調査した所で敵対するヒーローによつて結果は変わるだろうと判断した。

けれども、今いるヒーローの現状は知つておいた方がいいだろうと死神カメレオンに脳内に直接、諜報活動を命じる。

不気味な笑い声を出してから、ピュンツと姿を消した死神カメレオンをカメラ越しに見ていた俺は、自分の予想外の怪人の進化の仕方に驚きを隠せていなかった。

特撮のショッカー怪人も急に何も無いところから現れたり、部屋の明かりを消したりと怪奇現象のオンパレードなことをやっていたが、あいつらもまたいつの間にかテレ

ポーション的な能力を身につけていた。

正確には元の生物、蜘蛛男ならば蜘蛛のサイズに戻って部屋に侵入しているのだが。そこから怪人態に戻ることで、まさに今現れたかのように見せている訳だが。

しかし、それでも博士や人を小さくすることは出来ないのです、アジトへの運搬は車で行うことになる。

昭和ならばバレないかもしれないが、平成だとGPSの普及やNシステムのせいで、ショッカーの車とばれたら一瞬で終わりなのだ。しかも、こちらの世界の方が科学の発達は目覚しく、そろそろバレてもおかしくない頃だ。

俺はその事に気をつけて、運搬する際は目立つ蜘蛛男には蜘蛛の姿になってもらい、戦闘員達はまだ姿が知れ渡っていないのをいいことにそのまま車を運転してもらっている。さらには保険をかけて、使った車は全く関係ないところまで走らせて捨てさせている。

金持ちを何人か攫わずに洗脳だけして、金を恵んでもらっているから新しい車を買うのに大して苦勞などは無いため、こんなことが出来る。

けれど、無駄遣いも惜しんでいた昔なら絶対にやらなかっただろうと思う。

ここまで俺は苦勞しているのにショッカーは一体どうやって、人を攫っていたのだろ

うか。

あ、でもよく考えたら誘拐を頻繁にやってたのはXまでだった気がする。うーん、参考にならないな。

一応、シヨツカーは基地を色んなところに作って、科学者達を分散させてそれぞれの場所の研究を行わせていた。そのおかげで運搬距離を短くして、ライダーや警察からの監視網を掻い潜っていたのだろう。

いや、でも、シヨツカーって警察に認知されていたのだろうか。基本的には「ば、化け物!!」と言われるだけで明確にシヨツカーの存在を知っていたのは被害者のライダーやおやつさんを除くとFBIだけだしな。

アンチシヨツカー同盟なんてのもあったが、それもまた被害者の会みたいなもの、存在を認識しているのは当たり前だったしなあ。

これからの動き方について、頭を悩ませているとテレビやネットを監視させていた戦闘員から報告が入った。

「首領、報告があります」

俺はそれを聞くために、アジト内のシヨツカーエンブレムのランプを付ける。怪人や

戦闘員にはこのランプがつくと、俺と会話ができるようになると言ってあるため、戦闘員は俺が耳を傾けていることが分かると報告を始めた。

「まずは本日、蜘蛛男が元警察官と警備員達を殺したことが夕方のニュースにて報道されてました」

てつきり、市民に不安を与えないようにと報道は伏せると考えていたが、そうはしなかったようだ。

それewith続きを待つと、どうやら予想通り保護及び監視対象者の周りにはヒーローをつけて、さらには近くの高速度路付近にて検問を実施するらしい。

かなり税金かかってそうだけど大丈夫？ 誘拐だけで日本が潰れるなんてことは無いよね？

しかし、警視庁も馬鹿ではないだろう。被害者が都内に固まっているなら、強化するのは都内だけに絞るはずである。

ぶつちやけ、予定している怪人が作れるだけの無個性は攫っているし、改造人間やその怪人に付与するデットマンガスなどを作るための科学者集めも本日で終了している。

これからショッカーは準備期間に入りたいのだが、どうやら警視庁やヒーローは早く

にこの問題を解決まで持っていきたいように見える。

その理由はなんだ？

死神カメレオンが集めた情報を基に蠍男や蜂女にまとめてもらった資料を見るも、今のところ警察やヒーローはたった1人のヴィランの打倒に注力していることは分かるも、それが何者なのかは一切伏せられている。

まあ、恐らくは敵同士だし、正面衝突することになるのは利害が一致しない時だ。

どうせ敵の思考はいつの時代も、どこの世界でも変わらない。

強い個性を持ったヴィランが悪事の限りを尽くしており、それにヒーローや警察が手を焼いているってのは何となくわかる。これからそこにシヨツカーも加わる可能性もあるのは気の毒だが、仮面ライダーが生まれるまでの辛抱だ。

『報告、(´)苦勞』

マイクに向かってそう言うと、戦闘員から「イーッ！」という声が返ってくる。

ライダーごっこは多くやってきたが首領側をやったことは無かったので、首領らしい話し方というのに難儀しているが、彼らは本物の首領を知らない。

だから、俺のようなハリボテでもどうにかなっている。

というか、首領は宇宙人だし、ちよいとばかり強い個性を持っただけの人間では測りきれないスケールの大きさだ。

本体は大岩の巨人の中心部にいて、しかもライダーに倒されるのではなく自爆を選んだ勇ましさがある。

身体がただの人間の俺には命が惜しくて出来そうにもない。

……ん？ いや、待てよ。今のショッカー科学陣なら俺を異形の存在に変えることくらいわけないのでは？

それをする、医者という仮の姿が使えなくなってしまう上に、ライダーを7人生み出す必要が出てくる。1号でさえ作るのにも、候補を探すのにも時間がかかっているというのに。

個性ばかりで格闘技が廃れたせいで柔道や空手の有段者ではないし、IQ600超えでバイクレイサーもできる文武両道を極めし化け物はそう簡単に見つからない。

IQに関しては、個性によっては存在するが、頭が良くても肉体は違う。それに個性持ちだとバツタの能力が定着しない恐れがある。

これは……まあ、科学者の増員で俺自ら行わずとも、なんとかかなりそうな気はする。所感でしかないが。

まだまだ山積みの問題を抱えつつも、蜘蛛男からヤモゲラスまでの怪人はしつかり完成している。トカゲロンは素体となるプロサッカー選手の候補を絞り込む所まで終わっている。

蜘蛛男には鋼より硬い糸と人を溶かす毒針を与えた。

蝙蝠男には人間を自在に操るビールスを仕込んだ。

さそり男には人喰いサソリの培養液を仕込んだ。

サラセニアンには人間から栄養分を奪取する能力がある。

かまきり男にはカマキリの卵型の核爆弾の用意を進めさせている。

死神カメレオンにはコンクリートを砕くほどの鋭い舌と重圧力の吸盤を与えている。

さらにカメレオンとしての能力で姿も隠せる。

他の怪人たちにも、特撮版と同じ特殊能力や作戦を与えてやっている。だが、ライダーがいけない以上、彼の能力を發揮する場面がない。

作った者の親心なのか、早く力を發揮して欲しいという自分もいる。

……いや、ショッカーの恐ろしさを知らしめるためには動いてもいいだろう。

俺の見立てでは、怪人を単騎で倒せるヒーローは今はいない。

仮面ライダーのような超パワーや、弱点を見抜く観察眼、それに人間の自由のために戦う心を持ったヒーローは調査した限り現れていない。

だからこそ、個性を持て余したヴィランが蔓延った社会を作っているのだろう。

ショッカーが何もせずとも、悪人は悪人らしく金や金品を盗み、殺人を繰り返している。

しかし、彼らのやっている事では生ぬるい。

人々は知らないのだ。目の前で人が溶解する恐怖を。

骨まで残さないガスという化学兵器の恐ろしさを。

教えてやるとしよう。伝えてやろうこの世界のヒーローの脆弱さを。

そして、彼らは欲するだろう。

人間の自由のために戦う誰よりも優しく、誰よりも強い戦士を。

本郷猛でも、一文字隼人でも、どちらでもいい。

あるいは、彼らに足りうる力を持つものよ。

お前たちが現れるまでショッカーは人間達に恐怖を植え付けるとしよう。

『蝙蝠男、お前に新たな命令を伝える』



彼が待機する部屋へと通信を繋げて、声をかける。  
すると、仮死状態となっていた身体がムクリと起き上がる。

『東京都内のマンションに赴き、お前のビールスの力を私に見せてみよ』

「キキーツ！」

彼は、俺の命令を聞くとすぐさまそのからだを元のコウモリの姿に戻して、都内のマンションが集まる方向へと飛び去っていく。

俺はこれから始まるシヨツカーの日本征服の序章に心を踊らせながら、とある不安を抱いていた。

これでマジでヒーローが負けたら、日本征服進んじやうんだが……大丈夫かなあ……？

次回、恐怖 蝙蝠男

## 恐怖! 蝙蝠男

蝙蝠とは脊椎動物亜門哺乳綱コウモリ目に属する動物の総称である。特殊な超音波を出して、水中で泳ぐ魚の場所を探知するなど、同じく飛行能力をもつ鳥類とは明確に異なる特徴を持つ。

夜行性という特徴の他に、吸血能力を持つ種類がいるため吸血鬼の仮の姿にも使われる動物である。

そして、シヨツカーの作り出した蝙蝠男は、蝙蝠の持つ時速100キロのスピードと人間を意のままに操ることができると恐れられた改造人間である。

シヨツカー首領の命令を受けた蝙蝠男は、日本の首都である東京にあるマンションにて、彼の能力であるビールスの性能実験と、シヨツカーの日本征服作戦に向けての足がかりを作るという重要な役割を全うするため、都内でも多くのマンションが密集する地域へと飛来した。

「ケケケッ!」

背中から腕にかけて生えた羽根を広げた蝙蝠男は、マンションの屋上へと降り立つと、不気味な鳴き声を出しながらマンション内へと通じるドアに手をかける。

夜行性の蝙蝠の特徴を付与された彼は、夜ならば室内でも十分な活動が可能であり、人工的に作られた光程度で動きが阻害されるということではなく、ビールスを投与する人間を探しながら階段を降りていく。

「ふっふっーん、ふふーん〜」

すると、陽気に鼻歌を唄いながら階段を上がってくるスーツ姿の男が蝙蝠男の視界に入る。ネクタイは取れており、ボタンも上から2つは外れており、顔も僅かに上気して、仕事終わりに飲んでできて酔っ払ったその男は、目に映った黒いブーツを見て立ち止まる。

ふと、視線を上げればそこには異形の存在がいた。しかし、異形型の個性で見た目がサイ人間の同僚がいる彼は、目の前の蝙蝠のような風貌をした男もそのようなものだと考えて特に恐怖することはなかった。

「ちよつとあんた、そこどいてくれよ。俺の家、一番上なんだよ」

アルコールが入って、やや上擦った声でそういう男の指を蝙蝠男は見た。

首領には多くの者に感染させるために、所帯持ち、つまりは結婚指輪をしている人間を狙えと言われていた。他にも親がいるであろう子供や、マンション内の見回りなどで動き回る警備員も候補として上がっていたが、目の前の男にはキラリと左手の薬指に光るものがある。

それを見て口角を上げた蝙蝠男は、その男に道を譲るために壁際に寄る。

「ありがとねえい——ガッ!？」

道を空けてくれた相手にお礼を言ったサラリーマンはこれまた陽気そうに鼻歌を唄おうとするも、首筋に走った痛みによってそれどころでは無くなる。

「あ、あんた何をツ……!？」

その痛みはアルコールの酔いを覚ますほどであり、首筋に噛み付いてきた男へと目を見開くと、サラリーマンはその時初めて蝙蝠男の目を見る。

サイ人間である同僚が向けるような、優しい目ではない。

異形型の個性を持つ人間は、その見た目故に個性が当たり前となった今でも差別を受けたり、偏見に晒されたりしている。そのためかヴィランとなる者が多いのだが、普通の人間として日常生活を送るものは、敵意がないことを伝えるためかその表情はかなり柔らかい。

しかし、目の前の異形型は違った。

首筋に突き立てた牙を引き抜いた蝙蝠男は、舌なめずりをして歯に付いたサラリーマンの血を拭き取ると聞き心地の悪い声で笑う。

「くっ……!?! ほ、ほんとに何をしたのだっ……? ま、まさかお前ヴ、ヴィラ……」

「そんな生易しいものではない。我々をあんなチンピラ達と一緒にするんじゃない」

ヴィラン呼ばわりされたことに腹を立てた様子で蝙蝠男が憤慨する頃には、サラリーマンの意識は奪われていた。

「先程のことは聞かなかったことにしてやる」

「……はこ」

否、奪われたというよりは蝙蝠男の手中に落ちた。

サラリーマンは虚ろな目と、顔に紫色の紋様を浮かび上がらせた顔で蝙蝠男の言葉を待つ。

「お前は何事も無かったように家に帰れ。そして、お前の務めを果たせ」

「はこ」

蝙蝠男は自身の放つ声に、ビールズを送り込んだ人間にのみ作用する特殊な超音波を乗せて命令を下す。

すると、アルコールなどはビールズによって中和されて抜け去ったのか、彼はフラフラとした歩き方ではなくとぼとぼとした力無い歩き方だったが、真つ直ぐと自分の行くべき場所へと向かって行った。

「あら、おかえりなさい」

「パパおかえりー」

「ああ……ただいま……」

一家の大黒柱である父親の帰宅を、母親と娘はドアが開く音で察すると目を向けることなく迎いのメッセージを発する。

そのため、父親の顔に浮かび上がっている紫色の模様も、仕事疲れやアルコールとはちがった顔色に気づかない。

なので。

「ッ!? ちょっとあなたっ!？」

唐突に嘔みつかれても対応が遅れる。

「もうパパ何やってるの?」

娘は父親が酔って母親に甘えているのだと思って、深刻に考えずにちらりと視線を向ける。しかし、そこで今、初めて父親の顔を目にした。

「えっ、ちよっ……パパ……?」

甘えている顔ではない。明らかに異常だ。

朝見た時には無かった痣のような紋様に、うつろで焦点の合わない目に娘は怒っている父よりも怖いと感じてしまった。

ガタリと音を鳴らして椅子から立ち上がる頃には、母親にも父親と同じ虚ろな目と顔に紫の紋様が出ている。

娘は震える手でスマホの電話アプリを開いて、すぐさま警察へ通報しようとして指先を動かす。



「キャツ！ なあツ!? やつやめてパパあツ!! ママアツ!!」

しかし、それよりも早く父親がスマホを取り上げて、母親が娘へと牙を立てる。

娘がもがき暴れるも、皮膚をぶち抜いて血管へと流し込まれたビールスが直ぐに娘の脳へと到達すると大人しくなる。

親子揃って蝙蝠男のビールスに侵食された彼らは、家の扉を開けるとそれぞれ別方向へと歩き出す。

父親は下の階へ。母親は右へ。娘は左へ。

それぞれが別の部屋の住人にビールスを浸透させるという使命を果たすために、インターホンを鳴らして、不用意に出てきた住人たちに襲いかかる。

そこからそのマンションに響き渡ったのは阿鼻叫喚。

人が人へと歯を立てる。仲間を増やすために何人も住人が蝙蝠男のビールスに侵されていく。

このビールスにはそれ自体に致死性はなくとも、蝙蝠男が「死ぬ」と言えば死ぬのだ。

しかし、ビールスに冒された人間達は恐れなどなく、曇った意識の中で盲目的に蝙蝠男へと忠誠を誓っている。

「キーキツキツ……実験は概ね成功だ」

その様子を傀儡にした住人たちから覗き見た蝙蝠男は満足気な表情だ。これなら首領も満足してくれるだろうと、褒美を楽しみにしている。

「へえ、これはキミがやってるのか」

背後に立つ気配とその声に反応した蝙蝠男が身を翻すとそこには無機質な男が立っていた。

蝙蝠は夜行性で、視覚よりも聴覚のほうが発達しているものが多い。なのに、話しかけられるまで蝙蝠男の耳にはドアを開ける音も足音も一つ聞こえなかった。

人間と蝙蝠の改造人間なので、視覚は人間程度にはあるので月明かりに照らされた白髪とやや紳士的な雰囲気は蝙蝠男には感じ取られた。

「お前、何者だ」

「ふむ、それはボクが聞きたいんだけど。そうだね、魔王、とでも名乗っておくよ」

魔王？ 些か、ビッグネームが過ぎるとその男の見た目から判断する。

自分と同じ改造人間のようには見えないし、異形型ではないから内に個性を秘めたタイプであろうことは蝙蝠男にも予想出来た。

だが、手には武器もないし、体つきを見ても自分を一撃で倒せるようには見えない。

「では、次はボクかな。キミの名前は？」

「俺の名前は蝙蝠男。偉大なる首領が作った改造人間第2号だ」

「首領……改造人間？ ふむ……面白いことを考える。人間と他の生物の混ぜものか」

蝙蝠男の言葉にやや興味を持ったのか、紳士的な男は上機嫌に目の前の生物の本質を理解するとまた面白そうに笑う。

「ボクの趣味とは違うけど、興味が湧いてきたよ」

目の前の男には敵意はないし、蝙蝠男の邪魔をする素振りも見せない。だが、彼が常人が見れば邪悪としか言いようがない顔でこの出来事の終焉を見守っていた。

蝙蝠男はあとで傀儡にしたマンシヨンの住人の性能テストも兼ねて殺そうと判断して、マンシヨン内に響く阿鼻叫喚に耳をすませた。

結果として、蝙蝠男がやってきてから3時間——日にちも変わってしばらく経った頃にはそのマンシヨンの住人は全て蝙蝠男の手に落ちた。

今回は実験であつたが、ねずみ算式に感染者が広がってるのを見ると、首領の目論見

通りであり、それに蝙蝠男は口角を吊り上げる。

初回であるために時間を要したが、次はこのマンションの人間……総勢116人が隣のマンションへと赴いて連鎖的に増やすだけなので、そう時間はかからないだろう。

特徴的な紫の紋様も、蝙蝠男のように鋭く尖る歯も、蝙蝠男の支配下に置かれてビールスをばらまく時のみのため、その時まで周りにバレることは無い。

その周到性と技術に感服した様子で、紳士的な男は手を叩くと蝙蝠男を讃えた。

「すごいじゃないか。キミも。キミを作った首領とやらも」

当然だと言わんばかりに蝙蝠男は鼻を鳴らすと、次のマンションへと向かうために羽根を広げて飛び立とうとする。

それに男は待ったをかけた。なんだと振り向いた蝙蝠男に魔王は薄く微笑んだまま聞いた。

「ボク、キミの首領に会いたいんだけど……いいかな？」

「俺の一存では決められない」

「それだけの能力を持つてるのに？」

「当然だ。俺のこの力は首領によって与えられた」

よつて、蝙蝠男からすれば、首領は自分よりも遥か上にいる存在である。その実、第2号怪人である自分ですら首領と顔を合わせて話したことは無い。

今まで首領に逆らった者はいないし、蝙蝠男自身にも逆らう気は無い。だが、歯向かえば最後にどうなるかは口にはしないが誰もが理解していた。

「…………ふむ、個性は2つあるのか？ いや、脳を改造されている可能性もあるな」

精神系と肉体を操る個性か、もしくは自力で本当に改造したのか。

どちらにせよ、魔王にとっては興味深い存在であることは言うまでもなかった。

「やっぱり、その首領に会いたいね。連絡手段とかはないの？」

「くどいぞお前」

自分の一存では決められないと言ったから譲歩したつもりであった魔王も難色を示す蝙蝠男に流石に眉が下がった。

「……仕方ない」

本来ならば、魔王である自分が譲歩する必要もなく、下手にでる必要も無い。なのに、自分がこうして交渉するとは、余程舞い上がっていたのかもしれない。

「……キミを殺せば首領も出てくるのかな」

ヴィランはヴィランらしく。欲しけりや奪う。

それだけだ。

出てこないのならば、無理矢理引きずり出せばいい。

「ちゃんと戦うのは、アレ以来だが……はてさて、キミが能力だけでないことを祈るよ」

魔王は大きく手を広げると、先手を蝙蝠男へと譲ろうという姿勢を示す。蝙蝠男は戦う意思はなかったものの、ここで退けば偉大なる首領とシヨツカーの名前に傷がつくではないかと蝙蝠男は逡巡する。

「いいだろう。見せてやろう! 俺の力を! ケケエツ!!!」

魔王と名乗る男に闘争心を剥き出しに高らかに叫ぶと、魔王が背にしている扉から人がなだれ込んでくる。全ての人間の顔に紫の紋様が浮かび、歯は鋭く尖っており、全員が魔王の身体へと進行していた。

「これは……数だけなら確かに多いかな」

自分が相手にしたことあるヒーローや国の番犬に比べたらかなり少ないものの、一度にこれだけの数は経験上少ない。だが、複数の個性を持つ人間の頂点に立つ自分からすれば大したことは無い。

精神を支配されているだけでマンションの住人も自身が持つ個性を使えるようだが、





燃え盛る炎はすぐさま人から人へと広がると、蝙蝠男が数時間かけて傀儡にした人間達を消し炭にしてしまう。

炎の力は万能であるが対策されやすいため、使用を控えていた魔王もこれには些か驚いた。しかし、ヒーロー相手に使うには物足りないなど、最後の残り数名を一撃で消し飛ばすために個性の重ねがけを行う。

「筋力増強に、バネ×3と衝撃波くらいで良さそうだね」

言うと、マンシヨンの住人どころか屋上の給水塔や柵も含めて消し飛ばしてしまう。蝙蝠男はそれに目を見開き、パンパンと手を払う魔王に戦闘型ではない自分では勝てない悟ってしまう。

「さて、やっと君が相手かな。よろしくね」

障害物のなくなったフィールドには、頭のなくなつた人間に最後まで燃え尽きなかつた骨の残りカスくらいしかなく、蝙蝠男は歯噛みした。

初めての作戦で初めての敵との遭遇。予想外だったのはヒーローではなく、自分たち

と同じ部類の悪であることだろうか。

蝙蝠にとって火は弱点だし、頭部がなくなつては死が確定する。さらには先程の個性の重ねかけ攻撃をされては跡形もなくなるだろう。

『蝙蝠男』

そこで自分が敬愛する首領からの言葉が響く。

だがそれはいつもの脳内へのもものでは無く、耳に直接声として届いたものだ。ということは、魔王にも聞こえていることになり、魔王は空から聞こえる厚みのある声の主が首領であると直感すると嬉しそうな表情を浮かべた。

「し、首領！」

『その男を私のもとへと連れてこい』

「よ、よろしいのですか？」

蝙蝠男はどこから見ているのか分からない首領を探すようにしながら問いかける。

『貴様に勝てる相手でないことは、その惨状を見ればわかる。2度も言わせるな』

「はっ!」

敬礼した蝙蝠男は先程まで相対していた魔王へと向き直ると「そういうことだ」と彼の前に立つ。

「では、連れて行ってもらおうかな。ああ、飛行能力くらいはあるからキミの後ろをついていくよ」

「こいつどれだけの個性を持っているんだと考えた蝙蝠男ではあったが、すぐに止めた。

目の前の男は規格外であり、全ての判断は首領がしてくれるだろうと。自分の本来の目的が達せられたのだから、これでいいだろうと早々に結論づけた蝙蝠男は月明かりが雲に隠れた空へと羽ばたく。

そして、魔王はそれにくよくよに羽根も生えていない身体で飛び上がった。

## ショッカー、巨悪と手を結ぶ

蝙蝠男が仮面ライダーでもヒーローでもない人間に絡まれているのを俺が知ったのは、ショッカー科学陣の機械工学チームからの知らせを聞いてからだった。

俺は改造人間にする力はあれど、その怪人の視覚を共有することは出来ない。できることと言えばどこからでも命令を下せる程度で、怪人のピンチを知り得ることはない。

それを案じてか、機械工学チームは打ち上げられている人工衛星のカメラや世界中の監視カメラのハッキングに成功したらしく、そこから得た映像で蝙蝠男が配下にした住人たちが1分も経たないうちに全滅させられたのを見て俺に急いで知らせを持ってきた。

見たら人の頭が無くなってるわ、屋上はほとんどバラバラで、どうして蝙蝠男だけが生きているのかも分からない状況だった。このような危険事態になれば、仮死状態になつてやり過ぎす能力を与えたはずだが、すでに目の前の男に補足されているからか発動しなかつたらしい。

蝙蝠男の戦闘能力は高くないため、このまま奴と戦えばマンシオンから突き落とされることも無く、またベルトに仕込んだ自爆装置が発動する間もなく殺されるのは簡単に

予想出来た。

仮面ライダーでもないやつに俺の怪人が殺されるなんてたまったものではない。加えて蝙蝠男の死体から俺へとたどり着かれる可能性も考慮すれば、いずれは彼と会うことになるだろう。ならば、早い方がいい。敵か味方かの判断は会わねばどうにもならないので、奴が要望していた俺との謁見を認めることにした。

俺は蝙蝠男にその男を連れてくるように命令すると、赤い装束に身を包んだ。白い血走った頭部に眼球をぶち込んだ被り物の上からさらに無数の蛇を巻き付ける。

ふざけているようだがこれがシヨツカー・ゲルシヨツカー首領の正体なのだ。そして、目の部分にだけ穴を開けた被り物をつける。

一応、巻き付けた蛇には俺を守るように洗脳してある。しかも、毒ガスをいれたスプレーと融合させているので、俺に危害を加える者がいれば吐き出すようになっていく。俺は眼球マスクのおかげで毒ガスは効かない。

これも全部シヨツカー科学陣の総力の結晶である。かがくのちからってすげー！さらに蛇を倒されても、眼球マスク状態になると俺を中心に衝撃波が飛ぶようになっており、敵は俺に近づぐことが出来ない。

この辺の機能はプレイステーションのゲームに出てくる首領の能力を参考にさせてもらった。

ただし、当然ながら俺本体はハチャメチャに弱い。

俺がやはり科学陣に改造人間にしてみらおうかなと考えていると、基地入口前の戦闘員から蝙蝠男が帰ってきたことが告げられる。さらにその後ろにはあの男もいるらしい。面倒だなど思いながら、通してもらおうと俺は基地司令室のマイクをつける。

これで変な男と会話ができる。司令室の扉が開くと蝙蝠男と共にあの男も入ってくる。

男はジロジロとアジト内を見渡している。しかし、研究員や戦闘員は下がらせているし、怪人も蝙蝠男以外は別のアジトの設営や諜報任務を任せているからここにはいない。

それは奴も分かっているのだろう。特に質問や言及をすることは無い。だが、俺が目の前に姿を現さない事に、臆病者だとも思ったのか、挑発的な笑みを浮かべた。

「おやおや、首領の姿は見られないのか。残念だね」

ああ、見せない。見せてたまるか。

己を晒すことは相手に対しての親交の証だとも言う。だが、俺の場合は弱点を晒すことになる。俺を殺して組織丸ごと乗っ取るなんてことも考えられる。



それはダメ。絶対。

怪人や研究員達にはこれっぽちも申し訳ない気持ちというのではない。けれど、俺の今までの努力が無駄になるというのはすごく嫌だ。仮面ライダーに倒してもらおうという俺の崇高なる夢が……！ 死ぬのは嫌だけど、自分の選んだ仮面ライダーに倒されるなら構わないという俺がいる。

あ、男の言葉に反応するの忘れてた。えーつと、名前なんだっけ。魔王？ いや、これ名前じゃないでしょ。俺もだけどさ。

『ようこそ、我がショッカーのアジトへ』

このセリフを言うのは仮面ライダーに対してが良かったのになあー！ あーあ、変なのに取りられちゃったよもう！

「ショッカーね。首領の本名か何かなのかな？」

『ショッカーは組織の名前だ。私個人の名前ではない』

意味なんて知らない。子供の時は意味がわからなかったけど、ショッカーはあくまで固有名詞であり、悪の秘密結社の代表格。大した意味などない。

しかし、本当にこいつなんなんだ。興味本位でショッカーに近づくバカではあるまいし。目撃者は殺せと命じているが、殺す前に殺されそうだし。

操つて、危害を加えないようにするなり、自害させるなりするのもいいが、洗脳するには姿を晒さないといけないし無理だな。

一番いいのは協力関係だろう。だが、俺と彼の間に関係を一致させるような交渉材料はあるのかな。なさそう。はあ、もう帰らねえかなこいつ。

###

ショッカー。単なる記号であり、特に意味は無いのだろうが、組織名というのはメンバーの団結を深める上では重要だ。学校で言うクラスや部活という括りと同じである。クラスのために頑張ろう。部活のみんなで戦おう。

世間一般的には素晴らしいと謳われる精神だが、一人で大抵のことはできる魔王には興味が無い。

仲間など不要と考えるも、優秀な部下の必要性は十分に理解している。だから、自分の下に多くの配下がいる。配下にならないものは個性のみを略奪して、その辺に捨て去っている。

人の心の隙間に付け入るのに長けており、恩を売って配下を増やし、敵を煽って自滅を誘うサマはまさに魔王に相応しく、自分自らが動くことは有り得ない。

しかし、今回は興が乗った。初めは自分が個性を奪った相手が次々と行方不明になっているという話を聞いた時だ。次に魔王も耳にしたことがあるような有名な科学者が攫われていると聞いた時。

そして、とあるヴィランらしき者が多くの警備員と元警察官を殺して科学者をさらったという話を聞いて、会うに値すると判断した。

あれだけの人間を攫うのは個性があると考えても、とても1人でできることではない。少なくとも無個性の人間を探る者、優秀な研究員をリストアップする者、それらの人間を攫うもので役目を分けているとすれば、立て続けに起こる誘拐事件も領ける。

組織の行動なのは簡単に予想ができ、あとはその一員からトップの所まで連れて行くてもらえばいい。

そこからの行動は早い。活動範囲が都内なのは分かっているので、あとは配下たちに面白いことが起こっていれば報告するように伝えると、伝令から1時間も経たないうち

に、蝙蝠の姿をした人間がマンシヨンの人間を傀儡にしているとの連絡が入った。

そうして、魔王自らが転移の個性を使って赴いてみればいたのは、無個性の人間に蝙蝠を合わせた異形の混ぜ物。おそらく、自然発生した異形の個性ではない。蝙蝠の個性にしても、あそこまで蝙蝠に寄っているのは異形の個性でも類を見ない。

個性はまだまだ未知な部分が多い。いてもおかしくは無いが、蝙蝠男というのは異形を超えた異形。怪人というにふさわしい存在であった。

個性ではなく、人間に蝙蝠としての能力を付与した改造人間。

そんなものを作る人間が平凡なはずがない。

常識や普通、正義と言ったものではなく、非常識、異常、悪を好む魔王がショッカーに興味を持つのは必然であった。

「……首領、これは提案なんだけど」

『ほう』

魔王がこの世界を征服するのは簡単だ。けれども、それでは面白くない。だから、ショッカーという役者達に踊ってもらおうと魔王は口角を上げた。

魔王の提案に首領もまた興味深そうに声を出すと、蝙蝠男を下がらせた。ここからはお互いに身の内をさらけ出す事になりそうだと考えての行為であった。

『邪魔者はいなくなった。話を聞こう』

「その前に自己紹介といこうじゃないか」

先に名乗ったのは魔王だ。本名は出すことは出来ないと言置きしながら、彼は自らの個性の名前を名乗っていることを明かす。

その名をオールフォーワン。みんなは1人のために。

個性は、他人の個性を奪ったり、逆に与えることも出来る。それを聞いて首領はある考えを思いついたが、今は伏せた。

今度は首領の番だが、彼は未だに姿を現していない。その事に一応の謝罪を入れてから、彼は言葉を発した。

『私はここから遙か離れた星から来た。荒唐した我が星に代わつての住処として地球を選んだが、この世界には無駄が多すぎる。よって、世界征服のための組織、シヨツカー

を作った』

故に自分に名前はなく、名乗るとすれば、ショッカーの首領が最適解であると語った首領にオールフォーワンは顎に手を添えた。

「なるほど。じゃあ、キミが使う力は元来のものなのかな？」

『いや、融合のみ私の寄生先から使っている』

シレッと嘘をついた首領だが、真実か嘘かを看破する術はあれど、確証までは得ることの出来ないオールフォーワンはひとまずは領いた。しかし、洗脳と融合を使って、配下を増やしてきたと言う首領の言葉に嘘は見られない。首領が宇宙人だと言うのは、少しばかり信じられないものの、それが真実でも嘘でもオールフォーワンにとってはどうでもいいことなので、深く追及することはせずにコクリと頷く。

「よし、では提案だ首領」

『待て、私の力の詳細について話していないだろう』

本題に移ろうとしたオールフォーワンに待ったがかかる。個性の詳細というのは後回しにしてもいいだろうが、どうせ聞くなら早い方がいいかと、オールフォーワンは首領の話を待つ。

そして、語られた彼の個性の内容について、わざわざ待ったをかけた理由が分かるとオールフォーワンはほくそ笑んだ。

「ふふっ、それはそれは……ボクの個性と相性がいい個性だ」

無個性に有機物だろうが、無機物だろうが合成してしまう力。個性がある者には、脳のキャパシティが限界を超えるのか不可能らしいが、そんなことは個性を奪い去つて無個性にできる力を持つオールフォーワンがいれば関係なくなる。首領が話しておかねばと思う理由に納得がいったオールフォーワンは笑いが込み上げてくるのを抑える。

『では、お前の話を聞こうかオールフォーワン』

「ああ、首領。これはいい取引になりそうだな」

ここにこうして2人の邪悪が手を取った。

1人はこの世全ての正義を滅ぼし、悪が表舞台に立つ世界を作るため。更には自らの気まぐれが招いた宿敵を倒すため。

片や、自分の欲望のために悪の秘密結社を作り上げた男は、自らが望む最高のヒーローをこの世に作り上げるため。偽りの悪を演じる狂気を孕んだ邪悪さは、真の邪悪にも通用し、オールフォーワンは満足そうな表情で緑のランプが妖しく光る驚のレリーフを見つめていた。

###

一方、その頃、とあるマンションの屋上には多くの警察官とヒーローの姿があった。

「こいつは酷いな」

「はい……あ、シートは剥がさないでくださいね。中途半端に燃えてるのとかあるらし



いんで」

職業柄、死体は見慣れている警察官やヒーローであるが、今回の現場はいつもと同様の事件とは言い難いものであった。

事件が起こったのは都内にある中堅サラリーマンや3人から4人の家族が住むにちようどいいくらいのマンションの屋上。

被害者は自力では歩くことの出来ない赤ん坊を除いた住人全てという異例の事態。そのため、犯人の姿を見たものは誰もいない。しかも、犯人は用意周到なことに、監視カメラに一切映らず、カメラが残っていたのはおぼつかない足取りで廊下を徘徊していた住人たちのみである。

「屋上にもカメラがあれば犯人の姿が映ってたかもしれないんだがなあ」

ポリポリとベテランの刑事が顎の髭を擦りながら、ほとんど立体物の無くなった屋上を見渡す。本来は、給水塔や落下防止用の柵があったようだが、それも見る影もない。

あるのは焼け残った無数の死体のみで、それは何かしらの衝撃波で吹き飛ばされたのかマンションの下にも散乱しているという酷い状態であった。

「顔がわかんねえから身元が分からねえし、こりやそう簡単に終わりそうにねえなあ」

「そもそもなんでこんなことしたんでしょうね？」

見たところマンションの住人を個性が何かで操って、ここに呼び寄せたまでは推測できても、どうして殺したのかまでは理解が及ばない刑事の1人が首を傾げる。

それにはベテラン刑事も同じ意見であり、わからんと答えて持っていたタバコに火をつける。

「まあ、生きてた赤ん坊の身体を調べれば何か分かるかもって科捜研と協力して調べようだ」

そんなことで何かわかるなら苦労しないがと思いながら、大きく息を吸う。

「上は今回の事件について、どう説明するんですかね」

「知るか」

上層部は大量誘拐事件に力を注いでたというのに、その隙をつかれてマンションでの大量殺人事件ときた。しかも、死体の数が登録されている住人の数とは合わないという事態にもなっている。

消し飛んだのか誘拐されたのか、調べるにもかなりの時間を要するというのに、マスコミや世間に説明する余裕などないだろう。

「こういう時、なんでも解決してくれるヒーローってのがいればなあ」

ふと、呟いた刑事の言葉は口から出した白い煙と共に空へと離散していく。個性が見つかって、ヒーローという職業が人気になった今の時代であるが、絶対的な存在というのはいない。

皮肉なことに、悪にはそれがおり、この現場に携わるものは実態こそ知らされていないものの、絶対的な悪がいるというのは認知している。

この事件ももしかするとその存在が絡んでいるのかと思うと、所帯を持たなくて良かったと思いつつ、携帯灰皿に吸い終わったタバコを押し込むと現場を離れようと後輩

に声をかける。

「行くぞ。俺らの仕事はなさそうだ」

「え、でも……」

「いいからいくぞ」

そうやって先に歩き出した2人だったが、その足は止められる。

それも同僚の警察官の叫びによって。

「わああああっ!!? 何をするっ!!?」

「んんんんッ! んんんッ!」

2人が見たのは顔に紫色の紋様を浮かべた警官であり、ベテラン刑事の記憶が正しければ生き残っていた赤ん坊を保護した者である。それが何故か顔色を変えて、どうい

わけか同僚の警察官に牙を立てていた。

噛まれた警察官は力ずくでおかしくなった同僚を引き剥がすも、数秒後にはその警察官も顔色を変えて、心做しか前歯が尖って見える。

「ちつ、不味いなこりゃ」

「え、えええつ!? 何が起きてるんですかこれえつ!？」

「さあな」

ハッキリしているのは自分たちがピンチに陥っていることである。見たところ、殺傷性はないものの噛みつかれると、ねずみ算方式でああなるのは分かった。

噛み付いている時間から、何かを注入しているようにも見えるが、真偽は分からない。とりあえず、観察は置いておいてここから逃げ出すことを考えねばと思考を巡らせるも、屋上の出入口は赤ん坊を運んだ男が入ってきた所だけで、そこでは地獄かと思間違うように悲痛な叫びが鳴り響いている。

「ど、どうします先輩?!」

後輩に言われてチラリと後ろを見る。12階建てのマンションから飛び降りたら、普通に死ぬだろうなと思いつつも、ここで立ち止まっていたら死ぬより恐ろしいことになりそうだと彼の長年培ってきた勘が語っている。

今更ヒーローに応援を呼んでも、この惨状ではミイラ取りがミイラになる未来しか見えない。これが絶対的な正義がない現実かと、後輩の手を握ってドアとは反対の方向へと走り出す。

「えっ、わっ、ちよっ先輩!」

手を引かれた後輩は上擦った声を出しながらも、ベテラン刑事と共に屋上の端っこまでやってくる。ベテラン刑事は屋上から下の様子をうかがうと、顔を絶望に染めた。

「クソっ……下もかよ……」

「ええっ!? そ、そんなあ……」

つられて後輩も下を見れば、パトカーや救急車に乗っていたはずの警察官や救急隊員が正気を失った顔で他のマンションや住宅街……つまり人がいる場所へと進んでいた。

「あーあ、こりゃ死んだ方が本当にマシかもな」

乾いた笑い声を出しながらもその声はとて震えていた。飛び降りて生きていたとしても、結局は自分達も得体の知れない状態になるのかと悟った刑事は肩をすくませた。せめて、後輩だけでもと思ったが、それもかなり難しいだろう。

「悪いな、こんな現場連れてきて」

けれども、歳上として、先輩としての矜持は見せねばと腰から、対ヴィラン遭遇時用に渡されている護身用警棒を引き抜く。

「要は嘸まれなければいいんだろ？」

そう言つてベテラン刑事が雄叫びを上げながら突つ込もうとした矢先に、疾風が吹いた。

肌をかするようで、安心させるような心地よい風の吹いた先を2人は振り返つた。1階建てのマンションだというのにその男は、突如として現れた。

黄色い角のように立つた2本の金色の髪に、逞しいほどに鍛え上げられた筋肉と、赤くたなびくマントに2人は昔夢見たとある存在と重ねた。

きつと、彼らのような正義を求める心、窮地を救つて欲しいと願うものがあれば誰もが思い描くような身体と笑顔を浮かべた男は2人に向かつてこう言い放つた。

「もう大丈夫！ 何故つて？ 私が来た!!」



## 首領 閃く

オールフォーワンとの会合から1ヶ月が経った。結構経ったと思つたら、そんなに経つてない気がするな。

彼との話し合いは俺にとって意義があつたのか。答えはYESだ。

無個性でないと融合出来なかつたという問題が彼の個性によつて解決されたことはかなり大きい。おかげでトカゲロンを作ることが出来たので初期1号が倒す怪人は全て揃つたことになる。

しかし、奴との話はマジで怖かつた。何事もなく終わつてよかつたけれど、面と向かつて会つてたら危なかつたかもしれない。俺自身の個性は強力だが、個性を奪うとかそんなの勝てるわけないだろ。

まあ、融合と同じで触れることが発動条件っぽいけど。姿を晒せば、洗脳出来たかもしれないが、複数の個性を持てることは常人の脳とは別物だから弾かれる可能性がある。あるか分からないけど、精神カウンセラー系の個性持ちなら自滅する恐れもあったし。

ひとまず、こちらの手の内をあまり晒すことなく手を結べたのは幸運だった。俺を過

小評価してるにせよ、気まぐれにせよ、ここで潰されちゃ全部無駄になるからな。

けれど、魔王と名乗る自信があるだけの人間だった。いや、あれは人間なのか？

変声機無しで地声だったら、震えてたかもね。あの時は本当に首領の魂が宿ってた気がする。

大きく息を吸って吐き出しながら、新たに作ったバイオプラントエリアに目を向ける。

戦闘員2号の細胞から、複数の戦闘員を生み出すことに成功したので、生物専攻の科学者に指示して戦闘員量産マシンこと、バイオプラントを作って貰った。

これで本物のシヨツカー戦闘員のように何度倒しても、無限に湧いてくる悪魔の軍団ができるわけだ。まあ、それもガラガラランダが死んだ後にガニコウモルによって殺されちゃうわけだが。

ゲルシヨツカーを作るまでに至るかは今のところ分からないわけだし、そこは考えなくともいいだろう。そもそも、仮面ライダーが1人もいない。真っ先に解決するべき案件があるのに、肝心の素体が見つからない。

文武両道でバイクの免許持つてる大学生くらいの男で無個性とか、マッチングアプリでも少数ヒットしたらいい方の条件だ。

それもオールフオーワンのおかげでどうにかかなりそうだ。

彼の出した絶対条件を呑むならシヨッカーに全面的に協力してくれるらしい。その条件というのが……。

「一人のヒーローを苦しめて殺せねえ」

あんたがやれよと思ったが、なんでもオールフオーワンとは因縁浅からぬ関係のようだ。数年前にそのヒーローと先生の志村さんという女性ヒーローをボコったらしい。勝ち目がないと悟った志村さんが、オールフオーワンから逃げるために時間稼ぎを引き受けた結果、オールフオーワンは素晴らしい喜劇をありがとうって笑いながら殺したらしい。

なら、それもオールフオーワンがやればいいと思ったが、彼曰く「自分を目の前にして、他のヴィランに殺される時の顔が見たいんだ」との事だ。悪趣味ではあるが、協力条件なら仕方がない。

そもその遠因は、オールフオーワンの戯れから始まったらしいのだが、そこは詳しく話してくれなかった。後悔してる様子はなかったから、自分の周りをうろちよろする

蠅をいたぶって殺したいというのは伝わってきた。

他にも、オールフオーワンの傀儡やら下僕が怪我した時の治療やらも任されることになったが、首領の裏の顔が医者なのでそれくらいはおやすい御用だ。まあ、俺はやらな  
いが。

件のヒーローだが、探さずともすぐに現れた。場所は蝙蝠男が襲ったマンション。理由はオールフオーワンに殺されずに生きていた赤ん坊のようだ。

ことの経緯は、赤ん坊にも蝙蝠男のビールスはしつかり浸透しており、保護しようとした警察官に噛みついて2次感染が起こったらしい。現場検証に訪れていた刑事や警察官を巻き込んだの大騒動に駆けつけたのが、最近デビューしたニューヒーロー”オールマイルト”。

筋肉隆々な肉体に恐れ知らずな笑顔、触覚みたいに生えた黄色い髪が特徴の男がヒーロー新聞の一面にでかかど載せられている。目元も黒いし、この触角もなんか仮面ライダー意識してんのか？ そんなことは無いか。

端にはビールスに感染しなかった刑事2人のインタビューが載っており、本文と同じようにオールマイルトが殺さずに、しかも噛まれずにビールス感染者を気絶させて無力化したらしい。前に拳を突き出して生じた風圧だけで気絶させるとか脳筋かしら。

流石、オールフォーワンが殺して欲しいと頼むだけはある。けれど、これだけじゃオールマイトの強さが分からないと思いきや、彼の活躍は連日テレビやネットニュース、新聞などで報道された。

ヴィラン退治はもちろん、災害現場から逃げ遅れた人を救ったりとやってることはまさにヒーロー。だが、他のヒーローとの大きな違いは、本気で全ての人を救いたいと思っていることだろう。

調べてみたらこのオールマイト、どうやら最近までアメリカで活動していたらしく、かなりの活躍を見せていたようだ。その際のインタビューで、この世界にとっての希望の象徴になりたいと話していたそうだ。

つまり、ユニコーン……？ 俺の頭の中でこの世界では聴けないメロディが鳴り響き、ユニコーノスのモチーフってユニコーンだっけと思案する。

——話を戻そう。

つまりオールマイトは根っからの善人だ。普通、尊敬に値する人物が殺されたらすぐに復讐に走るところを、日本よりも断然犯罪規模もヴィランの強さも桁違いと言われるアメリカへと向かって自己研鑽するとは。オールフォーワンから逃れる目的もあったんだらうが、なるほどこれは手強そうだと、俺のゴーストが囁いている。

見たところ、完全な近距離パワー型の脳筋ヤローだ。こんなのに今いる怪人を差し向けたら返り討ちに合う未来しか見ええない。

まず、蜘蛛男。初見殺しの毒針を避けられたら、隙だらけ。

次に蝙蝠男。傀儡の人間が無力化されてる時点でもう無理だろ。

さそり男。鋼鉄も溶かす毒液に電磁バサミを駆使すれば割と勝機はありそうだが、単純な力押しには負ける。

サラセニアンは足が弱い。戦闘目的の怪人じゃないから仕方ない。

戦闘型のカマキリ男はいい線いきそうだが、触角折られたら弱くなるしなあ。

死神カメレオンも剣のような鋭い舌と猛毒ガスがあるが、戦闘向きじゃない。不意打ちでしか勝機がないとか無理ゲーでは？

もうこれ戦闘向けの怪人作って様子見した方がいいか？ 完全な戦闘型のゲバコンドルをしようと思ったが、女の子の生き血が無くなると弱体化……って、なんだこのクソ仕様。誰がこんなことを……ああ、俺か。科学者達にもしもの時（AFOに逆洗脳されるなど）のために弱点を作つとくように言つたせいだった。

オールフオーワンにどう説明すつかな。あのトンデモヒーローを倒せる怪人が今のところいないって言つたら「作ればいいじゃない」って返されそうだしなあ……。

——ん？ いや、待てよ。これはチャンスでは？

オールマイトを倒すための協力なら惜しまないわけだし、あの難しい条件を伝えれば、意外と個性引き抜いて連れてきてくれるのでは?? そしたら、オールマイトなんておそるるに足らずな最強ヒーロー、仮面ライダーが生まれるのでは？

個性持ちならばいい素材がいるかもしれないと、早速俺は蜘蛛男やサラセニアン、死神カメレオンと共に戦闘員を派遣して情報収集をさせる。条件は武道と学問に優れた人間なら個性持ちでも構わないと伝えておけば、優秀な彼らなら適合まではしなくても条件に近い人物を見つけてくれるだろう。バイクの免許はなくても、最悪変身中に乗れるように改造してもらえばいいから除外しておいた。一応、オールフォーワンに伝えておくのも忘れない。オールマイトを倒す改造人間のためと言っておけば、ちよつとは働いてくれるかもしれないだろう。

だが、将来的に自分の見つけてきた人間に倒されるかもしれないなんて……我ながら惨いながらも俺の夢のためだ。安らかに死んでください。

あとは自己防衛だな。下手するとオールフォーワンと拳を交えることがあるかもしれ

れない。その時までには俺自身、あるいはオールフオーワンに対抗出来る怪人を造らねば。なんなら自分を改造しちまうか？ その前に幹部勧誘とかやることが多くて忙しい。幹部に関しては、個性社会に反感を抱いてそうなやつなら、勧誘しやすいだろ。あとは怪人態、人間態の切り替えができる装置の発明を急がせなければ。

そう考えていると、院長室のドアが叩かれる。返事をする、看護師の新田さんが顔を覗かせる。

「あの院長、お客様です」

ん？ そんなの聞いてないがと思っただが、ドアの隙間から見えた顔を見て、俺はS A N値が下がった気がした。威圧感を与えないためか、俺がこの前会った時とは異なる白い清潔感のあるスーツ姿の男は俺を見るなり、ニコニコと笑顔を浮かべていた。

「ああ、通してくれ。あと、お茶は結構だ」

「おやおや、それを決めるのは君ではないんじゃないかな？」



新田さんに速やかな退室を願いつつ、ここには誰も近づけないでくれと暗に頼み、「入れ」とも言っていないのにズカズカと部屋に入ってローテーブルの茶菓子を食べだしたその男を見て俺はため息を吐いた。

「何しに来た。オールフォーワン」

「……ちよつと、お話にな」

###

都内マンション集団死亡事件もつかの間、現場検証などに赴いていた警察官が謎のビールスに感染するという事件は、警察内部はもちろん、世間をも震撼させた。しかし、そんな恐ろしい事件の中でも希望の光はあった。

アメリカでの修行を終えて日本へと帰ってきたニューヒーロー、オールマイトが傷一つつけることなくビールス感染者を気絶させたのだ。

警視庁はビールス感染者を特別病棟に隔離し、世間に存在を公表すると共に対策本部

を設置。日本各地から細菌学に詳しい研究者を招集し、ビールの成分調査を行った。

感染者は顔に紫色の模様が浮かび上がり、歯がより尖って伸びるといふ症状が見られ、無感染者へと歯を突き立てて感染者を増やそうとすることはその場に居合わせた刑事2人からの聴取で分かったものの、それ以外は全くの解らずじまいであった。

それも優秀な科学者の数が圧倒的に不足しており、謎の組織による連続誘拐事件のせいで順調とはいかない結果になっていた。

「せめて、コレの発生源か持ち主が分かればいいんですけどね」

研究者の1人が出した言葉に、この事件の総責任者を任された警視は頭を悩ませた。今回の発生源とされていた赤ん坊からは他の感染者と同じデータしか取れていない。つまりは発生源、ビールの大本は他にいるということである。

ビールが自然発生したのか、それとも誰かが悪意を持って作り上げたのか。警視は広がり方と、その特性から後者だと断定しているが、誰が何のために行ったのかは全く掴めていない。

「あの照井警視」

「福井です。で、どうしたんだい？」

警視が考え込んでいると、とある研究員から声をかけられるも苗字を間違えられてしまった。その事に訂正を入れつつ、研究員の言葉に耳を傾ける。

「私どもでは力になれず申し訳ない」

「いえ、こちらこそ。対策を講じてくれただけでもありがたいです」

研究者を呼んだのは無駄ではなく、ビールの感染方法は感染者の歯からしかないということが分かり、空気感染や飛沫感染などの心配はない。そのため、感染者を室内のベッドで固定しておけば感染が広がることは無い。

ビール感染者は今のところ暴れる様子はなく、「ウーツ、ウーツ」と唸り、近づいた人間に噛み付こうとする以外は問題はないと思われる。

「それですね、もしかしたら解決策を持っているかもしれない人物に心当たりがあり

まして」

研究者のその言葉に警視は「なんですって？」と興味深そうに視線を向けた。

「城南大学の緑川博士です。専攻は生化学ですし、今回の事件の解決のきっかけをもらしてくれるかもしれません」

それではと無駄だと思いつつもビールの研究へと戻った研究者の背中を見送つて、警視は上司に一本の電話をかけた。

「ああ、福井です。少し頼みたいことがあります」

闇雲でもいい。とにかく事件を解決せねばと、福井は藁にもすがらる思いで緑川博士の助力を仰ぐとうと上司へと報告と共に、招集する許可を貰う。

『緑川博士か。構わないよ。たしか城南大学だったか』

「ええ」

さつき調べたばかりだから、よくは知らないのだが。しかし、ネットの検索に引つかかるのは緑川博士の積み上げてきた科学界の革命に関する話が多く、素人の福井にもその凄さがわかった。

城南大学の研究室に在籍しており、確かまだ誘拐されていない科学者であったはずだ。

『緑川博士の研究室は2人のヒーローと交代で警察官6人で警護している。彼らに頼んでそつちに送ってもらおうか?』

「そうですね。できれば頼みたいですが」

『わかった。手配しておこう』

上司はそう言うのと、電話を切る。彼のことだ。やると決まれば即実行。今まさに電話をかけているところなのだろう。

福井は折り返しの電話を待ちながら、ホーム画面に映る妻と息子の姿を見る。

自分は謎のビールス感染事件の担当であるが、家族を持つ身としては科学者や無個性の人間の連続誘拐事件のことも頭にチラつく。妻も息子も個性持ちで、科学者ではないから狙われないと思うが、今世間を騒がせているヴィランは次に何をしてくるかかわからない。

早く敵のしつぽを掴んで、家に帰りたいたいと思い、彼は携帯が振動するのを待っていた。

###

「スポーツ万能、頭脳明晰……これが彼を倒す改造人間になり得る存在か」

ショツカーの首領から伝令を受け取った死神カメレオンにより告げられたのは、オールマイトこと八木俊典を始末するための人間の詳細であった。

首領曰く、改造人間は1から作るよりも、生身の人間から作る方が強力な個体が出来やすいのだという。オールフオーワンもそれに關しては、1人の被検体から作った戦闘員の能力と、彼が自ら作った改造人間を比べれば分かることであつたので不思議に思うことは無かつた。

しかし、改造人間の作成条件は無個性である生きた人間であることのみなので、素体となった人物の身体能力や知能は関係ないはずである。

だが、先日暇つぶしに首領が仮の姿で経営している病院へと赴いたオールフオーワンは飄々と彼の前に現れ、彼が好物にしている茶菓子をツマミながら現れた経緯を話した。

「それなら死神カメレオンに伝えれば良かっただろう」

「気になったらすぐに解決したいじゃないか」

あ、こいつ暇だから来たなとは思ったが、口には出さなかった。

「能力くらいあとでいくらでもいじれるんじゃないのかい？」

基本的に改造手術の手順は、素体に動物をぶち込んでから、科学者の手によつてその怪人に能力を付与するという形になる。例えば、蝙蝠男なら蝙蝠が元から持っている飛行能力や超音波探知などは付与しなくてもいいが、ピールスに関してはシヨツカー科学

陣の力を借りている。これは個性が榮えて、首領が知るよりも科学が違う方向に発展していたから出来たことである。

このような毒ガスやウイルス程度であれば身体能力や知能に影響はない。オールフオーワンの言うような、身体能力の強化も人工筋肉を移植するだけで済むが、今のところ完全に戦闘用の怪人というのが存在しないため、どのような弊害が出るか分からないのである。

そのため初めからある程度完成された人間を素体にすれば、その手間も省けるし、より強力な怪人が出来上がるのではないかというのが首領の意見である。本当は設定に遵守しただけなのだが、相手の思考を読むのは個性を頼らずともできるため、読心術の個性を持ってないオールフオーワンには分からないことである。ただ、なにか別の思惑があることには気づいているが、敢えて静観しているのは魔王の余裕というやつだろう。

「つまり、楽しみたいってことかな」

「そうなるな」



世を忍ぶ仮の姿であるためか、院長の姿をした首領はややフランクであり、オールフオーワンの目から見て隙だらけである。今ならいつでも殺せるなどと思うが、ここは彼のホームグラウンド。無警戒に見えて、護衛の怪人を潜ませてるかもしれない。

首領との契約時に何人かの改造人間を見たが、能力までは教えてもらってはいないため、あらゆる個性を持つオールフオーワンでも油断ができない。

しかし、互いにこのような普通の人間のような姿ながらも、裏では世界を恐怖に陥れようとしている者同士であることにオールフオーワンは初めての気持ちを抱いている。

今まで「世界を我が物に!」「俺がナンバーワンだ!」と自分の個性に自信を持ち、独りよがりの夢を語っているヴェイランは多くいたが、首領のように自ら手を下さずに着々と世界征服に向けて虎視眈々と準備を進めている者は見たことがなかった。その周到ぶりは凄まじく、オールフオーワン以外の目撃者は全て消しており、それを警察やヒーローに即座に察知させないなどオールフオーワンからの評価はすこぶる高い。

彼らなら、自分が招いた悪しき因縁に面白い終止符を打ってくれるかもしれないと、新しいおもちゃを手に入れた子供のようにならうと笑うオールフオーワンは八木俊典を苦しめるために話を切り出した。

「ねえ、首領。改造人間は生きていないと作れないのかな?」

「試したことがないからわからないな」

「じゃあ、試してくれないかな」

とても自分の病院で働く看護師達には見せられないような笑顔を見せるオールフオーワンに首領は無表情で「素体は？」と視線を向ける。それに邪悪な笑みで小瓶に入った髪の毛が出てくる。

「……DNAから作れと？」

「できるだろう？ 君の研究者達なら」

戦闘員の量産に成功したことは定期報告でオールフオーワンも知っており、その時に思い至ったのがDNAから死した人間の再生である。誰の髪の毛だろうかと訝しむ首領に対して、オールフオーワンは過去の自分を褒めるように口を開く。

「いやあ、何かに使えると思って取っておいて良かったよ」

皮膚とかその他諸々は壊してしまったけどねとその時の喜劇を思い出しながら言うオールフオーワンを見ながら、首領は小瓶を着ている白衣のポケットに仕舞う。

「誰の髪の毛なのかは訊かないのかい？」

「聞いても私の知る人物では無いのだろう」

魔王自ら細胞を提供するとは思えないため、首領は彼の表情や言動から過去にオールフオーワンに挑んで倒されたと思われるヒーロー、あるいは警官の髪の毛だろうと想定した。だが、今の首領の興味は全て仮面ライダー作成に注がれているため、この髪の毛が誰のものなのかは興味の対象になり得なかった。

「では、頼んだよ。ボクもキミに頼まれた人間を探させておくから」

「ああ、こちらでも探しておく。いいのがあれば連絡してくれ」

善人悪人は問わないという首領にオールフォーワンは「わかったよ」と首肯する。

八木俊典を殺すのは簡単だ。ただ、自分が手を下せばいいこと。

しかし、八木俊典の願いは正義の成就と魔王であるオールフォーワンを倒すこと。

逆にオールフォーワンの願いは、悪が栄える世の中であること。虚構で憧れた本物の魔王になることである。そのためなら、悪の秘密結社も利用して見せる。

だが、この時の彼は知らなかった。自分が見つけてきた一人の青年が、八木俊典と同じく、人間の自由のために戦うヒーローになることを。

## シヨツカー誕生 2周年

シヨツカーが出来て2年経った。そう2年だ。

この2年のおかげでシヨツカーは、全世界へと網を巡らせることに成功し、悪の秘密結社としての格を上げることができた。

改造人間を各地にばらまいて、世界のあらゆる地域に秘密裏に基地を作らせ、日本だけでなく世界征服という目的を掲げるにふさわしい組織となった。それでいて各国のヒーローや警察には、正体を悟らせないようにするというのは骨が折れたが、それでも僅かな人物が知っているというのは悪の秘密結社らしくていいのではないかと思う。

さらに2年という月日は、念願の大幹部を雇用することにも成功した。それも3人である。中近東支部、ヨーロッパ・スイス支部、東南アジア支部に配備したその3人は、就任してすぐに周辺地域での破壊活動に、殺人、拉致、誘拐、洗脳と悪の組織にふさわしい行動を起こしていた。

全てが過不足なく上手くいってるかと問われれば、現地の選りすぐりのヒーロー達に阻まれているためそうでもない。けれども、常人よりも遥かに強化され、特殊な科学技術を埋め込まれたシヨツカーの改造人間と手数に勝る戦闘員の前では耐えれて、あと2

く3年くらいだろうか。

ちなみにショッカーの認知度であるが、日本で言うところと政府や警視庁の一部と我々の攻撃目標となっているオールマイイトとその関係者くらいだろう。

「首領、オールフォーワンが東京支部に来たそうです」

そうやって口を開けたのは、髪の毛から蘇らせた黒く艶めいた長い髪を下ろした美人の女だ。ショッカーが半年かけて、オールフォーワンから渡された髪の毛に含まれていた遺伝子情報を読み取って作り出した人造人間である。

作り出した際にオールフォーワンへと連絡を入れると、彼は個性である空間転移、いわゆるワープですぐさま基地へとやってくるなり、腹の底から笑い声を上げて俺の肩を叩いた。素晴らしい、素晴らしいよと歓喜に混じった狂気であったが、俺には見慣れたことだったのでどうでもよかった。

しかし、問題になったのがその後だ。オールフォーワンは死体の一部やDNAから人間を再生する際のデータが欲しかったのと、オールマイイトを苦しませるための材料として彼女を提供したのみで、処遇に関しては俺に任せるとのことだった。自分がやってもいいが、今はただの観客でいたいらしい。つまりは俺が監督で、役者をオールマイイトや

怪人たちに見立てているのだろう。本当に趣味が悪い。人のことは言えないが。

性玩具にでも使えばいいじゃないかと言われたが、人造人間のせいも感情の起伏に乏しく、本来は死人である人間に鞭打つ真似をするのははばかられた。あと俺は黒髪は好きだが、ロングよりショート派なのだ。

しかし、俺の沈黙を「ああ、宇宙人だからそういうことはしないのか」と謎の自己解釈したオールフオーワンに、オールマイトを苦しめて殺すための改造人間にしてくれればいいからと丸投げされたので、結局死人に鞭打つことになってしまった。

仕方ないので引き受けた俺は、普通に本来の名前である”志村菜奈”で呼ぶことにした。どうやら世間的には知名度の低いヒーローだったらしいし。オールマイトの近くで呼ばないようにしたらいいだろ。あとクソどうでもいいが未亡人だそうだ。オールフオーワンに言われた。

脳はコンピューター、五臓六腑や筋肉は全て人工物で出来た文字通りの人造人間となった志村菜奈はショットカー戦闘員はおろか、試作型仮面ライダーと言っても過言ではないほどのスペックを有している。思考能力はコンピューターのためその場で最適な判断を即座に下し、パンチはコンクリートを容易く砕き、身体は刃物や弾丸では傷一つつかない硬さを誇っている。

このハイスペックぶりから、そのまま出しても恥ずかしくない性能であるが、下手に

他の生物と融合してオールマイイトにぶつけるのも勿体ない気がして、俺の側近として仕えさせている。

「分かった」

改造人間にしようにもそのあり方をどうするか悩んで結局、何も手が出せずにいる志村菜奈だが、脳をコンピューターにしたことによって、俺が基地の外にいても各支部や基地からの連絡を受け取ることができるようになっていた。

そして、俺はショッカー科学陣の作ったワンタツチで首領の衣服へと変身する装置を起動させる。そうすれば、瞬く間に赤い装束に身が包まれる。

この世界は個性の発達によって、科学があらゆる方向へと進化しており、虚構でしかありえないと思っていたことが可能となっており、このような利便性を突き詰めた発明品も可能にしていた。質量保存の法則は一体どこへやらと思いつながら、俺はカメラの向こうでショッカーの科学者達と談笑しているオールフォーワンを見る。

コイツともなんだかんで1年半くらいか？ 初めは厄介極まりない存在だと思っていたが、緑川博士という生化学の権威がいることを知らせてくれた恩人でもある。蜘蛛



蜘蛛男のやつも知っていたらしいが、奴自身の勝手な判断で攫つて来なかつたようなので、次に勝手な判断をしたらキノコ狩りに行かせるという謎の拷問を強いることを伝えておいた。

どうやら緑川博士にはオールフオーワンも目をつけていたらしく、警察の手に渡る前に回収したかったからと彼は片手で気を失った緑川博士の襟首を掴み、俺が仕事をしていた院長室へと置いていった。護衛についていたヒーローや警察官は、シヨツカーの怪人つぼく始末したらしい。最後のはありがた迷惑とはまさにこのことか？

攫つてきた緑川博士だが、その後に見た報道番組によれば攫うのがあと数分遅ければ科捜研で蝙蝠男のビールの研究に参加する予定であつたようだ。

警察や科捜研、悪の親玉も欲しがる優秀な頭脳を持つ緑川博士だが、彼がもたらしたシヨツカーへの恩恵は計り知れない。

一つ目は課題となつていた怪人態から人間への逆変身を可能にしたことであろう。これにより、素体となつた人間を日常生活へと返してやることができるようになった。まあ、返さないんですけどね。

次に架空の生物であつたピラザウルの作成やこの世界でも絶滅していたニホンオオカミをシヨツカー科学陣を主導して復活するなど「全部お前一人でいいのでは」と思えてしまう功績をあげた。流石に原始タイガーは無理かと思つたが、「ムヒョオーツ！」

と奇妙な鳴き声で叫ぶサーベルタイガーを作りやがった。まだデストロンまで行っていないのに……。

ちなみに”志村菜奈”を遺髪から作ったのも緑川博士である。こいつなんでも出来るな。ただ流石に機械工学はプロフェツショナルに比べるとやや劣るようだ。だから、ここまでの功績は科学者の力の結晶であり、彼一人では成しえなかつたため、全部緑川博士一人で良かったというわけにはいかなかつたようだ。

そうして、ショッカーの科学力が高まつたことで各国への侵攻作戦は進んで、各支部が完成に向かいつつあるというところで、オールフオーワンから紹介してもらつたヴィラン専門のプローカーと名乗る義爛から、幹部候補として何人かのヴィランを紹介してもらつた。

「ここがショッカーか。随分と整つた研究施設のようだ」

1人目は英元ひでもと 天元てんげんと名乗る壮麗な男性であつた。個性に頼らない科学技術の発展を目指す優秀な科学者であつたらしいが、考えの相違から研究チームから外されて、雇用されていた企業からもクビを言い渡されてからは、貯め込んだ資金で他者から個性を

奪つてそれをメモリーカードなどに移す研究を進めていたようだ。

やつてる事が完全に仮面ライダールWに出てくるガイアメモリでは……？

このマッドサイエンティストぶり、死神博士にふさわしい！ 採用！ となり、オールフオーワンに彼の個性を引き抜いてもらった。ちなみに引き抜いた個性は触れた物質を柔らかくする「軟化」だった。

「なんだ。思ったよりは綺麗な場所だな」

現れた2人目の男は死神博士よりもやや若く、衣服の上からでも筋肉が発達しているのが分かる男だった。聞けば、祖父と父が自衛官であり、自分も自衛隊に入隊したのだが、祖父や父から聞いていたものとは変わり果てており、その有様に失望して脱退したばかりだそうだ。

別にヴィランではないのではと思ったが、脱退した際に同期や父と揉めて殺害してしまい、今は指名手配中らしい。名前は宮部<sup>みやべ</sup> 反瓏<sup>そら</sup>。個性は身体の一部をインド象をも失神させる威力を持つほどの鞭に変える「鞭化」。インド象が失神するなら、自衛官は死ぬわなあ。

まあ、組織の規律を重んじて、風紀を大切に作る姿勢はどこかゾル大佐に通じるもの

があるな。これからの成長に投資すると考えて、採用してやろう。

「肉見せて」

「ここに来りや、殺し放題って聞いたぜ」

死神博士とゾル大佐候補が決まったので、地獄大使もこのまま順当にいけば来るだろうと思っていたが、幹部というよりは怪人候補がきた。個性はどちらも戦闘向きだし、改造しなくても素の方が強いだろう。

「肉見せてえええっ!!」

「イーツ!？」

「さあ、どいつからだ！ てめえか!？」

「イーツ!!？」

帰ってもらおうと思つたら近くにいた戦闘員が切り刻まれ、肥大化した筋肉に殴りつけられていた。連れてきた義爛も困り顔だ。基地が血塗れだぜ、どう責任とつてくれるのかしら。

『義爛。2人にはお引き取りいただく』

「へえ、すみませんね」

「ンだと？ オイオイ、出してくれよ俺よりも強いっていう改造人間をよ」

「もつと肉、肉見たいよオ！」

もうお前ら2人で殺し合つてくれよ……。そう切に願いながら仕方ないかと俺は身を潜めていた奥の部屋から、彼らの前に赤の装束を着たその身を晒した。

「へえ、アンタが声の主か」

「……お肉？」

本当はこういうのは柄じゃないんだけどね！ 目を合わせないと洗脳出来ないからねっ！ 全員の全身真っ赤という派手な服装に、視線が集まっている。これなら全員一気に入けそうだ。

「お前たち2人はここから立ち去れ！ そして、私を見た事は忘れる！」

まずは暴れ回った2人から記憶を奪い、部屋から出させる。送りは戦闘員にでも任せるとしよう。

さらに静かにしていた他のヴィランや義爛にも同じように、俺を見た事を忘れるように脳を書き換えて、俺は奥の部屋へと戻っていく。

『邪魔者は消えた。では、最後の君』

「……へ？ は？ い、いつの間に!？」

『君のことについて教えてもらおうか』

「は、はっ！ 暗黒 蛇丸！ 37歳！ アメリカのサンフランシスコで様々な種類のヘビについて研究していたところ、当時アメリカで活躍中だったオールマイトがヴィラン退治のためとはいえ、私の研究施設を破壊した私怨から、正義のためと言いながら犠牲を厭わないヒーローを殺すためにヴィランになりました！」

歳は聞いてないんだが。しかも、他の2人と違って超個人的理由だし。けど、オールフォーワンあたりが喜びそうな話だな。

『ヴィランになってから、どのような悪事を働いたか聞かせてもらおう』

「オールマイトの後援会がある施設に毒蛇を放しました」

『他には？』

「いえ、それだけです！」

『……死者はどの程度出たのだ？』

「残念ながら、熱や吐き気程度で死に至ったものは今のところ……」

なんだコイツ？ 喧嘩売りに来たのか？ まださっきの2人の方がマシに見えるぞ。口ぶりや行動からしてめちやくちや人殺してそうだし。発熱や吐き気を催す程度の毒を持った蛇を放った程度でヴィラン名乗るとか恥ずかしくないのか……？

だが、そのポンコツさ、地獄大使に近いものを感じる。

『いいだろう。お前をショッカーの改造人間として迎えよう』

「ほ、本当ですか!？」

『無論だ』



あとは戦闘員にオールフオーワンのいる所へと案内してもらい、個性を引き抜けば改造手術を施すことが出来る。ぶっちゃけ、今のシヨツカーなら俺の力なしでも改造人間は作れるのだが、こっちの方が早いからな。それに個性は筋肉と同じで使えば使うほど強力になるらしいし、使っておいて損は無いだろう。

あとは合成する怪人だが……おあつらえ向けにダイオウイカにニホンオオカミ、ガラガラヘビがいたなあ。しかも、シヨツカー製のとびきり強力なやつが。

こうして無事に大幹部も出来たため、仮面ライダーの素体以外の全ての問題が解決した。しかし、肝心の仮面ライダーがいなくては、このままだと本当にシヨツカーが世界を征服してしまうという事態になった。

ゾル大佐は有能ぶりを発揮して、中近東を6割掌握しており、他の2人に関しても侵略作戦は半分ほど完了している。

それに引替え、日本支部はというと……全てオールマイトに阻まれていた。

建前上、オールマイトと敵対しなければいけない俺は仕方なく何人かの怪人を送り込んだ。無論、仮面ライダーが誕生してから倒させる予定である蜘蛛男や蝙蝠男ではなく、わざわざオールマイト用に製造した怪人である。

例えば、マンドリルをベースにした怪人や蛇男などを送り込んだが、見事に全て返り

討ちにあった。蛇男は瞬く間に倒されてしまったが、怪人マンドリラーは結構いい線いってただけだな。

元々、マンドリルがパワー系なのとサブウェポンに6万ボルトの電流が流れるしつばをつけてやるとこれが意外とオールマイトといい勝負になった。フィジカルではオールマイトの方が上であつたが、マンドリラーはエレキテールを巧みに操つてオールマイトと善戦するも、体内の電気エネルギーが尽きたところをなんとかかんとかスマッシュでやられてしまった。

他にも晩御飯にする予定だつた伊勢海老とタラバガニで作つたエビ男、カニ男の2人はオールマイトを海中に引きずり込んで優位に立っていたが、無理やり海上に引き上げられた挙句、これまたなんとかかんとかスマッシュで倒されてしまった。

モグラをベースにしたモゲラマンは強烈な光に弱いという弱点を利用して、割れた鏡で光を屈折させたオールマイトの機転により目も当てられない姿となりスマッシュされた。あとは、暴れ牛をベースにした牛男を差し向けてみたが………ダメだつたよ。あいつは言うことを聞かないやつだつた。

だが、この結果を受けてオールフオーワンも真剣に俺の言つた運動神経抜群、頭脳明晰な人間を探す気になつたのか、動き始めたらしい。オールマイトを苦しませるためな

らなんでもしそうだな。

「やあ、首領、牛男がやられて以来だね」

あ、オールフオーワンのことをすっかり忘れていた。この2年は忙しかったが、色々と思いが多いからな。思い返していたらついぼーっとしてしまった。それで何の用だろうか。いつも来るのが唐突で非常に困るんだが。

「ああ、君が言っていた人間が見つかったんだよ」

『ほう』

マジかよ。いたのかあんな年収1000万でタワマンに住んでるイケメンみたいな好条件。

「灯台もと暗しっていうやつでね、優秀な人間のところには優秀な人間が集まるんじゃないかと、君が攫った科学者の助手にいないか探してみただよ」

そしたらと続けたオールフオーワンは何も無い空間に手を伸ばすとワープホールを広げる。するとそこから現れたのは緑川博士であり、オールフオーワンは口角を上げた。

「科学者なんて皆非力なただの人間と思っただけだね、緑川博士の助手に今の世の中じゃ珍しいのがいたよ」

そう緑川博士の肩に手を乗せるオールフオーワンに、乗せられた方はとうとうと少し嫌そうな顔をしている。魔王と名乗るわりには身内と判断したら、フランクだよなこいつ。内弁慶ってやつか。

「首領は空手や柔道ってのは知っているのかな？」

『ああ』

個性社会となった今でも、武術としてその体系を残しており、警察官の全員が空手、柔

道、さらには剣道のどれかを習得することが義務付けられている。だが、知名度はそこまで高くなく、俺の世界にあつた柔道教室や学校の体育での授業には取り入れられていないらしい。

ただ、サッカーや野球は個性の有無に関わらず、体育の授業では人気らしく、世界大会は無くなつたらしいが一部の国ではプロリーグが行われているところもあるらしい。

「じゃあ、話は早い。その空手や柔道で優秀な成績を残していて、なおかつ頭脳明晰なのがいたよ」

頭脳明晰がなければもう一人いたんだけどねと言うオールフォーワンだが、ため息をついた。

「けど、頭脳明晰なのは個性によるものらしいんだ。でも、どうせ脳改造するならなくとも構わないだろう?」

……まあ、確かに。それならそのもう一人のやつでもいいだろうと思つたが、オールフォーワンが個性として欲しいのだろうか。

『いいだろう。それで、その人物の名前は』

緑川博士の助手ということは、城南大学の研究室に籍を置いているはずだ。

——ん？ アレ、なんかこの展開知ってるな。

「それは博士の口から聞こうじゃないか」

さあ博士と肩を組んで顔を覗き込むオールフオーワンに、博士は「すまない」とその助手に詫びてからその名前を口にした。

「名前は——本郷猛」

あ、やっぱり。確か特撮版の本郷も城南大学の研究室で緑川博士の助手をしてって

——は？

「それと——本郷くんには個性がない」

「ふむ、それはどういうことだい？」

「本人が言っていた。自分のは個性ではなく、先天的なものだと」

普通、個性は生まれた時から発現するものと後天的に2歳から5歳頃に発現するものに分けられるらしいのだが、緑川博士の助手である本郷は生まれた時からであるにも関わらず、個性ではないと言い張るのだと言う。

「どうしてかは自分のその頭脳が告げるんだそうだ。両親と全く異なる個性で突然変異型の個性にしてもIQ700はおかしいと」

俺の知ってる本郷猛よりも100高いんだがそれは……。

曰く、生後1ヶ月経った頃には言葉が理解出来て、1週間後には文字が書けるようになり、2歳の頃には個性と非個性の違いが理解出来ていたと。

『オールフォーワン』

「ああ、それなら私が個性を引き抜く必要はなく、君の言う条件を全て叶えることになる。——けど、一応本当に無個性か試しておかないとね」

『無論だ』

そのためには本郷猛をこの場に連れてこなければならぬ。その本郷猛はおそらく、仮面ライダーデイクライドという所のリ・イマジネーション、平行世界における同姓同名の別人であることは分かっているものの、早くその顔を見てみたい。特撮版なのか、原作コミック版なのか、それともスピリッツかNEXTなのか。あるいは全く異なる本郷猛なのかもしれないが、ようやく仮面ライダーが作れることに胸の高鳴りが抑えられない。

『蜘蛛男！ 今すぐ、本郷猛を攫ってこい！』

「ウーッ！」



そうやって数体の戦闘員と共に基地から飛び出した蜘蛛男の姿を見送って、俺はマイクの電源を切ってからほくそ笑んだ。

ああ、やつと、やつと俺の理想が、世界中の人間が仮面ライダーの素晴らしさを知ることになるんだ。オールマイイトなんて目じやない、最強最高のヒーローが生まれるんだ！

この日のために数あるバツタの中でも、最高と呼ぶにふさわしいバツタを用意し、志村菜奈を利用して人工筋肉や心臓、肺などの臓器の性能実験も済ませている。

あとは素体が届くのを待つだけである。

——ああ、楽しみだ。

## オールマイト v s ショツカー

事の始まりは中国 軽慶市で「発光する赤ん坊」が生まれたというニュースであった。以降、各地で「超常」は発見され、原因も判然としないまま時は流れる。

いつしか「超常」は「日常」に、「架空」は「現実」になった。

世界総人口の約8割が何らかの特異体質である超人社会となりつつある現在で、混乱渦巻く世の中で、かつて誰もが空想して憧れた1つの職業が脚光を浴びていた。

混乱渦巻く現代社会において、超常を得たものは大きく3つに分けられた。

超常を振るうことはせず、旧世代の人間のようにごく普通に暮らす一般市民。

逆に自らの超常を悪用し、悪を成す行為を行うヴィランと呼ばれる存在。

そして、悪逆非道を尽くすヴィランから一般市民を守るために自らの超常を使うヒーロー。

広義的には勇姿、英雄を意味する言葉である「ヒーロー」は、ただの超常持ちを超える超常、知識、技術を持ち合わせており、それらを用いて一般社会にとって悪とされる行為を働く者、ヴィランを倒すために敢然と立ち上がった。

虚構が現実となったこの世界では、ヒーローこそが全国の子供たちの夢であり、一般市民の憧れと希望であった。

だが、社会に馴染めずに爪弾きにされた者、今の世の中に不満を抱える者や、ヒーローとは真逆の存在「魔王」に憧れてヴィランになった人間もいる。

超常は今では「個性」と名付けられて、それぞれの人間の1つのアイデンティティとして扱われており、ヒーローのみが公の場で個性を使うことが許されている。ライセンズがなくても、ヴィランと遭遇したための自衛手段として扱うことは許されてはいるが、原則的にはヒーローでない者は個性を使うことが出来ない。

しかし、ヴィランは「悪」である。悪とは社会から許されていない行為をはたらいた者に与えられる名前の通り、彼らは一般市民の犠牲など顧みずに自分達がやりたいようにやりたい事をやる。そんな彼らを捕まえるのは超常社会となった今でも警察の仕事であるが、止めるのはヒーローの仕事である。

個性発現黎明期からこの世全ての悪を体现したような男が現れてからというものの、彼の出身である日本においてヴィランの数は急速的に増加した。皮肉なことに、それに伴ってヒーローの質も高まり、全てのヴィランをねじ伏せることができるであろう、今

現在最も注目を集めているヒーローがいた。

その名をオールマイト。

黄色い触角のように立った2本の髪と筋肉隆々な体つきに、どんな悪の前でも決して笑顔を絶やさずに正義のために戦うヒーローの登場に日本だけでなく、世界中が歓喜した。

デビューは密やかに、しかし活躍は大きく取り上げられるオールマイトの存在に、市民やヴィランは失笑し、誇張表現が過ぎると一蹴したが、たった1ヶ月で都内の警察署に貼られていた凶悪ヴィランの指名手配リストが8割もオールマイトの手によって捕縛されたとなれば、世間の評価はガラリと変わる………はずであった。

個性発現黎明期から数年経ち、警察各所が情報統制を行ったおかげもあるが、ヴィラン界の魔王の存在は秘匿され、世間には一時的な平和が戻りつつあったが、突如として起こった無個性の人間の集団誘拐や、優秀な科学者達の誘拐・失踪事件により、社会は再び不安の闇に包まれた。

警察やヒーローの努力も虚しく、次々と誘拐されていく研究者たちに世間はひどく憤慨した。税金を返せ、何のためのお前たちなのだ。

世間からの弾圧により、警視庁捜査一課長は責任を取って辞職を決意したその日、こ

れまた世界を震撼させるようなマンシオン集団殺人事件とそれを調べていた警察官たちが謎のビールスに感染するという事件が起きた。

たった数時間の間に立て続けに起きた事件であったが、期待のニューヒーロー、オールマイトにより警察関係者には死亡者を出すことなく事態は鎮圧。しかし、ビールスに感染した者たちは未だに血に飢えたハイエナのように、新たな感染者を求めて縛り付けられたベッドの上で牙を光らせていた。

幸い、その事件での感染を最後にビールスの感染は止まっているものの、首謀者の足取りは掴めていない。けれども、現場に駆けつけ、顔が無くなり、上半身が吹き飛び、体が灰になったマンシオンの住人達の無惨な姿にオールマイトはこの事件には”あの男”が関わっていると確信できた。

オールマイトはヒーローになってから日が浅いものの、活躍や注目度はトップクラスであり、早い段階で警察関係者に知り合いができた。福井警視である。

福井は自分が可愛がっていた2人の部下を助けてくれたオールマイトに恩義を感じており、年齢や立場など関係なしに力になれることがあれば連絡して欲しいと彼に自分の連絡先を渡していた。

まさか連絡先を渡した当日の夜に、事件解決の報告と共に協力して欲しいという打診

が来るとは思わなかったが。その内容は個性発現黎明期から暗躍する魔王こと、オールマイトの師匠を殺害した憎むべき相手「オールフォーワン」。警察内部では上層部でしか情報の取り扱えない重要人物であり、警視である福井でも過去の犯罪歴や特徴を集めるだけでも時間がかかる人物であった。

この男と集団ビールス感染事件の犯人グループが繋がっているとすれば福井も手伝わないわけにはいかない。先日、緑川博士を誘拐されて、またもやバッシングを受けて世間からの信頼回復を目指す福井としては何としてもオールフォーワン、あるいはマンシヨンの住人や自分の同僚たちを巻き込んだであろう犯人グループを探すべく上司に取れと命じられた有給休暇も返上して、捜査活動に身を乗り出した。

###

オールマイトが事件を解決していく中で、奇妙な事件が起きた。どこから入ってきたか分からない蛇と目が合うと身体の自由が利かなくなるという事件だ。

昨今の個性による超常化社会によって、動物が個性を持つケースがいくつか発見されたこともあり、「目を合わせることで身体を麻痺させる」という個性を持つ蛇がいてもお

かしくないだろうという結論に至った。

身体が硬直化するだけの個性であったが、目が合った人物たちは痺れに多少の差はあれど、日常生活に支障が現れていた。初めは誰もがすぐに落ち着くだろうと楽観視していたが、痺れを取る方法、緩和させる手段も見つからなかった。

これが全国的に広がれば、ヴィランの侵攻を許してしまうだろうと考えた警察はその蛇の個性を「蛇睨み」と呼称し、事態の收拾を図った。

目を合わせなければ身体が硬直しないならヒーローの手助けは借りずとも警察だけで解決出来る、所轄の警察官だけで捜査を行った。

「いたぞ」

「待て、罨にかかるまで待つんだ」

警察官たちは蛇の好物とされている小動物たちを餌に、個性「蛇睨み」を持つと思われる蛇を発見することに成功。

さらに罨に捕えることで蛇の身動きが取れなくなったことを確認すると、問題の目を塞ぐために蛇へと近づいた。

意外に楽な仕事だったなど笑う警察官たちであったが、1人が急に立ち止まった。

「おい、なんか変な音が聞こえないか？」

「変な音？」

どんな音だよと言う仲間に立ち止まった警察官は「こう、なんか普段聞かない。不気味そのものみたいな……」となんととも形容しがたい物音について説明しようとすると、今度は他の警察官達にもハッキリ聞こえるような謎の音が部屋に響いた。

「へえ、耳がいいんだね。けど、おかげで楽に死ねなくなったね」

「だ、誰だ!？」

「どこにいる!？」

「出て来やがれ!」



自分たち以外に人の姿が見えないというのに、どこからか聞こえてくる澄ました声に警察官たちは身を寄せあつて警戒の色を露わにする。

「では、望み通り出てきてあげるとしようか！」

謎の声の主がそう言うと、突如として蛇を捕らえていたトラップが爆発し、煙が上がります。その光景に警察官たちが目を見開くとそこにいたのは、ただの蛇ではなかった。人間の成人男性のような体つきをした身長が180は超えているであろう蛇の顔をした化け物が彼らの前にいた。

「シヤアツ〜!!」

「「ばっ、ば、化け物!」」

鷹の意匠を表したエンブレムを腰に巻き、長い舌をくねらせながら化け物は言った。

「僕は化け物なんかじゃないさ。死に土産に教えてあげるよ、僕の名前は蛇男！ 我が偉大なる首領が生み出した改造人間さ！」

「か、改造人間!？」

聞きなれない単語に恐怖を顔にした警察官たちは近づいてくる蛇男から距離をとるため後退りをするも、部屋から出るためのドアは蛇男の真後ろであり、このままでは壁に追い込まれて一巻の終わりである。

「光栄に思うといいよ。君たちは僕の第2の能力で殺されるんだから」

「な、なんだと!？」

蛇男は第1の能力である、自分の網膜から人間の網膜へと目に見えない毒素を送ることとで神経麻痺を引き起こす実験は終了しており、残り1つの最後の実験はまだ済んでいないということだった。これが終われば、自分はオールマイトを倒してこの日本を恐怖の海に沈めると。

「そんなことさせてたまるかよ！」

しかし、ここで黙ってやられるほど彼らもヤワではなく、彼らは顔を見合わせて互いに鼓舞し合うと、腰に携帯していた警棒を抜くと3人は蛇男へと突貫する。

「フツ、忘れたのかい？ 僕の第1の能力を」

嘲笑うように蛇男は向かってくる3人へと目を合わせる。

「し、しまった!!」

3人のうち2人はあらかじめ目をつぶって突き進んでいたが、1人だけ目を開いていたために走っていた勢いも余って床へと倒れ伏す。だが、2人は目を開くことなく雄叫びを上げながら突つ込むも蛇男はそれを冷めた表情で見つめた。

「はあ、そんなことしたって無駄なのに……愚かな」

言うとは蛇男はストローのような細さの舌をうねらせ、彼らの喉仏を辻斬る。その切れ味は凄まじく、彼らはあまりの痛みに走りを止めそうになるも無理矢理身体を動かして蛇男に向かっていく。

だが、蛇男は彼らが目を瞑っているのをいいことに進行方向から動く。「そろそろか」と興味深そうに2人の男へと目をやった。

「アツ……アア……? あがあああああああ  
!!!!?」

「ツア………がつ、がはつ!! あああああああああああつつつ!!  
!!!!」

喉を切られて、声を出すのも辛いはずの2人は突如として大きな叫び声を上げる。そして、蛇睨みの神経麻痺に冒されて倒れ伏した警察官が見たのは自ら喉を引つ掻いて絶命をはかる仲間たちの姿であった。

「お、お前ら、なに、やって……………」

「ふふふ、これが僕の第2の能力さ。面白いだろう？」

蛇男第2の能力、それは舌に染み込ませた猛毒である。その猛毒は10数秒で体内へと蔓延し、毒を受けた者はあまりの苦しさから自ら死を選び、毒は死とともに解毒されるという恐ろしい能力なのだ。

「これによりシヨツカーは完全犯罪が可能となり、日本の首脳陣、さらにはトップヒーローの暗殺ができるというわけさ」

「シヨツ……カー……？　なん、だ、それは……！」

「おっと、ちよつと喋りすぎたかな。まあいいさ。君にも死んでもらうだけだからね」

ヒュロロと不気味に伸びた舌に警察官は目を閉じた。自分も彼らのように自決するのかと。

「ふ……や……」

「そうか。嫌か。でも仕方ないね」

蛇男は「嫌」と警察官の呻きを解釈したが、実際はこの後に「これは」と続くはずだった。蛇睨みの神経毒が口にも及んで、言葉が続けられなかった警察官であったが、思考はハッキリしていた。

この能力には大きな矛盾があると。蛇男の能力はどちらも強力であるが、神経麻痺を起こされてから毒を投入されても身体が動かないのであれば自決は出来ない。無論、蛇男が言うには自分から死を選んでしまうほどの猛毒なのだから、自決できなくとも殺すことができるのかもしれないが、警察官には頭脳が間抜けなのかと思わざるを得なかった。

「じゃあね、アデュー」

徐々に迫り来る舌に警察官は微かな希望にかけた。けれども本当に僅かなものだ。わざわざ大声を上げて蛇男に向かったのは何も恐怖をかき消すためだけではない。

自分たちはヴィランなどの犯罪者を捕らえることが出来ても、基本的には無力だ。ど

んなに力を持つとうとも、個性の行使ができない。凶悪ヴィランに対しては手柄をヒーローに譲るしかない。

一部ではその事に不満を上げるものもいるが、彼はヒーローの存在を信じていた。それも金や権力のために活動する偽りのヒーローではない。

自分がどんなに傷つこうとも、あらゆる悪を跳ねのける本当の正義の味方を。

その瞬間、蛇男の後ろから強烈な風が吹いた。

「Texas Smash!!!」

蛇男が無視できないほどの強風と共に蛇男の背後の壁が破壊され、コンクリートの破片が辺りに散らばる。そして、蛇男はその姿を見て舌なめずりをし、警察官はその姿を見ずとも先程のような絶望の顔ではなくこれから起こる歓喜の出来事に思いを馳せた希望の表情であつた。

「私が来た!!」

#  
#  
#

「Hey, You!! ここにいた警察官2人と個性を持つ蛇を知らないかな!？」

「ふふふ、これがオールマイト……話に聞いていた通りだね」

「私のことを知っているのか！ けど、私は君の事は知らないな」

手始めに言葉のジヤブ。無意味な会話にも見えるが、オールマイトは敵側の出方を窺いつつ、他のヒーローや警察官の到着を待つ時間稼ぎをしていた。

人型の蛇という異形型の個性の持ち主であろう怪物は、オールマイトの言葉を鼻で笑った。

「知らなくていいさ。どうせ君は僕に殺されるんだからね」

「そうか、つまり……君はヴィランってことでいいのかな？」



「僕をあんな下等な人類と同じにしないでくれないかな。僕は上位種とも言うべき存在  
さ」

「どういうことかな？」

蛇男の物言いにオールマイトが口を開くと、蛇男は誇らしげに語った。

「僕は偉大なる首領の改造手術を受けた改造人間なのさ」

ニヤリと微笑んだ蛇男は細くストローのような舌をくねらせながら、不敵にオールマイトへと向かってくる。オールマイトはこれから戦闘になると察するも蛇男の背後に倒れる警察官の身を案じた。身体を動かさそうとピクリ、ピクリと身体が震えていることから生きてはいるのだろうが、聞いていたとおりに蛇睨みによる神経麻痺にあったのは容易に想像できた。

改造人間。普通の個性持ちとは異なるのか、オールフォーワンが個性を与えたのか。首領とはオールフォーワンのことを指すのか。

「聞きたいことは山ほどあるが！」

戦う場所を変えさせてもらうと、昔読んだ漫画を参考に両手の拳を突き出すことで突風を生み出すと、蛇男の身体は背後の壁をぶち抜いて空へと舞い上がった。

「警察と救急車の手配は済んでいる！ 君はここで待っていてくれ！」

オールマイトは倒れ伏している警察官にそう言うと、膝を曲げてそれを一気に伸ばすと大きく跳躍した。蛇男を飛ばした方向は特に意図していなかったが、廃工場であり、オールマイトはそこへ降り立つと既に体勢を立て直したのであろう蛇男と再び向かい合った。

「ちつ、中々に荒っぽいじゃないか」

「すまないね。君には聞きたいことが多くてね」

「それを僕が話すとも？」

「いや……思つてないさ！」

言葉と共に大きく踏み込んだオールマイルトは拳を突き出す。コンクリートを容易く砕き、風圧だけで並大抵のヴィランを鎮めてきた自慢の拳を蛇男は余裕の表情で受け止めた。

「くっ！ やるじゃないか！」

「君こそ！」

その威力は蛇男と彼を作った首領の想定を超えていたとはいえ、蛇男が爆死するほどではなかった。バツタの跳躍力と人間の脚力を合わせたキックの威力と比べれば、オールマイルトのパンチは幾分か低いという想定であつたが、受け止めた蛇男の手には僅かな痺れが残り、それが彼のプライドを刺激した。格下だと思つていた相手から考えを改めた蛇男は「お返しだよ」とオールマイルトへの腹部へと膝蹴りをお見舞いする。

「ンッ！ ……………？」

しかし、オールマイトは首を傾げた。自賛するわけではないが自分のパンチを受け止めたのだから、かなりの攻撃力があるのだと思っていたのだが腹部へときた衝撃は軽いもので、あらかじめ攻撃が来るとわかって腹筋に力を入れていたこともあつてか大したこととはなかつた。

「この程度か……改造人間！」

「がはあっ！ 図に乗るなよ人間!!」

掌底が蛇男の右頬を直撃するも、蛇男もすかさずチョップでオールマイトへと攻撃するも、それは簡単に躲かれて身を屈めて蛇男の脛へと肘打ちを食らわせると敵の体勢が崩れる。

「おのれ！」

しかし、それで怯む蛇男でもなく、オールマイトと目を合わせると目に見えない神経毒を送り込む。

「ツ!？」

近距離でモロに食らってしまったオールマイトは身体が急激にだるくなり、屈んだままの姿勢となり立ち上がることが出来ず、何度も脳から身体へと動けと命じるもピクリとするだけで一向に動く気配がなかった。

「フン、これで形勢逆転だね！」

隙だらけとなり、反撃のできない身体となったオールマイトに蛇男はいたぶるように殴打を繰り返していく。反撃することの出来ないオールマイトは殴られ続け、口の中は鉄の味でいっぱいとなり、端からは血が零れ始めていた。

「なんだ大したことないじゃないか」

翔るように蹴りながらそう言う蛇男を睨むようにオールマイトは顔を上げた。

「き、みの目、的は……？」

「……そうだね、これから死ぬんだ。冥土の土産に教えてあげるとしようか」

すると、蛇男は語った。自分の目的を。日本の首脳陣とヒーローの暗殺。さらには無個性人間、科学者達の誘拐や集団ビルス事件に関しても自分たちが関与していると。

そして、勝利を確信すると大体の人間は口が滑りやすくなる。

「ショッカーは世界を征服して、地球を僕たち改造人間の楽園とするのさ」

「……ショッカーか。なるほど、それがお前たちの組織の名前か！」

「何っ!？」

聞きたいことは全部聞けたとオールマイトが立ち上がるのを見て、蛇男は思わず後ずさる。馬鹿な、神経毒は自分が死なない限り永続のはずなのにと訝しむ蛇男はオールマイトへと問いかけた。

「何故だ！ 何故動ける!!」

「決まっているだろう！ 私がヒーローだからだっ!!」

子供たちの夢を守り、みんなの日常を守る希望の光！ それがヒーローだと叫んだオールマイトは拳に力を目一杯込める。膨れ上がった筋肉とほとぼしる血液のビートは血管を浮き上がらせ、蛇男はそれが自分へと向けられるとわかった時オールマイトよりも先に舌の猛毒を与えようと舌を伸ばすが――。

「遅いッツツ!!! DETROIT SMASHッツツ!!!」

「があ”あ”あ”あ”ッツツ  
!!!!???

まるで天候すら変えてしまいそうな痛烈な一撃が蛇男の左頬へと突き刺さり、背後へと大きく身を飛ばす。オールマイトは死んではないだろうと、未だにやや痺れる身体を引きずりながら蛇男へと向かおうとするが、彼の異変に気付いて立ち止まる。

「ふ、ふふっ、み、見事だよ、オールマイト……！ けれど、君はこれ以上、僕を追えない」

「何？」

「僕たち改造人間は個性よりも強力な力を与えられている反面、敗北は許されない……、君のせいで僕の身体を駆け巡っていた毒はめちやくちやさ……」

言われて蛇男をよく観察してみれば、身体の節々が紫色に変色し始めてポロポロと崩れ出していた。神経麻痺の毒と、自殺へと追いやる猛毒が体内で混ざりあった結果、蛇男の身体が崩壊——いや、それより先に爆発するだろうと察した蛇男は生まれ初めて最初に最後、最後の宿敵へと言い放った。



「我々、シヨツカーは必ず世界征服を果たす！ 首領の作り出す改造人間の恐ろしさはもう既にこの世界は知っている！ 君を殺せば我々は目的を果たせる！ 君はこれからも多くの改造人間と戦うことになるだろう！ 君があの世界に来るのを楽しみに待っているぞ!!」

「待て——」

蛇男の毒素が抜けていき身体が自由が戻り始めたオールマイトが彼へと駆け寄ろうとしたその時、蛇男のベルトのエンブレムの中に仕込まれていた爆弾が起動した。

元々、ボロボロに崩壊していた身体は爆発により粉微塵となり、蛇男が死んだことで身体を蝕んでいた神経毒も完全に消え去って、蛇男という存在がいた証明は何一つ残らなかつた。

残つたのは、無個性の人間を改造し世界征服を企んでいるシヨツカーという組織の存在のみ。オールマイトは未だに実体の掴めていない悪の組織の首領とその近くにいるであろう宿敵の存在に顔を強ばらせていた。

###

「ショッカー……ね」

オールマイトが福井の下を訪れたのは、蛇男が文字通りの爆死をしてから数時間後であった。倒れていた警察官からの事情聴取と合わせて、情報の整理を行った2人であったが、ショッカーという組織はどこにも存在しておらず、公には活動していない組織だった。しかし、蛇男が残した言葉から無個性の人間を首領と名乗る人間が改造して、世界征服を企んでいる悪の組織であることは掴めた。

だが、構成メンバーや基地に関しての情報は全くなく、次に彼らが現れるまで待つしかないというのが実情であった。

手がかりである蛇男も死んでしまい、彼が個性を持った超常社会で生まれた人間なのか、彼の言う通り科学的な手術を受けて改造人間となったことでアレらの能力を得たのかもわからず、オールマイトは自分は人を殺したのか、それとも人ならざるものを殺したのかと頭を抱えた。

「こんな時お師匠様ならどうする……？」

流石の彼女でも人か分からないものを間接的とはいえ、殺してしまったとなれば思い悩むだろうか、もうこの世にはいない女性の姿を思い浮かべながらため息をつく。

「まあ、話を聞く限り、敗北者に死をつてのがショツカーのルールだから、蛇男を殺したのは首領なんじゃないかな」

だから気にする事はないと言外に言った福井にオールマイルトは会釈を返す。しかし、まだ納得のいっていないという顔であった。

それを見て福井はオールマイルトから聞いた蛇男の遺言を繰り返す。

改造人間を作るにはやはり無個性の人間が必要であり、改造を主導しているのは首領で間違いない。では、攫われた科学者たちは何をしている？ 外側を首領が作って、毒は個性ではなく科学者たちが作っていると考えるのが自然だ。

目的と手段は分かり、実働部隊と暗殺、誘拐と様々な改造人間が用意されている事も蛇男のおかげで想像はできた。けれども、自分たちが知っているのはたった1体。これからどんな改造人間が何をしてくるか分からない。福井はこれから長く続くであろう戦いを想像しながら、資料作りを進めた。

2日後、福井はこれらの事を上層部に報告書を提出した。だが、蛇男の死体もなく、蛇男の毒も彼の死と共に消え去っていたために証拠がなかったため懐疑的であった。しかし、オールマイトの証言ということもあり無下にするには早計かと検討を重ねて、最近の世間を騒がせてきた全ての事件にショッカーという組織が本当に関わっているのなら、対策は急務だと判断した。

同時に、普通のヴィランと異なる力を持った改造人間を擁し、組織で行動するという狡猾さから捜査一課でも手に負えないと判断して、対特殊犯罪対策チームを設立した。公には、対ショッカーに向けての組織と公表せずに、組織行動で犯罪を犯すヴィランへの対策チームとして発表した。

「これで少しはマシになるといいんだけどね」

「そうですね」

特殊犯罪対策チームのリーダーとして命じられた福井は、ショッカー怪人をその目で

捉え生還したという理由から同じチームに引き入れた新人警官や、ビールス感染事件でオールマイトに救出された刑事2人と設立したばかりでまだ少数であるが、全員シヨツカーの被害者たちだ。

以後はこの4人とオールマイトや対シヨツカーに向けて選抜されたヒーロー達で対処に当たる予定であったが、シヨツカーの狙いはオールマイトばかりで、性能実験と称して無関係の人々を殺し、オールマイトが成敗するという流れが当たり前となつてからしばらく経つた。

シヨツカーの怪人はある時を境にピタリと姿を現さなくなつた。発電所を襲つたマンドリラーや、漁船の沈没事故を引き起こしたカニ男、エビ男も倒し、つい先月自らを闘牛戦士と名乗る怪人うし男を下してからは、何の音沙汰も無くなつていた。

誘拐事件も緑川博士を最後としており、これ以後は無個性の人間も優秀な研究者の誘拐事件も起こっていない。オールマイトはシヨツカーが現れなくなつてもいつも通りであり、日本中をその足で飛び回っては各地のヴィラン逮捕に協力していた。

一方で特殊犯罪対策チームはというと、これまで現れた怪人と活動内容のレポートはとつづくにまとめ終わっており、暇を持って余していた。

「暇ですなー」

「俺らが暇なのはいいことなんだがなあ……」

「他のウイルスは元気に動き回ってるもんね」

そのせいでオールマイトは大忙しさと笑う福井に笑い事じゃないでしょとビールス感染事件で生還した渡真利が呟くと、後輩の珂神がですなーと同調する。

「そういえば、後藤くんは？」

「ああ、うし男事件の時にたまたま居合わせたカメラマンのそこに行ってるみたいですよ」

後藤とは蛇男の神経毒にやられて倒れ伏していた男で、この中では一番階級は低いものの、福井を含めて年齢や地位を気にしない人柄のため直ぐに馴染めていた。

「確かフリーのカメラマンだっけか」

「はい、非公式のプロレス大会の取材のために近くにいたみたいです」

個性が一般的となった今では、日本最高のヒーロー育成機関の運動会が主流となっており、過去に世界を熱狂させていたという格闘技は地下大会にまで衰退しており、公の大会も年に1回あるかないかというところまで追い詰められていた。しかし、今でもプロレスを愛する者は存在しており、そのカメラマンは非公式大会にまで赴いて、プロレスファンたちへと向けた写真を撮ろうとしていたところにうし男事件の現場近くに居合わせたというのがオールマイトと本人からの話である。

「事情聴取は福井さんがやったんですよね？」

「うん。面白い青年だったよ」

福井はその時のことを思い出して微笑みながら、その青年から受け取った簡素な名刺

を見遣りながら、つかの間の平穩に心を満たしていた。



## 誕生！ 仮面ライダー

「……は……どう……だ……つ……!? 俺を、俺を自由にしろ……!」

青年が頭痛に苛まれながらも、瞼を開けて出た言葉であった。

大の字になって暗い天井を見つめながら、青年は意識を取り戻しながら、状況を確認する。

周りにいるのは白衣に身を包んだ赤や青のフェイスペイントをした男たちで、自分は円状の台に乗せられて身動きが取れない状態となっていた。

青年はどうしてこうなったのかを探るため、自分が覚えている限りの記憶を思い出すことにした。

世間がニューヒーロー、オールマイトの誕生や謎の組織による誘拐事件やビールス騒動によって騒ぎ立てる中、変わらない日常を過ごす青年は愛車のバイクに跨って疾走する。

——その青年の名を本郷猛。

城南大学科学研究室に籍を置く、IQ700の若き天才である。頭脳明晰にしてスポーツ万能、特に趣味で始めたバイクでの素質が光り、オートレーサーとしての活躍が見込まれる——はずであった。

個性社会により、旧来の娯楽のほとんどが衰退し、スポーツ競技のほとんどは個性持ちのエンターテイナー達を取り仕切り、車やバイク、果てには競馬といった個性を用いない競技に関しては過去ほどの人気はなくなっていた。

そのため、本郷猛はオートレーサーではなく、生化学の権威である緑川博士の助手をつとめながら、彼の研究を引き継ぐべく日々勉学に励んでいた。

しかし、名だたる科学者の集団誘拐事件に際して、本郷の師である緑川博士も狙われる可能性があるとしてヒーローや警察の監視の下での研究を強いられていた。警護のため仕方ないとはわかりつつも、やはりチラチラとぶつかる視線は繊細な作業を要する研究において、フラストレーションが溜まるものであり、助手たちの集中力が散漫してすることに気付いた緑川博士は彼らにこう告げた。

『騒動が落ち着くまでは研究を中止。君たちには暫く休暇をあげるから、十分に休みなさい』

狙われてるのは自分であつて、助手たちでは無いのだからと言つた博士の言葉に、ヒーローと警察は了承して、本郷をはじめとした助手たちはこうして休暇を過ごしていった。

本郷はバイク通学のため、大学から少し離れたアパートで暮らしている。他の助手たちは大学近くの寮やアパートを借りているため、会つたのは休暇から3日目のみで、以降は顔を合わせていない。

どうせ研究室で会えるからいいだろうという判断であるが、本郷にとってはありがたいことであつた。

何もかも優れている人間というのは、周囲に尊敬なり畏怖なり、何らかの感情を伴つた視線に晒される宿命であり、本郷は他の同僚達が自分に対してあまりいい感情を持っていないことをその優秀すぎる頭脳ゆえに理解していた。

本郷のIQ700というのは個性社会の中では珍しく、個性によつては、本郷のように常人では考えられないような知能を持つ人間というのは多くいた。例えば、本郷の知

る者の中にはネズミという身ながらも個性によって、人間以上の知能を有している者がいるが、本郷と並ぶものは今のところ存在しない。かの魔王でも様々な個性を組み合わせてもIQ700という未知の領域には至れないほどである。

そのため、近くに自分より遥かに賢いという人物がいれば、当然劣等感を抱くものは大勢いた。しかし、政府や文部科学省の出した個性だから仕方ないという風潮のため、悪質ないじめは受けなかったため、幼少時代の本郷の人間性は屈折することなく真っ直ぐに育っていた。

けれども、彼の『IQ700』というのは個性ではなく、そもそも本人が持つ資質なのだ。それを本人は理論的根拠がなくとも、その規格外の頭脳が告げたのだ。

これは個性であって、“個性”ではないと。

アイデンティティであっても、個性とは違ったどんな人間でも一定確率で辿り着ける境地であると。

だが、本郷はそれを晒すことなく、父と共に市役所に赴いて個性届けの用紙に『IQ700』と書き込んだ。無個性だとバレれば、両親は悲しまずとも、結果的に悲しませることになることを危惧したからである。

個性を持つのが当たり前となりつつある社会で、自分に個性がないとわかれば、周り

はどんな反応をするかは容易に想像できた。

昨日まで隣で笑いあつて遊んでいた友達が自分に石を投げつけてくるかもしれないし、優しくしてくれていた近所の人が憐れむような目を向けてくるかもしれない。自分だけが傷つくのであればいいが、両親にまで及ぶのであれば、虚言も吐こうと本郷は数十年の間嘘をつき続けた。

小・中・高の学力試験では、学年首位を獲得ことはなく3位に甘んじていた。

スポーツ競技に関しては、個性の使用が禁止されてることもあつてスポーツテストなどでは幼い頃からの父の英才教育もあつて、トップクラスの結果を残すことができていた。厳格な父と健康志向の強かった母の進言で空手と柔道をやっていたこともあるが、本人の生まれつきの運動神経の高さが大きかった。

だが、それが強力な個性持ちの氣に触れて何度かいざこざに発展しそうになつたが、そこはIQ700の頭脳で大事にすることなくキリ抜けてきた。

そして、大学生となつた本郷はこれまた父の勧めで城南大学へと入学し、後に緑川博士の助手として過ごしてきた。IQ700の頭脳は、聡明な緑川博士も頼りやすいのか論文についての意見交換に役立ち、プライベートでも各国が行っている研究に関しての私見を述べ合つたりと悪くない日々を過ごしていた。

あまり友人には恵まれなかったが、自分よりも歳上の大人たちには恵まれており、本郷も後輩にとつてそういう人間でありたいと思つていた。

しかし、一年半ほど前にとうとう緑川博士にも謎の組織の魔の手が迫り、誘拐されてしまった。警護にあたつていたヒーローと警察官たちを死体も残さずに暗殺したヴィランは緑川博士を攫つて姿を消した。

悪の組織の存在は未知の部分が多いものの、オールマイトという抑止力のおかげで勢いは弱まっているのではないかというのがジャーナリストの見解である。だが、肝心の根つこの部分、彼らの基地や拠点はヒーローや警察が総出で探しているもののしつぽの先も掴めていないらしい。さらに聞いたところによれば、外国でも不審な殺人、誘拐事件が起きているらしく、直近ではとある国の電気施設が破壊されたというニュースがあつた。

オールマイトという正義の象徴と呼ぶに値するヒーローの台頭もあつて、世間はまだ明るいものの、謎の組織の存在はヒーローや警察はもちろん、本郷のような一般市民の心も曇らせていた。

そんな本郷だがある日の休日、後輩と共にツーリングに出ていた。

「どうだ、おやつさんの整備したバイクは」

バイクを止めて、ヘルメットを外した本郷は同じく自分の隣に停車した3つ下の後輩へと目をやる。

「そうですね。先輩の言う通り、近所のバイク屋が点検したよりもエンジンの音がいい感じがします」

本郷に問いかけられた爽やかなイケメンの青年が頷くと、本郷は「そうだろう」と朗笑する。それからも2人は共通の人物に点検してもらったバイクを走らせていく。しばらく経って、後輩が妹の迎えに行かなければならないため、途中で別れた本郷は自分もそろそろ帰ろうかと帰路へと向かう。

その途中であつた。

「なんだ？」

後ろから自分と同じくバイクにまたがる女性達が背後から近づいていた。そのスピードは速く、とても法定速度を守っているとは思えないものであった。

危ないなと思いながら、本郷は左に寄ろうとサイドミラーから視線を外す。すると、今度は左側通行など無視して道路全体に広がってこちらに向かってくるバイクの1団があつた。

不気味な連中だと悪態つきながら、本郷はエンジンを吹かせる。このまま進めば正面衝突は避けられない。だが、本郷は小さな段差を利用し、車体を宙に舞わせるとその勢いで目の前から走ってきた集団の頭上を飛び越える。

そうすると、前から来ていたバイク乗り達は本郷の背後に迫っていたバイク乗り達と衝突し、大惨事となっていた。それにはさすがに命の危機に瀕していたとはいえ、本郷も焦りすぎさまエンジンを止めようとする。

しかし、突如として本郷の視界が白く染る。

「うわあああつ!?!」

バイクが横転し、本郷は受け身をとることもできず、身体中にへばりつく白い粘着質な糸のようなもので絡めとられる。



身動きを取ろうにも拘束された身体では上手く動くことができず、その場でじたばたしていると、バイク同士が衝突して立つこともままならないはずの女性達が「アハハ」と笑いながらこちらへと進んでくる。

——そこで本郷の意識は途絶えた。

そして起きたら謎の白衣の集団に囲まれている。これはどういうことだと逡巡するも、妖しく光る鷲のレリーフに気を取られてしまう。

『起きたか、本郷猛。ショッカーの秘密基地へ、ようこそ』

「シヨツカー!……?」

聞き慣れない名前だと本郷は眉に皺を寄せる。

シヨツカーとは全世界に網を巡らせる秘密結社であり、メンバーは世界のあらゆる地域に秘密裏に建設された基地に配備されており、殺人、拉致、誘拐、洗脳などの工作を行っている。

本郷はそれを聞いて、2年前から始まった無個性の一般人や科学者の連続誘拐事件も彼らの仕業ではないかと思に至る。

「俺を攫って一体どうする気だ!」

しかし、彼らの目的は未だ不明であり、本郷は怒気を孕ませた声で問いかけると、答えたのは驚のレリーフの向こう側にいるであろう者ではなく、本郷を取り囲むように立っている白衣の男たちであった。

「本郷猛」

「IQ700」

「特技。柔道、空手」

「頭脳明晰、スポーツ万能」

「これにより、首領の言うオールマイトを倒すための条件を全て達成」

「よつて、シヨツカーは君を対オールマイト用の改造人間に改造した」

無機質で機械的な口調で淡々と述べられていく言葉に本郷は「何？」と顔を顰める。

「俺を、改造人間に？ 馬鹿なことを」

「では見せてやろう」

そんなことがあつてたまるかと鼻で笑つた本郷に、科学者達は何かのスイッチを起動させる。すると、本郷に向かつて多方向から強風が吹き荒れる。それは本郷が目を閉じること強いられるほどの強い風であつたが、何故か本郷にはそれが苦ではなく、むしろ自分の身体に力が溢れてくるような感覚であつた。

しばらくして風が止むと、一人の科学者が言つた。

「これより君の身体に5万ボルトの電流を流す。ゴム人間や雷に対する耐性のある個性がなければ、一瞬で身体が焼き焦げてしまうほどの電圧だ」

「しかし、先程の風で風力エネルギーを溜め込んだ君には耐えることが出来る」

目配せし、他の科学者が電気スイッチを起動する。緑川博士のもとで科学者として活動していた本郷には5万ボルトの電圧の恐ろしさを理解していたため、彼らの言う通りならば自分は焼き焦げてしまうと恐怖で目を閉じた。しかし、結果はどうだろうか。嫌に変な耳鳴り、電流の迸る音が聴こえるだけで自分の身体にはなんの変化も無い。痛みもなければ、痺れもない。その事に本郷は身震いすると、改めて自分の身体を見た。

首から下はバイクに乗っていた時の服装ではなく、黒を基調とした材質や構造の分か

らないスーツに、胸筋や腹筋の周りには緑色のアーマーのようなものがついている。肘の下から手首にかけても同じようなモノが巻きついており、それよりも目を引いたのは赤の風車の付いたベルトであった。

なんだこれはと驚愕に目を見開く本郷に科学者達は本郷が5万ボルトの電圧に耐えたことに頬を緩ませ「どうだ、わかつたか」と口にする。

「君はここに來てから1週間、シヨツカー科学陣の誇る全ての技術を注ぎ込んで作られた改造人間となつたのだ」

体内に埋め込まれた風力エネルギーを取り込むためのベルトに、本郷と融合したバツタの跳躍力、超小型原子炉を用いたエネルギー炉、5トンの重量を持ち上げることの出来る怪力に、常人の40倍の能力を持つ聴覚、赤外線を発射することで夜でも昼間と同じく見通すことが出来る視力4.5にまで強化された視力など、これまでに製造されてきた改造人間とは比較にならないほどの高性能さをみせる改造人間となつた。

これに本郷猛本人が持つ、格闘センスに頭脳が加われば正義の象徴とまで謳われたオールマイトなど恐るるに足らずというのがシヨツカー首領と科学陣の出した結論であつた。

中でもタイフーンと呼ばれるベルトに付けられた風力エネルギーを取り入れる装置は、科学者達の自信作であり、恐らくこれと全く同じものが作れるかどうかは分からないと言わしめるほどである。非使用時は体内へと格納され、本郷の意志によって体外へベルトとして顕現させることが可能となっている。

「我々は憎きヒーロー、オールマイトを倒し全世界へと大攻勢をかけて、世界をシヨツカーのものとするのだ」

「君にはそのためにオールマイトを倒す役割を果たすべく、ここに連れてこられたのだ」

「そんなこと、してたまるものか!」

「最初は皆、そう言うのだ」

「しかし、残された意識もこれから行われる脳改造によって失われ、君はシヨツカーの最高傑作として、正義の象徴を打ち崩すのだ」

科学者は麻醉薬の入った注射を取り出そうと本郷に背を向ける。本郷はその隙に逃げられないものかと身体に力を込めた刹那であった。部屋を灯していた妖しい光が消え、代わりに静寂に包まれていた基地内をけたたましい非常警報が駆け巡った。

「イーッ！ 制御室がやられました！」

「なんだとっ！ すぐに原因を調べるぞ！」

電気がなくては脳改造が出来ないため、全ての科学者達が部屋から駆け足で出ていく。驚のレリーフも電気の供給がなくなったためか、光を失っており、本郷は先程蓄積された風エネルギーを用いて腕と脚の拘束具を無理矢理破壊すると身を起こした。

ここから早く脱出せねばと辺りを見渡すも、出口は彼らの出ていった1箇所のみ。このまま出ていっても、きつとまた捕まるのが関の山だろうと歯噛みすると、視界にとある人物が映った。

「本郷くん！ 無事だったか！」

「——緑川博士!？」

まさかの再会に本郷は大声を出してしまい、すぐさま閉口すると、緑川に視線で「どうしてここに」と尋ねる。

「脳改造の寸前に君を助けられてよかった。早く脱出しよう」

「……ですが、博士、我々だけで脱出するのは不可能です」

緑川は本郷の質問に答えなかったものの、本郷もここから出ることの方が優先すべきことであつたため、博士に進言する。

「この天井を突き抜ければ、外へと繋がる通路がある。本郷くん、君の力なら行けるはずだ」

「お言葉ですが博士、私にそんな力は」



「ある。シヨツカーに改造され、風力エネルギーを溜め込んだ今の君ならできるはずだ」

博士の確信のこもった視線に本郷は頷くと、緑川を寄せて跳躍した。

緑川の言う通り、風力エネルギーを体内に蓄積していた本郷は天井を突き抜けて、太陽の光が差し込む廊下へと出る。

外へと出るとそこは日本のどこなのかも分からない岩山に囲まれた地帯であり、秘密基地を作るにはピッタリと言うべき場所であった。

本郷は緑川と共に山道を下っていくも、その足は突如として現れた赤や黒の装束を着たフェイスパイントをした男たちに阻まれる。

「イーツ！」

「イーツ！」

「なんなんですかこいつらは！」

「シヨツカーの戦闘員だ！ 君と同じ改造人間だ！」

急に現れた不気味さと、改造人間という言葉に本郷は簡単に逃がしてはくれないかと顔をくもらせる。博士を守りながら、彼らと戦うのでは分が悪いと判断するや否や本郷は、強化された視力で自分が乗っていたバイクが置かれているのを発見する。

「博士!」

本郷は博士に声をかけると、先程と同じく彼を抱えてジャンプすると、自分のバイクのところで着地し、エンジンをかける。

後輩とのツーリングで消費していたであろうガソリンは満タンになっており、本郷はそれを訝しみつつもバイクを走らせる。

とにかくここから離れようという一心でエンジンを吹かせていると、本郷をまたあの白く太い粘着質な糸が襲う。

「うわあああつつつ!」

「ほ、本郷くん!」

本郷は間一髪として、緑川博士のみを柔らかい土のある道へと振り落とすと自分は崖下へと消えていく。緑川はその光景を悲壮な顔を浮かべながら見つめ、背後に迫る気配にその恐怖を強くした。

戦闘員だけならまだいい。しかし、戦闘員の前に立つてシヨツカー怪人第1号とされる蜘蛛男が立っていたのだ。

「シヨツカーを裏切った者は排除する」

「う、うわあああつ!!!」

若くない身体にムチを打って緑川は走るも、数人の戦闘員に囲まれてしまい、逃げ道を塞がれてしまう。絶体絶命という危機に、蜘蛛男は不気味な足取りでじわじわと近づいてくる。もうダメだ、おしまいだと身を強ばらせたその時であった。

「待てい!!」

その声のする方向を、緑川、蜘蛛男、戦闘員たちが見上げる。

深緑のマスクを被った戦士は赤い複眼のような眼を光らせ、触角のように立ったアンテナを唸らせ、赤いマフラーを靡かせながらそこに立っていた。マスクから下は本郷が先程まで見せていた姿であり、その声からもマスクの中身の人物は誰もが確信できた。

「生きていたのか!？」

「行くぞ！」

トウツと飛び上がった戦士は、空中で一回転すると緑川を取り囲む戦闘員たちの前に着地する。そして、すぐに戦闘員たちへの攻撃を開始した。

「トオツ！」

一番近くにいた戦闘員に右ストレートが突き刺さり、その威力は常人よりも強化された肉体を持つ戦闘員の身体を一撃で後方へと吹き飛ばすほどであり、底の見えない崖下へと落ちていく。

「トウツ！」

2人目の戦闘員は向かってきたところを背負い投げされ、地面に叩きつけられる。続

いて3人目も隙だらけの背中を狙って突撃するも、顎にハイキックが突き刺さり意識を刈り取られる。4人目、5人目も腹部への重いパンチ、アッパーカットで撃沈し、瞬間に残るは蜘蛛男のみとなった。

その光景を間近で見ていた緑川は先程とは全く別の感情を伴って身を震わせていた。「まさかこれほどまでとは」と目の前で起きている光景が夢のようであった。

ショツカーの作り出す改造人間は、戦闘員だろうが普通の人間では太刀打ち出来ず、ヒーローでも戦闘系に特化していなければ返り討ちにできるほどの力を持っていた。それがたった数秒で虫の息となったことに緑川は喫驚し、さらにはその戦闘員よりも遙かに強いはずの蜘蛛男を圧倒する勢いで追い詰めている教え子の姿に打ち震えていた。

だが、改造人間としての経験はあちらの方が長いためか、蜘蛛男は徐々に戦士の動きに慣れ始めるも、手下を失い、足場も悪い状況での戦闘継続は危険と判断してその姿を消す。

戦士もここが引き時と判断すると、緑川を連れて彼らの在籍する城北大学近くへと帰還した。

###

「はははっ！ いいぞ！ 蜘蛛男を足蹴にするか！ それでこそ本郷猛！ いや——

——仮面ライダーだ！」

ああ、やつとだ。やつと俺の願いは成就された。

バッタ男に改造されるはずであった本郷猛は、恩師であり自分を改造人間に推薦した緑川博士によって、脳改造される前に脱出することに成功する。

そして、彼は普通の人間でなくなったことを悔やみ、苦しみながらも、誰にも理解されない孤独の中で人間の自由のために悪の組織「シヨツカー」と戦うのだ。

けれど、同時に皮肉だとも思う。正義とはいつの世も、明確な悪の存在なしには成り立たない。仮面ライダーがこの世界で生まれるための敵「ヴィラン」は数多くいるからその条件は満たしているものの、この世界にはヴィランと同じくして、各々が個性と呼ばれる超常能力を持つ。おそらくは、バッタの個性を持つ人間が存在するのであろうが、彼らは「バッタ男」にはなれても、俺が望む存在「仮面ライダー」にはなれない。ならば、作ってしまえばいいと考えた俺の目は正しかったのだ。それに仮面ライダーが生まれるには悪の組織は必要だ。

本郷猛と一文字隼人はその力を見込まれてシヨツカーに改造された。

風見志郎は1号、2号を守るためにデストロンからの攻撃を受けて改造人間となった。

結城丈二は裏切り者の汚名をきせたデストロンへと復讐すべく仲間たちの手を借りて改造人間となった。

神敬介はGOD機関からの襲撃を受けて死ぬも、父からの改造手術を受けてカイゾーグ（改造人間）となった。

山本大介（アマゾン）は十面鬼の襲撃で村が壊滅したことで長老から生体改造を受けて改造人間となった。

そして、城茂は友をブラックサタンに殺され、復讐のため自ら電気人間となった。

このように仮面ライダー誕生には悪の組織の存在が不可欠であり、その伝統は仮面ライダーRXまで引き継がれている。全ての仮面ライダーの原点たる、1号を作るにはあのオールフォーワンでは足りないのだ。

もつと巨大な悪の組織、世界規模の大犯罪を起こせるような存在がいなければ仮面ライダーは生まれない。それに、仮面ライダー誕生のためにはほぼ全ての組織を束ねた大首領の存在も不可欠。それを俺が担うというのは、力不足な感じも否めないが、天から授かった改造手術と洗脳の個性を使えば、どうとでもなる。



「しかし、シヨッカー、ゲルシヨッカーが3・4年で壊滅すること仮定すれば、今のままではいけないか」

俺の相手は仮面ライダーだけでなく、世界中にいる様々なヒーローも含まれる。1人は大したことないとはいえ、数の利というのは戦闘員を見てわかるが些か厄介だ。

ヒーロー誌にも年に1回掲載されるかされないかの地元ヒーローレベルなら戦闘員で倒すことはできるが、オールマイトや一流ヒーローと呼ばれる輩は手に余る。それこそ、仮面ライダーと組まれたら面倒極まりない。

今までは仮面ライダー誕生までの時間稼ぎのために、オールマイトを含めて多くのヒーローを放置してきたが、本郷猛を逃がしたことを失態と思っているオールフォーは俺が動かねば不審に思うだろう。いや、もう既に思っているかもしれない。

そうなれば、俺は仮面ライダーよりも先に奴に倒されることになる。この命は既に落ちぶれて外道に捧げた身。なればこそ、外道に殺されるよりは正義を執行され、往生際悪く、最後の最後まで彼らと戦い、その最後を飾って散る方が望ましい。

「仕方ない」

死神博士が送ってきた個性の力を閉じ込めて拡張・強化し、それを無個性だろうと個性持ちだろうと付与して、普通の人間とは一線を超える存在に変えるというメモリのサンプルを見つめながら俺は思う。

「俺も自らを改造する時が来るやもしれない……か」

だが、今はその時ではないだろう。緑川博士を手放した今となつては、仮面ライダーと相討ちがいいところの半端者にしかない。このメモリ、ガイアメモリとは似て異なるものを使えば遥かなるステージには到れるやもしれぬが、まだ実験段階ではやはり半端者にしかないだろう。

俺が仮面ライダーを超え、オールマイトや名だたるヒーローを凌ぐ存在となつて、彼らの前に壁として立ちただかるにはまだ材料が足りていない。

「志村菜奈」

「ハイハイ」

それまでの間、俺という個性がなければ無力な存在を隠すための蓑が必要になる。幸い、俺が影となって動かせるやつはオールフオーワンが提供してくれている。

えんじ色の大正浪漫を着込み、俺の背後に控えていたのだろう志村菜奈が暗闇から僅かな光の当たたる場所へと出てくる。

「大首領であるこの私が命じる。これよりお前は私を護る盾となり矛となれ」

「もとより我が使命は大首領様を護ること。言われなくても、貴方様が戦えと命じれば、どんな相手とも戦い、殺せと言われればどのような殺しでも実現してみせましょう」

「よく言った」

オールフオーワンも悪趣味だとは思ったが、俺がこれからすることも傍から悪趣味だと思われること間違いないと心中で自嘲しながら俺は言葉を続けた。

「では、お前はこれより改造手術を受けよ。そして、日本各地にいるヒーローを殺せ。方法は……シヨツカーの改造人間らしく、悪辣に残虐に、凄惨に。ヒーロー一派が恨みや

憎悪よりも恐怖を抱くように殺せ」

そして、俺は重ねて命じる。俺は大首領としてまだ死ぬ訳にはいかない。しかし、いざれば仮面ライダーは俺の拠点を突き止め、首領を倒して組織を壊滅させようと乗り込んでくるだろう。その時までには俺が彼らを超えられる保証はない。よって、首領にも替え玉が必要になる。そう判断した俺は志村菜奈へと口を開く。

「お前の改造手術終了をもって、ショッカーの首領はお前に任せる」

「それは」

「安心しろ。大首領として統括は引き続き私が行う。お前は私の代わりに組織の在り方を示すだけでいい」

「そのためのヒーロー殺戮、そう捉えてよろしいですか?」

「そうだ」

「……かしこまりました」

これで次の組織の育成と、編成を進める時間の確保はできた。まあ、作戦指揮は俺や他の改造人間のままで、彼女の仕事は障害となりそうなヒーローの駆逐ではあるが。

そのための改造手術は、そうだな。

シヨツカーの象徴、鷲のマークに倣って鷲を素材とした改造人間、史上最大のワシとしてニュージールランドに君臨していたというハーストイーグルを使うとしよう。遺伝子からの復活モノ同土仲良くやれるだろうさ。

最後に名前か。安直にワシ女というのはダサイな。その名前はワシの王ということだ。"アジャーラレクス"にでもしとくか。

「がっ……ああっ！ あっ……！！ あがあっ！！」

感情がなくても、改造人間にされる時は痛みで声を発するんだなと思いつながら、志村菜奈の改造手術を進めていく。そして、残りの作業をシヨツカー科学班に任せるとノコノコ戻ってきた蜘蛛男へ次の指令を与えるべく、身を翻した。

## その名は仮面ライダー

本郷猛と緑川博士がショッカーのアジトから脱出してから1日が経過した。今のところ、追っ手の気配はなく本郷と緑川は街から外れた緑川の所有する別荘に身を隠していた。

本来なら本郷と緑川は行方不明者のため、警察やヒーロー事務所に駆け込んで保護を要請するのが普通であるが、2人にはそう出来ない事情があった。

まずは緑川博士である。彼は世界的にも有名な科学者であるため、彼の帰還を日本だけでなく世界も望んでいた。しかし、その科学者が悪の秘密結社の技術力発展に大きく貢献していたとなれば、世間はどうか見るだろうか。豊富な研究資金に、自由に使える研究道具という探究心溢れる科学者にとっては夢のような場所であったショッカーの研究所で緑川は自らの能力を使いすぎてしまった。

これは人類の未来の発展のため、これがあれば無個性と個性持ちの諍いは無くなるなどの甘い言葉に騙され、気付けば多くの発明に力を貸しすぎた。気付いた時には既に遅く、研究をやめようとしたら自分の家族に危害を及ぼすと脅された緑川に正常な思考能力など存在しなかった。

その果てが、自分の助手を改造人間の被検体として売るといふ行為にまで及んだのだ。これを聞いた者たちは緑川を許すだろうか。シヨツカーの技術発展が彼という人間一人のせいではないにしても、民衆は囚われた他の科学者達よりも、多くの罪を重ねて帰ってきた緑川博士を責めるだろう。

緑川博士にも、科学は人々の発展にも破壊にも繋がるという持論を持っており、使う人間の問題だという言葉は真実である。しかし、それで黙るほど民衆は優しくも利口でもないのだ。

だから、緑川は帰ったところで自分に居場所はないだろうと、長らく使っておらず、天井の隅に蜘蛛の巣が張り巡らされたような別荘へと身を隠しているのだ。

一方で共に逃げ延びた本郷猛も自らの変化に驚きを隠せないでいた。父の言いつけで柔道や空手はやっていたものの、試合で人を失神させたり、文字通り吹き飛ばした経験はなかった。恩師の話によれば、自分が倒したシヨツカーの戦闘員たちは常人よりも数倍の身体能力を持っていた。つまりは今の本郷はそれ以上の身体能力を得たことになる。

そんなはずはないと、本郷は頭を冷やすために水を飲もうと蛇口をひねろうとした。しかし、改造されて普通の人間でなくなつた本郷のパワーは凄まじく、蛇口をポキリと

折ってしまった。

「一体、俺の身体はどうなってしまったんだ……」

折れた蛇口を見つめながら本郷は頭を抱えた。シヨツカーの研究員の話では1週間眠ったままだったというのに、空腹感はない。パワーは明らかに増しているし、五感に關しても年々落ちていたはずの視力は戻るところかよく見えるようになっており、聴力や嗅覚もどこか鮮明になっていような気がする。触覚や味覚に關してはまだ分からない。

風力エネルギーを体内に貯蔵することで、普通の人間には出せない能力を発揮できるようになった本郷猛はこれからどう生きるべきか考え始めた。

緑川の話によれば、いずれシヨツカーは追いかけてくる。火の粉を払い除ける力があることは理解出来たが、それをいつまで続けられるかという話は別になる。警察やヒーローに頼ろうにも、個性を偽ったことや自分の身体のことを調べられれば、改造人間になる前の生活には戻れなくなってしまう。

「どうすればいいんだ……」



こんな時に限って自分の頭脳では全く判断が出来ない。本郷はその事に自分のことながらバカにするように笑った。IQが700もあるからこんなことになったんだ。俺がただの人間なら。父親から格闘技なんて習っていないければと、今更語つても仕方の無いたればの話と並べていく。そうすれば、少しは気分が晴れると思つたから。けれど、募っていくのは自己嫌悪ばかりで、解決に繋がる糸口は見つからなかった。

そうしてゐるうちに、眠気が訪れて本郷は瞼を閉じた。3大欲求のうち、まだ睡眠の方は残っていたのかと、自分がまだ人間であることを自覚できた本郷は、今まで当たり前だったことに安心感を覚えた。

けれども、目が覚めればまた答えの見つからない問いを続けることになる。本郷は身を預けていたソファから起き上がると、手を開いたり閉じたりした。昨日の出来事が夢であればという僅かな可能性にかけた願いであったが、聴覚は嫌に冴えているし、嗅覚も今まで感じる事のなかった朝の匂いというやつに撥られている。やはり夢ではなかったのかと項垂れていると、コトリと小さなローテーブルに白いカップが置かれた。

「本郷くん、何も飲んでいないんだろう。インスタントだがコーヒーがあったんだ」

「……ありがとうございます」

本郷は緑川の出したコーヒーを口に含めた。しかし、喉を潤そうと飲んだコーヒーの味は以前よりも鮮明であり、大学の研究室で飲んでいた豆から挽いたコーヒーとの味の違いが明確に感じられた。それが顔に出ていたためか、あるいは初めから謝りたかったのか、本郷の顔を見てから緑川は口を開いた。

「……すまないね。私が君を推薦したばかりに」

「いえ……博士も大変でしたでしょうし」

「いや、謝らせてくれ。これは私の罪なのだ……」

そこから語られたのは懺悔であった。悔いるように緑川は自らの行いを語り出した。さらわれた時は憤慨したが、シヨッカーの研究室を見てからはやりたい放題であったこ

と。死んだ人間をDNAから蘇らせる研究も人類の未来のためだと協力したが、終わって死者への冒涇であったことに気づいたこと。多くの改造人間の特殊能力開発に手を貸したこと。怪人態と人間態の切り替えができるようにしたせいで、怪人達が日常生活に混ざれるようになってしまったことなど。

泣き腫らし、つらつらと言葉を並べていく恩師の姿を本郷は優しい目で見つめていた。

「罪を数えろと言われたとしても、もはや数え切れない程に私は重ねすぎた」

「気休めかもしれませんが、形はどうあれ貴方がしたことは人類の発展に繋がると思います」

「……そう、だといいいんだがね」

本郷も緑川の理念は知っている。科学者であるならば、人間の良心を忘れてはいけない。科学は使い方次第で人類の希望にも絶望にもなることは既に歴史が証明している。

ならば、本当に忌むべきなのは自分を改造したショッカーだと緑川との会話で結論づ

けた本郷は恩師の手を優しく握った。

「博士、これからはショッカーのためではなく、本当に人類の平和な未来のために、共に戦いましょう！」

「っ……！ ああ……ああ！」

自分はいいい弟子を持ったと緑川は先程の悔いの涙と異なる雫を瞳から漏らす。それに本郷はハンカチを差し出そうとポケットをまさぐるも、どこにも入っていないことに気づくと、鏡台の脇に置かれたティッシュボックスへと目を向けた。

「博士、待っててください。今、ティッシュユを」

そう言って立ち上がった本郷は、緑川に背を向けてティッシュボックスを取りに行く。あの涙の量では一枚じや済まないだろうとティッシュボックスごと掴んだ本郷であつたが、その瞬間緑川の口から驚愕の声が上がった。

「お、お前は?!」

その声に本郷はすぐさま緑川の方を見た。すると、緑川の背後には蜘蛛男が彼の顎を掴んで立っていた。

「お前、博士に何をっ!」

「裏切り者には“死”あるのみ」

「や、やめろっ!!」

止めに入ろうとした本郷に蜘蛛男はすぐさま巨大な蜘蛛の巣の糸を放出する。しかし、改造人間となったことと、この攻撃が1度目ではないこともあって本郷には簡単に回避されてしまう。けれども、蜘蛛男には本郷を近づけさせないだけでよかった。

ほんの数秒。蜘蛛男の毒針を緑川に注入し、さらに彼のDNAが詰まっている体毛を引き抜く時間があれば。

「博士ツツ!! 緑川博士!!」

「ほん、ごう、くん……!!」

蜘蛛男は任務を果たすと蜘蛛の姿へと戻り、屋外へと脱出する。そして、毒針によって身体の組織が分解され泡状へととなりながら緑川は霞んだ視界の中で自分を呼ぶ弟子に最期にほほえみかけた。

「あ……と、は……たっ、のお、むぞ……! かつ、かめん、ライ……ダあ……!」

振り絞ろうとした声も泡のように消え去り、残ったのは緑川の衣服だけとなってしまった。

「仮面ライダー……」

変身後の本郷はフルフェイスのマスクに身が包まれる。そして、彼が変身するためには風力エネルギーをベルトから体内へと溜め込まなければならない。そして、その方法

はバイクに乗り込み、走った時の風を取り込むこと。だから、緑川は改造人間バツタ男ではなく、本郷猛でもない改造人間にその名をつけようとした。

本郷は肉も骨すらも消え去ってしまった恩師のメッセージを受け取り、外に隠していたバイクを引きずり出すとエンジンを吹かせた。

向かうは自分の恩師を殺した怨敵にして、自分たちをこのような運命へと誘ったシヨツカードもが生み出した改造人間、蜘蛛男。

本郷猛は蜘蛛男をぶつ飛ばすために仮面ライダーへと変身した。

###

戦闘員の1人に緑川博士の遺伝子情報の詰まった頭髪を預けた蜘蛛男はその他の残った戦闘員たちを引き連れて小河口ダムを訪れていた。蜘蛛男が託された任務は緑川博士の殺害とDNA奪取以外にも2つ残されていた。1つは言うまでもなく、本郷猛を生け捕り、出来ないのなら殺害することであった。そして、最後の1つは小河口ダムの破壊である。

ダムに塞ぎ止められた水に自分の毒を含ませることで、ダムが決壊した際に水が流れ込んだ街の人間を殲滅するという恐怖の作戦であった。この作戦が成功した暁には蜘蛛

蜘蛛男には破壊した都市の再建、その後の運営と幹部職が与えられることが約束されており、蜘蛛男は本郷猛が訪れるまでの間に小河口ダムを破壊するための爆弾を戦闘員たちに設置させていた。

「オイオイ、ここは一般人は立ち入り禁止だよ」

しかし、思いがけない来訪者に蜘蛛男は目を疑った。ダム周辺にいた人間はあらかじめ掃討しており、警察やヒーローを呼ぶことはできるはずがなかったため、来るのは本郷猛だけと思っていたが世間から大活躍を評価されるだけのことはあると蜘蛛男は感心した。

「オールマイト、何しにここに来た」

「それはこちらのセリフだ。君は何者かな？」

赤いマントをたなびかせた筋肉隆々の男は、前までなら蜘蛛の個性を持つと思われる異形型の人間だろうと判断したのであろう改造人間に質問を投げ返した。



「お前に答える義理はない」

「そうかい！」

ならば拳で聞くと走り出したオールマイトであったが、突如として近づいてきた気配に動きを止めた。その気配は蜘蛛男を中心に横並びで現れた。ベレー帽を被りフェイスペイントをした男たち、10人。そのうち2人は赤い衣服を着ており、手には鋭利に磨きこまれたサーベルが握られていた。

「お前の相手は俺ではない。やれ」

「イ——ッ！」

蜘蛛男の命令に甲高い声で返事した戦闘員たちがオールマイトへと襲いかかる。鍛え上げた肉体と磨きこんだ技術、そしてそれらを後押しする個性を持つオールマイトにとって、ショツカーの戦闘員が1人ならば敵ではない。だが、常人よりも遥かに強化さ

れた戦闘員が10人もいるとなれば話は別であった。

「それっ！ あっ！ キミイそこは狙っちゃダメ！ このっ！」

なるべく刃物を持った2人、おそらくリーダー格と思われる戦闘員に気をつけながら立ち回っているオールマイトは危なげもなく、1人、また1人と戦闘員を打ち倒していく。ちらりと戦いの最中にオールマイトは蜘蛛男の方を見やる。彼がこちらの戦いに参戦する素振りも、戦闘員達が行っていた爆弾の準備作業を進めることも無く、ただ何かを待つように動きを止めて居た。

早く蜘蛛男の目的を聞き出さねばと戦闘員たちを殺さぬように手加減しつつも制圧していくオールマイトであったが、遠くからこちらへと近づいてくるエンジン音が耳に届き、それと同時にピクリともしなかつた蜘蛛男が動いた。

何者だとオールマイトはエンジン音が鳴る方を見た。一般人なら止めねばならないし、ヒーローならば加勢を申し込むか離れるかの指示をしなければならぬ。最悪の場合、蜘蛛男の仲間ならば戦闘員ごときにかまけてる場合ではない。

だが、オールマイトが見た先に居たのはどの位置に属するのかよく分からない風貌をした人間であった。いや、蜘蛛男のように人間の顔が見えないため人間かも分からない

が、2足で大地に立ち、胴から生えた2本の腕と骨格から判断するに人間であることは間違いない。

複眼のような目がついた深緑のフルフェイスのマスクをした人物は紅いマフラーをなびかせながらバイクから降り立ち、蜘蛛男へと近づく。

「待っていたぞ。今度こそ息の根を止めてやる」

「最後の勝負だ、来い！」

蜘蛛男の死の宣告に仮面の男が言葉を返すと、瞬く間に戦闘が開始された。先制攻撃は蜘蛛男であり、毒針を吹き出すとそれは一直線に仮面の男の方へと飛んでいく。しかし、毒針は仮面の男に刺さることはなく躲される。その間に距離を詰めた仮面の男がかみかかった。

仮面の男は蜘蛛男の腹部を殴打し、痛みにかみになったところへ追い打ちをかけるように肘打ちで地面へと叩きつける。だが、蜘蛛男も負けじと立ち上がり、仮面の男の動きを封じようと蜘蛛の巣状の糸を吐き出すも、これも容易く躲されてしまう。

まさに一方的な戦いにオールライトは息を呑んだ。既に戦闘員達は氣を失っており、

しばらくは目が覚めることは無いだろうと判断したオールライトはその場から離れて、蜘蛛男と仮面の男が戦う場所へと近づく。

殴打の嵐が蜘蛛男の顔面へと突き刺さり、背を地面にして大きく倒れた蜘蛛男に、仮面の男はトドメの一撃を加えるべく空高くジャンプした。

「ま、待てー！」

このままでは蜘蛛男の正体も目的も分からないまま倒されてしまうと危惧したオールライトが叫ぶがもう遅かった。

IQ700の頭脳が生み出した必殺技は、バツタの脚力を利用した跳躍力と高さを掛け合わせたキックである。仮面の男は宙で一回転し、蜘蛛男へと狙いを定めると足を突き出しながらこう叫んだ。

「ライダーキック！」

仮面の男、渾身の一撃が隙だらけとなった蜘蛛男への胴体へとぶち当たり、蜘蛛男の身体を遙か後方へと突き飛ばした。

「ンモツオ……！」

あまりの威力に蜘蛛男は負け惜しみを言う暇なく、掠れた呻き声を出しながら身体を泡にして溶け去った。その消え方に見覚えのあったオールマイトは、蜘蛛男やあの戦闘員たちがショツカーの改造人間であると確信すると、自分が気絶させ倒れ伏しているであろう戦闘員たちがいる方を見た。しかし、上官が死したためか、あるいは気絶した時すでに消えていたのか、戦闘員達の姿はなくなっていた。

「……君は一体」

何者なんだと問おうとした時、風が吹いた。穏やかで、冷たくも暖かくもない優しい風が。仮面の男はその風にマフラーをなびかせるとオールマイトへと背を向けた。バイクの方へと向かっていく仮面の男にオールマイトは再び問いかけた。

「君は……君は何者なんだ！ 人類の味方か！ 敵か！ それだけでも教えてくれないか！」

ここにはもはや何の証拠もない。蜘蛛男なる怪人がいたことも。シヨツカーには多くの戦闘員がいることも。証拠は泡とともに消え去ってしまった。残ったのは結果的にダム破壊を止めたオールマイトと、仮面を被りバイクに乗って現れた謎の人物だけだ。

シヨツカーの怪人を一人倒しただけでは敵か味方かの判断をするには早計すぎるとオールマイトは問いを投げた。

「分からない。ただ俺は人間の自由のためにシヨツカーと戦う————仮面ライダーだ」

「……仮面ライダー」

それが男の名だと、オールマイトは記憶に刻みつける。今はそれだけでいい。シヨツカーがいる限り、彼とはまた会える。詳しい話はまた次に聞こうと。今は自分と同じく、悪と闘う戦士の誕生を歓迎しようとオールマイトは彼が走らせるバイクの後ろ姿を見ながらこう呟いた。

「また会おう。仮面ライダー！」

怪奇・蜘蛛男は仮面ライダーとなった本郷猛の前に倒れた。しかし、シヨツカーの生み出した改造人間の世界征服作戦は続いていく。本郷猛はそれを阻止するために、仮面ライダーとして立ち上がった！ 人間の自由を脅かす悪を止めるため、頑張れ！ 仮面ライダー！

###

「キミのお気に入りが殺られてしまったね。首領」

くすくすと嘲笑う黒い影に赤い装束に身を包んだ男は抑揚のない声で「そうだな」と返す。

「……まさか、本郷猛と緑川博士が裏切ることはキミの計画だったのかな？」

「どうかな」

以前から緑川博士を洗脳せずに手元に置いていたことが気になっていたため、今回の脱走事件の真相を突き止めようとオールフォーワンは尋ねてみるが、相手に話す気はないらしく仮面ライダーの背を見つめて立ち尽くすオールマイトが映る画面に目をやっていた。

「まあ、僕も意図的でないにせよ、彼オールマイトを作ってしまったわけだしね」

責める気はないとオールフォーワンは自嘲気味に笑った。オールマイトを倒すのは容易いが、いたぶるのはシヨツカーに任せて、自分はトドメの段階まで手を出さないと決めているため静観を保っている。

ただ、悪事に関してはそうではなく、定期的に殺人や強盗、破壊活動をしては心を満たしていた。他にも手に入れた個性のピックアップや、ヴィラン組織への援助活動なども行っているが、過去に比べれば活動は控えめになっている。

「安心しろオールフォーワン。本郷猛を野放しにしているのには理由がある」



「へえ」

「オールマイトに本郷猛を味方だと思わせ、完全に信用し、信頼を寄せて仲間と見なした絶好の好機に」

「オールマイトと戦わせるわけか」

洗脳的能力を持つ大首領だから為せる業であると感じたオールフォーワンはその未来を想像して邪悪に笑う。洗脳力の大きさはこの2年で多くの科学者たちを服従させてきたのを間近で見っていたのでよく理解出来ている。脳改造せずとも、本郷猛のような無個性の人間ならば簡単に操れるだろうとオールフォーワンは頷いてみせる。

「怪人となった志村菜奈と戦わせるのも一興かと思ったけど、そっちも面白そうだね」

オールマイトを苦しませて殺す。それが悪の限りを尽くしてこの世を謳歌するといふ野望を持つオールフォーワンの第2の野望である。自分の気まぐれから生まれた、周

りでうろちよると飛ぶ羽虫程度だと思っっている存在がどれほどに強くなったかは興味があるが、魔王である自分が手を下すほどではないだろうと高みの見物をすることにしたオールフォーワンは「気長に待っているよ」とワープの個性を使って大首領の前から消え去る。

「やっと帰ったか」

そして残された大首領は、ため息を吐くと被っていたマスクを脱ぎ捨てる。世界中の科学者を誘拐したツケが回ってきたせいで、目の下にはクマが出来ており、気の抜けた大首領は椅子を引いてどかりと座り込んだ。

「あく疲れた。ったく、仮面ライダーの初陣だぞ。1人で見させろよな……」

そこに悪の秘密結社の大首領の顔はなく、憧れのヒーローを生み出せたという充足に満たされた男の姿のみがあった。蜘蛛男が倒されたから次は蝙蝠男かと過去の記憶を頼りに描いた仮面ライダー戦いの記録という自作ノートを見つめながら思うと、大首領は身体を大きく伸ばした。

「大首領、失礼します」

そうしてリラックスしていると、部屋のドア入ってきたのは人の顔ではなくワシの顔をした大男、ワシをモチーフとした怪人、アジャーラレクスであった。身長2メートルの巨体に弾丸どころか、戦車の砲弾ですら傷一つ付けられない肉体を持つ程に完成されたシヨツカーの最強怪人にして、シヨツカー首領の権限を持つ改造人間である。

「シヨオオオツツカアアア!!!」

アジャーラレクスは高らかに叫ぶ。決してワシの鳴き声だと弱そうに見えるからとか、そもそもワシの鳴き声分からないからとかそんな理由でこのような鳴き声をしているわけではない。

しかし、過去の記憶を持つ大首領からすれば「これシヨツカーグリードなのは」と感じさせられる鳴き声なのだが、よくよくアジャーラレクスを見れば、首元に巻きついていて蛇のようなものが居ない。蛇がついてないシヨツカーグリードか、と一人で納得すると大首領は口を開いた。

「アジャーラ、その格好は見てて疲れる。元の姿になってくれ」

大首領がそう言うと、瞬く間に大きなワシは女性の体つきへと変化し、志村菜奈という人間を元にした人造人間にして改造人間へと変身する。ワシの姿から和装のメイド服と言われる大正浪漫を着た志村菜奈は首領に用件を尋ねられると即座に返事をした。

「は、蜘蛛男が倒されたので大首領の考えた計画通り、蝙蝠男を解き放ち、全人類ビールス傀儡化計画を発動したいと思うのですが」

「ああ、任せる」

「はい」

敬礼する志村菜奈に大首領は目を逸らして肩を落とした。大首領の疲れの原因は、医師会から蝙蝠男のビールスに対する解毒薬の開発チームに入って欲しいと打診されたのを断り続けていたから、というだけでなく、両親から持ち込まれる見合いの話も含ま

れていた。

地下世界や人気がない洞窟や森の中の秘密基地の中では大首領として、洗脳せずとも大佐や博士、大使から悪のカリスマとして羨望と信頼を集める男ではあるが、表社会では三十路の医者である。

周りにはそろそろ結婚しないのかと、嬉しくもないお節介を焼かれては合コンに行かれたり、両親にお見合いパーティなどを企画されたりしている。何度トカゲロンに爆発物を蹴りこんで貰おうかと思いい悩んだことか。

仮面ライダーを生み出して、仮面ライダーの素晴らしさをこの世界に普及し、その仮面ライダーに殺されるという夢がなければ、洗脳という個性を使って自由の限りを尽くしたであろう。しかし、今の首領に結婚して家庭を持つなどという余裕はない。

せめて、付き合っている人間がいるとだけ言えれば、しばらくはうるさくなくなるのであるが、それで志村菜奈という既に死人であり、未亡人を利用する気にはならない。いや、ちよつとその考えがチラついたから目を逸らしたのだが。

「大首領、何か」

「いや、なんでもなない」

「そうですか」

キツパリと即答した大首領に志村菜奈は追及はせずとも、脳内の量子コンピューターを使つて大首領の疲労状態を打ち出すとその身を案じていた。

「ん……？」

しかし、そこで何故案じているかという不可解な思考が発生した。自分には不必要だからと心という機能は作られていないはずと首を傾げる。

一方でその疲労がマッハでアクセルでマキシマムドライブな大首領はと言うと仮面ライダー誕生という事実のみを原動力として、オールフォーワンとの対話を何事もなく果たし、作戦計画書に承認印を押すと志村菜奈へと手渡した。

もう洗脳で適当に誰かと結婚してしまおうかと思惟能力がまともに機能していない脳で考えるも、今日の仕事を終えた身体は休息を求めており、椅子に座つたまま眠りについてしまった。

そんな大首領の姿に、心を持たないはずの改造人間は首領が脱ぎ捨てていた赤い装束

をタオルケット代わりに掛けてやると、その部屋をあとにした。ちやんと、他の人間が入って来れないようにロツクをかけて。

## ヒーロー／偽善者を狩る者

正義とは何か。

ヒーローとは何か。

答えの出ない問いを繰り返す。

問われてもいないのに、何故か私が生まれた時から繰り返している問いだ。

私はとある女性の遺伝子から作られた人造人間であり改造人間。

身体の中は一般的な人間と異なっており、人工物が100パーセントを占めている。

そんな私が考えるは正義とヒーローについて。

どうして考えているのかは分からない。

バグなのかもしれないと思ったが、大首領に「考えることをやめた時に人は人である意味を失うのではないか」と助言を貰ってからは考えをやめないことにしている。私は普通の人間とは違うが、大首領は私を「人間」と称した。人造人間、改造人間と呼ばれるならば人間だろうと言った彼の偽りのない目を信じた。



さて、問いに戻ろう。

正義とは100人いれば100通りの正義があるのではないか。

ヒーローとは、誰かを救うために誰かを切り捨てる愚か者の名では無いのか。

違う。

そうであるとも言えるし、そうでないとも言える。

万人が納得する答えを用意することは出来ても、集団から外れた“個”にとっては正義やヒーローとは否定され、断ぜられるべきなのかもしれない。

全ての人を救えるわけでないのにヒーローを語る奴らは何者なのだ。

正義の味方ならば――

正義の代弁者なら全ての悪を払い除けて見せろ。

全ての悪を打ち倒してみせよ。

この世の災害からも人々を守って見せろ。

理不尽に晒されている人々を救って見せろ。

そんなことできるはずがない？

「やってもいないのに否定するな。」

無理かどうかはやってから言ってみろ。

真にヒーロー足る者を、私はまだ2人しか知らない。

その身を世界平和、悪の根絶に捧げる男。ヴィラン討伐数トップにして、ただの人間であるにも関わらず、改造人間と渡り合える力を持つ男。

頭脳明晰、スポーツ万能という天から授かった才ゆえに、改造人間に選ばれてしまった不運な男。しかし、それを恨まず、人類に憂いも憎みも持たずに彼はその身を自分と同じような人間が生まれないうえにと人間の自由のためにその生涯を捧げると決めた男。

前者は目の前で苦しんでいる人だけでなく、名を呼べば日本のどこであろうと駆けつける。どんな悪も跳ね除けてみせる。どんな災いからも守り抜いてみせる。正義の体現者とは彼のことを言うのだろう。

しかし、そんな彼でも世界中の全ての人を救うことは出来ない。

1人が救える量には限度がある。だからこそ、ヒーローは今から未来までを見通して、危険度の高い悪を優先的に排除し、そうでない悪はのさばらせる。

かつて、大首領は私に言った。

正義は悪からしか生まれない。

悪を倒す者が正義なのだ。

誰が決めたかは知らないが、合理的じゃないかと。

しかし、こうも言っていた。

勝てば正義。負ければ悪だと。

我々がどんなに世界から憎まれ、恐れられようとも、最終的に勝てば正義なのだ。大首領は言った。

大多数が掲げる正義を全て駆逐すれば、残るのは悪と呼ばれる存在で各々が持つ”正義”を示した者だと。

ならば、それが新しい正義になるのだと。

欺瞞、建前、屁理屈。偽りの虚言。色々と思ったが、確かに。

誰が決めたか分からない正義よりもわかりやすくいいと思ったのは事実だ。

だが、私は答えを貰っても未だに問い続けている。

正義とは何だ。ヒーローとは何だ。

正義を掲げ、ヒーローを名乗るならばその真髄を見せよ。  
私を納得させよ。

「お前が真にヒーロー正義ならば、俺を倒して証明して見せろ」

羽を広げ、立ちすくむヒーロー達にそう告げて、私は大首領の命令通りに日本各地にいるヒーローを名乗る偽善者を殺す。シヨッカーの改造人間らしく、悪辣に残酷に、凄惨に。ヒーローの仲間や家族、友人たちが恨みや憎悪よりも恐怖を抱くように残酷な死を与える。

それが今の私の役目、アジャーラレクスとしての志村菜奈の仕事なのだ。  
耳を劈くような喚き声も、許しをこうような命乞いも、私には何の意味もない。

「や、やめてくれ、お、俺はッ!!?」

「口より手を動かせ」

爪から放たれる爆弾により、人の身体が飛び散って、臓器と骨が混ざりあつて魑魅魍

腫のように見える。

身体を引き裂かれたヒーローを見捨てて、自分は生き延びようと逃げるヒーローには身体の穴という穴から血が吹き出すように爆撃を加えた。

無意味。

無意味。

個性という異能を持つのが、単純な身体能力で劣っている時点でお前たちは無力なのだ。

私の爪でコンクリートの地面が溶ける。足場が無くなったヒーローは海面へと足を滑らせていくが、私には翼がある。だから飛ばばいいだけだ。

それに空から降り注ぐ爆弾はもつと痛かろう。

「うおおおおおっつっつ!!!」

熱を帯びた個性の持ち主が私に向かってくる。1000度を超える高熱。

あらゆる動物にとって火は恐ろしく、耐え難いものだ。

だが、改造人間であり、肉体が人工物で作られた私にはバチバチと燃え盛る炎の音しか聞こえない。

「とつとつと、降りて来やがれ!!」

氷がどうした。私の心臓を止めるほどの冷たさではないぞ。

「このバケモンがあつ!」

雷。

「吹き荒れろ!　そして、消えろ!!」

風。

「お前なんか!　私たちが!」

毒。

多種多様な個性を持ったヒーローたちが私を倒すために一丸となる。

けれども。

無駄。無駄。

情弱な生命に、終焉を与えるのは容易く、断末魔を上げる時間さえ与えない。

「この程度か」

その気を出さずとも、片付いてしまう。

残酷な死を与えようにも、蠟人形のように碎けてしまう脆い身体だ。

大首領のように趣向をこらそうにもそうする前に死んでしまう。

しかし、彼らもそれで幸せだっただろうと思う。

再生能力を持つヒーローは、再生する度に体内のどこかが爆発するように爪爆弾を配してみたが、すぐに謝りだして、最期には自ら死を選んでいた。

なんとも儚き命だと思ふと同時に、大首領の命令を守るのには難しいと思考する。

だが、分からないことがある。正義やヒーローについての問いの、私なりの答えではない。

どうしてヒーローを一人殺す度に、中にいる私は涙しているのか。

これが――分からない。

###

オールマイトの登場。悪の秘密結社、シヨッカーの存在認知。

これら2つが世界に与えた影響は様々。まずは前者から語るとしましょう。

個性を一切公表してないにも関わらず、溢れるパワーに恐れを知らぬような笑顔で市民を救い、ヴィランを退治するオールマイト。その姿に無個性及び科学者の大量誘拐事件という事件や、未だ解決の兆しを見せないビルス事件で市民が抱えていた不安は緩和され、日本だけでなく世界でもオールマイト旋風が巻き起こっていた。

どんな強敵も災害も跳ね除けてみせる真のヒーローと呼ぶべき存在の誕生に人々は祝福し、希望を抱いた。



はじめは快く思わなかった一部の市民も、彼に助けられたり、親族や友人の命を救われたとなれば掌を返して万歳三唱。オールマイトを支持するものが激増した。

それでも世界からのつまはじき者、ヴィランたちは不快感をあらわにしてオールマイトを倒したもののこそがナンバーワン。ヴィラン界の頂点に輝けるという風潮が出来上がっていた。

そんな最中に頭角を現したのがシヨツカーである。噂では起源は数世紀前の軍属の生き残りとされるその組織が起こしてきた犯罪行為は今や数知れず。誘拐から始まり、殺人に破壊活動、さらには人体改造すらも行っているとされるその所業に真の悪とは彼らのことではないかと囁かれるようになっていた。

日本では公な活動はとあるマンションでの集団ビールス感染事件以来、姿を見せていなかったが、オールマイトの存在を目の上のたんこぶと認識したか彼に対して攻撃を開始。だが、ことごとく返り討ちに逢い牛男を最後に数週間の間、シヨツカーの改造人間を名乗る者は現れていなかった。

シヨツカーの改造人間には全て共通して人と動物の姿を持つ、異形型の個性の持ち主のような風貌であり、さらに腰には彼らの組織の象徴であろうワシをあしらったデザインのリリーフが巻かれている。それがシヨツカー怪人の見分け方であり、オールマイトが見たという怪人には全て共通していた。

全員が何らかの動物の姿を持つと同時に、特殊な能力を持っており、その能力に対抗できない一般市民や警察官が犠牲になっていった。それも少数で止められているのはオールマイトの功績であったが、人が死んでから駆けつけるのでは意味が無いと攻撃的な主張をする者もいた。

もちろん、オールマイトに助けられた存在の方が多くいるため、その主張は少なく、したところでSNS上で叩かれて市民から鎮圧されるのが日常となっていた。

さて、話を少し戻してショッカーに移ろう。警察の緘口令により、警察やプロヒーローでも少数しか知らない悪の秘密結社であるが、日本以外の国では存在が認知されつつあった。

アフリカのある都市ではサボテンを爆弾のように扱う怪物にライフラインが破壊され、壊滅的被害が起こり、ヨーロッパでは伝説の雪男・スノーマンなる怪物により登山客の死者が多数報告される事態となっていた。

世界は個性発現黎明期に暗躍していたとされる魔王の仕業だとはじめは思っていたが、日本政府からもたらされたショッカー怪人の特徴であるワシのレリーフがサボテン怪人の身体に付けられていたことで判明した。

この他、生物や植物の特徴を持った怪人の存在が次々と報告され、ショッカーの攻撃

は全世界へと及んでいることが分かり、日本政府は日本中の警察組織とヒーローへとシヨツカーの存在を公表することを決定した。

公表の場を設けたその後、恐ろしい出来事が起きていたのが発覚した。気づいたのは九州の警察署で、とある県を拠点に活動しているヒーローの数が大きく減っていたのだ。九州警察は一丸となつて、行方不明となつていたヒーローを探し出した。そして、見つかったのは。

「なん、だ……これは」

港にあるコンビナートで多くの血溜まりが固まった痕が発見され、その周囲には多くのヒーローらしき死体が転がっていた。身体の骨や臓器が抜かれたように皮膚だけになった者。逆に骨だけにされた者。頭部や身体や腕がバラバラとなった者。惨い者は細かく刻まれて海に落とされており、パクパクと外来種の肉食魚が喰らっているのが発見された。

「これもシヨツカーのヤツらの仕業なのか……？」

どれもこれもほとんど顔が判別できず、誰が誰なのかさっぱりな者がほとんどであった。ざっと死体を数えただけでも6人。もし、これもシヨツカーの仕業なら、プロヒーロー6人を相手取って圧倒したという結果になる。

このままいけばシヨツカーの勢いは止まらず、さらにはシヨツカーを信仰するもの達も現れるだろう。他にもシヨツカーを名乗って悪事を働くものも出てくることも考えれば、政府や警察がすることは山積みであった。

「上と特殊犯罪対策班の見解に期待だな」

組織の一部でなんの力もないと自負している刑事はそう呟くと、現場を立ち去った。死肉の匂いと、悪の気が込み上げるような現場からは早く離れたいというのが彼の率直な気持ちであった。

一方でその刑事に期待された特殊犯罪行為班は眉を潜めていた。シヨツカー怪人は確かに強力な力を持っているものの、オールマイティー人で倒せるレベル。つまりは能力の差異はあれどプロヒーローが5人もいれば倒せるのではないかというのが彼らの予想であった。

「でも、犯人が1人とは限らないね」

「なんなら、シヨツカーかも怪しいでしょこれ」

福井の言葉に続くように渡真利が言うと、他のメンバーも頷く。

「今まではオールマイト狙いだったんですよね？　それが急に九州でヒーロー殺しなんてしますかね？」

「さあな。ヴィランってのはいつだって神出鬼没だし、何をするか分からない」

「でも、シヨツカーの仕業にするには早計すぎますね」

後輩である珂神の言葉に渡真利が肩をすくめると、後藤が福井へと目を合わせる。

「……まあ、九州のこともあるけど、オールマイトが見た仮面ライダーの件も片付いてないしね」

福井は困ったような顔をしながら、オールマイトが見たという仮面ライダーの姿を描いた絵を持ち上げる。オールマイトに絵心がなかったためか、詳細はよく分からない。黒いボディに赤い目とマフラーが特徴なのは分かったが、それ以外のことは一切、何も分かってない。

”仮面”と自らを称していることを考えれば、マスクの中には誰かいるのだろうか、それが誰かなのかは不明である。人類の味方であることはハッキリしているようだが、蜘蛛男や戦闘員といい証拠がなければ捜査もできないし対策の講じようもない。

進展の見えない話し合いにため息をついた一同は、窓の外を見やった。自分たちがことうした不毛な話し合いをしている今もショッカーは活動しているのかという不安が彼らを苛ませていた。

## 迫るシヨツカー

仮面ライダー、本郷猛は改造人間である！ 彼を改造したシヨツカーは世界征服を企む悪の秘密結社である！ 仮面ライダーは人間の自由のためシヨツカーと戦うのだ！

###

本郷猛が改造人間となってから自宅に帰ったのは蜘蛛男を倒してからすぐのことであつた。1週間空けていた自宅のポストにはたくさんのお札が突き刺さつていた。

本郷はチラシを破らないように抜き取り、折らないようにドアノブを開いた。部屋の中は本郷が綺麗好きというのもあつて、少しホコリが舞つていた程度で汚れていたり、不在の間に誰かが来たという形跡もなかつた。

チカチカと点滅する電話を見れば、バイクの整備をしてくれるおじさんやツーリング

仲間の後輩から不在着信が何件か来ており、本郷はすぐに返そうかとも思ったが精神的に積もった疲労感からそれは出来なかった。

電話を置いて換気のために窓を開けると、ベッドではなく後ろにあったソファへと倒れ込んだ。ショッカーのアジトの暗闇の知らない天井ではなく、LEDライトの点く見慣れた電灯を見て本郷は帰ってきたことを実感すると共に、来客用に置いていた鉄製の灰皿を手取る。そして、それに少し力を込めるとみるみるうちにひしゃげていった。

「……夢、ではないみたいだな」

蜘蛛男を蹴った時の感触と、鉄製の灰皿をいとも容易く丸めることの出来る腕力で自分が本当に改造人間になってしまったことと、これが現実であり夢でないことを改めて実感する。

「俺が何したって言うんだ……」

改造人間となって仮面ライダーとしてショッカーと戦う覚悟はすでにできている本郷だが、やはりどうしても自分が改造人間にされてしまったのかという疑念は振り払えな



い。自分でなくても良かったのではないかという気持ちか未だに燻っており、本郷は自分を推薦したという緑川博士の死ぬ間際の顔が思い浮かぶと恨むに恨めなかつた。

生まれながらにして驚異的な知能と、父からの仕込みで格闘術を学んでいたことが災いしてショッカーの改造人間に選ばれてしまったことを呪いつつも、皮肉にもその知能の高さから恨んだところで仕方がないという結論のみを彼の脳がはじき出していた。

「おやつさんのところに行くか」

事情は話せないかもしれないが、立花藤兵衛という男には世話になっている。心配をかけてしまったようだから顔を見せて安心させたいという気持ちもあるが、自分が寝ていた間に世間がどのように変化したのかを聞く目的もある。本郷は外に出てバイクを走らせると、立花藤兵衛の経営するスナック『アミーゴ』へ向かう。

カーレースや競艇などの、乗り物の速さや運転手の技術を競う文化は、人々に個性が現れたことで衰退してしまった。乗り物がなくても、個性によつては空を飛び、電車と同じスピードで走ることができるようになり、そういった者達が出場する体育大会の方が見世物としての人気上昇した。

しかし、全ての人が空を飛べたり、乗り物より速く動ける訳では無いので、車やバイクは今でも市民の脚となっている。しかも、乗り物は無限の可能性を秘めているという科学者の言葉から、今でも乗り物は進化を続けている。そういった背景もあってか、競技人口は衰退したものの、レース競技は未だに根強い人気を持っていた。そうは言っても、大会規模は縮小され、観戦者の少なさからチケットの売上などが振るわないため、公式的な大会は無くなりつつあるのが現状である。しかし、趣味としてバイクを楽しむものはまだまだ多くいるため、立花藤兵衛はレーシングクラブを開きたかったのだが、藤兵衛本人や本郷のようなバイク好きが多くいるわけではないので昼間から開いているスナックとしてアミーゴを開いた。

本郷が約一週間にアミーゴを訪れると、何人かの客が雑談をしているのが店の外からでも分かった。

本郷はバイクを停めて、店の中へと入るとドアにつけられた鈴が鳴り、藤兵衛や店の中の人間の視線が彼へと集まる。

「おおつ、本郷！」

「お久しぶりです、おやつさん」

1週間音信不通だった知り合いが顔を出したこともあって、藤兵衛はカウンターを離れて本郷の方へと駆け寄る。

「お前、1週間も連絡しないでどこに行ってたんだ！」

「いや、ちよつと、大学の研究室も休みで暇だったんで少し旅行に」

「それはいいが、ケータイに連絡しても出ないってのはどういうことだ？ 電池切れか？」

「いえ、どこかで落としてしまったようで」

「まあ、お前が無事ならいいんだ。そうだ、お前の後輩も心配してたぞ」

藤兵衛は安堵の息を吐くと、話を切り替える。一方、本郷はとうとう自分を本気で心配してくれた藤兵衛に感謝の気持ちでいっぱいになり、改造人間となり緑川博士を失っ

て以来、初めて笑顔を見せた。

「はい、あとで連絡を入れておきます」

本郷はそう返事すると自分が眠っている間に、社会にどのような変化があったのかを見るべく、室内に置かれている新聞を開く。

「ん、どうしたんだ新聞なんて開いて」

「ええ、携帯をなくしてしまったので」

「パソコンで見ればいいだろ」

「自分はこっちの方が見やすいので」

藤兵衛と会話しながら新聞を読んでいくも、目立った変化は起こっておらず本郷は新聞を閉じようとする。しかし、そこで藤兵衛が思い出したようにふと呟いた。

「ああ、そういえば、まだ新聞には載ってないんだが、さつきテレビで変なニュースがやってたぞ」

「変なニュース？」

「ああ、一つは……ああ、これだ」

夕刊には載るんじゃないかと言いながら藤兵衛が出してきたのはタブレットで、そこには九州を中心にヒーローの行方不明者が続出しているという記事が出ていた。それと同時に、人気のないコンビニナートや廃工場で身元の分からない死体がたくさん発見されているという記述もあり本郷は訝しんだ。

「これは……」

「おそらく、殺されたんだろうな」

パイプタバコを啜えながら藤兵衛が淡々と言うと、本郷はさらに記事を読んだ。犯人の意図は全く不明で、死体のあつた場所には争つた痕跡が多く残されているが、犯人に繋がるようなものはない。本郷はまさかと思つた。世界征服を目標にしているという彼らなら、ヒーローの惨殺くらい息を吐くようにするだろうと。

だが、ヒーローを殺すというのなら彼らの最優先目標はオールマイトであつたはずだ。それなのにどうして、主な活動拠点を関東にしているオールマイトから離れた九州でヒーロー殺しを？

「まあ、力を持て余している連中のすることは分からんからな。警察の捜査が進めば何かわかるだろう」

「そうですね」

日本の警察は優秀だと思ふ藤兵衛の言葉に本郷は頷きながらも、未解決の事件を思い返してしまふ。しかし、シヨツカーという存在を知り、その被害を目の前にした本郷には確信があつた。世間を騒がせた誘拐事件とビールス事件はシヨツカーが起こしたものだ。

緑川博士によると改造人間を作るには無個性の人間が最良なのだと言っていた。そのため無個性の人間を多く攫い、さらに改造手術を施すための研究員が必要になったから誘拐したのだと断定した。

「あ、いらつしやい」

本郷がシヨツカーについて分かっていることを整理していると、アミーゴの扉が開かれる。外から中に入ってきた人物を見て、各々で談笑を楽しんでいた男達が口を開いた。

「おつ、珍しいなー女の子か」

「良かったツスね立花さん」

常連たちはこの店に女性が来ることが少ないどころか、全くないのを知っているため、入ってきた美しい女性の姿を見て鼻の下を伸ばしながら藤兵衛の方を向く。

「まあ、年に2回来ればいい方だから……」

アミーゴに女性客がやってくるといふのは藤兵衛の言う通り年に数えられるほどである。反論できない常連客の言葉に藤兵衛は苦笑すると、件の女性客へと近づく。

「お嬢さん、飲み物は何にする？」

ニコニコと来た客は逃さないという笑みを貼り付けながら藤兵衛は女性に声をかける。すると、女性は「そうね」とぎらりと光る牙をさらけ出した。

「あの方への献上品でも貰おうかしら」

「危ないおやつさん！」

それを見てからの本郷の動きは速く、藤兵衛と女性の間を割って入ると、藤兵衛を押し退けて女性から距離を取らせた。



「な、何をするんだ本郷！」

「おやつさん、見てください！ あの人の口元を！」

「何？」

本郷に言われて藤兵衛以外にも、店の中にいた客たちがその女性の口元に注目する。女性の容姿に合った桃のような可愛らしい唇に男たちは何も無いじゃないかと本郷を睨もうとした矢先、徐々に女性の顔色が変わっていることに気づく。

健康的だった小麦色の肌には青紫の模様が浮かび上がり、彼らが綺麗だと評した唇からは普通の人間とは比較にならないほどに鋭く伸びた牙が見えていた。

「貴様！ 何者だ！」

変わり果てた女性の姿に本郷が怒鳴りをあげる。すると、女性は言葉を発することなく微笑みながら、その牙を曝して本郷達へと襲いかかる。

「ええいつ！ おやつさん！ 店の人を外に！」

「お、おう！ お前ら！ 写真なんか撮ってないで、早く外に出るんだ！ 早くしろ！」

藤兵衛はそう言いながら店の裏手の扉を解錠すると、店内にいた男性客たちを放り出す。彼の個性「百万馬力」がなせる技である。そして、藤兵衛は男性客たちを締め出すと、本郷を心配して店の中へと戻る。

「大丈夫か、本郷！」

「ええ、なんとか」

藤兵衛が戻ると女性客は臉を閉じてソファに座り込んでおり、完全に脱力していることから本郷によって気絶させられたのがわかった。

「一体全体どうしたって言うんだ……？」

「おそらく、数年前にニュースになっていたビルスでしょう」

「ああ！ あのマンションの住人たちが一斉に行方不明になって、子供だけが残ったやつか！」

「はい。そして、その子供たちが出処が分からないビルスを持っていて、現場検証に来ていた警察官たちに集団感染させて……」

「未だに病院に縛り付けられたままだったな……それがどうしてこの子にも？」

2年前に確認された感染者たちは未だに警察が管理している病院内に閉じ込められているはずである。逃げ出したり、院内での感染が認められれば、直ぐにネットニュースになっているに違いない。だが、先程までニュースサイトを見ていたが、そのような記事は欠片もなかった。どういふことだと首を傾げる藤兵衛に、本郷は女性のポケットを漁る。そして、財布から抜き出したカードを見ながら、藤兵衛のタブレットに文字を打ち込む。

「やっぱりこの子。マンション暮らしですね。しかもここからかなり近い」

「なんだって？」

本郷が彼女のポケットから抜き取った財布に入っていた保険証から住所を特定する。一人暮らしをしていて、住居が変わっている可能性もあるが、もし今の住所のままだとしたら……そう考えると本郷と藤兵衛の背中に悪寒が走る。

「こうしちゃおれん！ 早く警察に！」

「それは待ってください。まだ確証がありません」

もし本当に彼女が保険証通りの住所に住んでいるのならば、外には多くの感染者がいるだろう。けれども、本郷が来た時も、先程藤兵衛が1度外に出た時も人の首元に噛み付いているビールス感染者はいなかった。

本郷の考えでは、この女性は自分を誘い出すために差し向けた雑兵の1人で、マンションには自分の命を狙う悪の手先がいるはずなのだ。それは間違いなくショッカー

であり、そんな危ない場所に藤兵衛を巻き込む訳にはいかない。さらには警察が来たところで、ミイラ取りがミイラになる可能性もある。

ならば、ヒーローとなるのだが、ヒーローは市民を傷つけることは許されない。しかも、ヒーローが個性を使用している相手は、同じ個性持ちであり、犯罪者のヴィランのみ。ショッカーの改造人間はヴィランに分類できるだろうが、個性を使っているわけではない。なので、手は出しにくいはずであり、こちらも来たところで邪魔になる可能性がある。

そう考えて、一人で最短最速で事態の収束を図るべきだと判断した本郷は藤兵衛の目を見た。

「おやつさん、今から俺はそのマンションに行つて、中を見てきます。ニュース通りなら、感染者は無感染者にビールスを付与しようと歩き回つてはるはずなので、近くまで行けば分かるはずですよ」

「でも、感染者が至る所にいたらどうする?」

「その時はおやつさんに整備してもらつてるバイクで逃げてきますよ」

ビールスに感染しても、腕力や脚力が変わらないことは眠っている女性で確認済みである。一応、起きた時のために口には本郷のネクタイを紐替わりにして、動けないように足を縛り付けているので藤兵衛1人でも問題ない状態してから本郷はバイクに跨った。

「無理するなよ、本当に警察も救急車呼ばなくていいのか？」

「ええ、大丈夫ですよ」

心配する藤兵衛の心を落ち着かせるべく、本郷は爽やかな笑みでヘルメットを被り、バイクのエンジンを吹かせる。だが、その笑みもミラーに藤兵衛の姿が映らなくなるのと、引き締まったものへと変わっていく。

それはこれから訪れる先でシヨッカーとの戦いがあることを告げていたのであった。

## 恐怖！ 蝙蝠男！（2回目）

志村菜奈……いや、アジャーラレクスにヒーロー掃討を命じてから数日、彼女に異変が起きていることがわかった。彼女はヒーロー殺しを遂行しているものの、自分の予想に対して殺している数が少ないのだ。

彼女の実力ならば、1日あれば九州地方のヒーローを完膚なきまでに蹂躪し、殺し尽くすことは簡単だろうに、まだ半分も殺していない。しかも、人目を避けて夜に殺している節がある。

一応、俺の言った条件は満たしているようなので、口出しはしないようにしているが、身元がわからないようにかつ、見た者が恐怖を覚えるようにというのはしっかり守っているらしく、はじめのヒーロー殺害から2日経っても身元判明者が少ないのが現状のようだ。

ヒーローに頼りきりで警察の質が落ちたのかと憂いたが、肉片すら残っていない人間の身元なんて俺でも分からないから是非もないね。そのせいか、報告では20人殺したと言っていたが、警察が把握している死者数は11人と9人も足りてない。これでシヨツカーが攫ったことにされていたらひとたまりもないぜ。しかし、今のところ、アジャー

ラレクスとヒーロー達の戦闘を見た者はいないらしく、複数のヴィランによる仕事と囁かれていたり、あるスジではオールフォーワンが動き出したのではないかと噂されているようだ。

まあ、今回のヒーロー殺しはただの掃除みたいなもので、シヨツカーの布教活動とは何ら関係がないし、誰の仕事にされようが知ったことではない。模倣犯や虚言者が現れようともそこは俺の関与するところでは無い。それに今のシヨツカーの運営は志村菜奈に任せてるわけで、俺は俺でゲルダム の 結成や、この世界にも存在していたであろう神々の意匠や怪物や偉人のDNA採取と大忙しである。ゲルダム以外は死神カメレオンにやつてもらっているのだが、あの子優秀すぎない? けれども、残念なことに蜘蛛男が倒れた以上、そろそろお役御免……というか、仮面ライダーに吹っ飛ばされることになるだろう。

ナチスの宝物も探すように命じてあるが、ナチスがいた事などこの世界では数世紀も前の話なので、見つかるかどうか怪しいものなんですけどね。俺が洗脳してる奴らを使って用意させてもいいんだけど、下手すると足がつくから難しいところだ。ともあれ、死神カメレオンに代わる諜報員を作らないとな。

そう考えながら、左手に着けた腕時計に目をやる。時間を見れば、そろそろ蝙蝠男が動き出す時間である。パソコンの画面を切り替えて、彼が拠点に選んだマンションへと



送り込んだ飛行型カメラの映像を見る。すると、そこにはすでに蝙蝠男のビールの餌食となった住人たちの様子が映し出されていた。屋上には本郷猛の到着を待ちわびるかのようにして蝙蝠男が立っていた。

そして、本郷の近くへと張り付かせたカメラに切り替えるとマンシヨンのエントランスに本郷が現れるのが見えた。しかも、後ろには何故か知らないおっさんの姿もあった。

「誰だこのおっさん……」

もしかして、立花藤兵衛か？ とカメラをズームにするも、監視カメラが安物なのか、画素数が低くて俺の知ってる立花藤兵衛の顔かどうかの判別がつかない。髪型は昔見た通りなんだけだな。

『おやっさん、本当に大丈夫ですか？』

『ああ、やっぱりお前を一人にさせるとまた音信不通になりそうだからな』

『……わかりました。行きましょう』

おやつさんだった。なんだ実は俺って仮面ライダーの世界に転生していたの? 早く言ってくれよ。個性個性って言うから、アイデンティティ重視の世界だと思つたよ。いや、大体合ってるんだけど。しかし、個性個性って言うやつに限って二重の意味で個性が大したことない。ソースは俺。洗脳と改造手術とかショツカーの首領を夢見ないと使いどころがない。ないよね。

『な、なんだこいつら!』

『……みんな正気を失っている』

俺が一人でブツブツ呟いていると、マンションに突入した2人がビールス感染者を前にして驚きを隠せないでいた。しかし、蝙蝠男は2人を襲う気がないのか、傀儡達に命令を下さずにじつとさせているだけだった。

『どうする?』 通報するか?』

『……そうですね。警察に事情を話して救護に来てもらいましょう。俺は他の階の様子を見てきます』

『お、おい！ 行つちまったよ……』

そう言つて本郷が一人で階段を駆け上がり、おやっさんが携帯電話で警察へと連絡する。仮面ライダー放送時には携帯電話なんて便利なものはなかったから、こうしておやっさんらしき人が使つてるのを見ると違和感すげえな。

カメラに追いかけて本郷が駆け上がる様子を見守る。どうやら蝙蝠男は本郷との一騎打ちを望むのか、あるいは俺が改造人間の中でも最高傑作と評した存在が気になるのか、今のところは手を出すつもりがないらしい。

そうしてあつという間に蝙蝠男がいる屋上へと辿り着いた本郷は、自分と同じく改造人間に成り果てた男の姿を見て吠えた。

『出たな! ショッカーの改造人間!』

『来たか、本郷猛。ショッカーの裏切り者よ』

『違う。俺は裏切つてなどいない! お前たちに脳改造を受ける寸前に博士が救つてくれた!』

『だが、貴様は我が同胞である蜘蛛男を殺した! その時点で貴様は裏切り者だ! つかれ!』

言葉のジャブの打ち合いの後、満を持して蝙蝠男が傀儡としたマンシヨンの住人たちに命令を下す。内容はもちろん、本郷への攻撃である。

『ちっ!』

しかし、さすがは改造人間、仮面ライダーに選ばれた男と言うべきか、普通の人間ではまともに相手にならない。鳩尾や顎へと掌底を喰らわせて住人たちの意識を刈り

取って行く。

『キキキキツ、いいのか貴様？　こいつらには何の罪もないのに傷を負わせて』

『……っ！』

下卑た笑みを浮かべながら、本郷の罪悪感をえぐろうとする蝙蝠男であったが、本郷は適切に傷が残らないように配慮しつつ住人たちを倒していく。

『やはり普通の人間ではダメか……だがこいつらはどうかな？』

蝙蝠男が次なる指令を出す。すると、住人たちは特殊な力を使う。この世界で個性と呼ばれる超常であり、威力は大したことのない水や風が本郷へと襲いかかる。

『逃がすな！』

『な、何っ!？』

それを躲そうとする本郷に住人たちの1人が手を前に突き出す。すると、本郷の動きが鈍くなる。恐らくは金縛りとか重力付加系統の個性なのだろう。

先程のような機敏な動きができなくなつて苦悶の顔を浮かべる本郷に蝙蝠男は愉快そうに笑つた。

『終わりだ! 本郷!』

ショツカー史上最強の改造人間もこの程度かといった様子で嘲笑う蝙蝠男に対して本郷は歯噛みしながら迫り来る蝙蝠男のビールスに毒された人々へ目をやる。本郷の強靱な身体であれば、蝙蝠男のビールスに感染するまで数分は持つであろうが、感染する前にビールスの抗体や血清もない今では無謀でしかない。それは彼も理解しているのか、壁を背にしてなるべく1対1の状況になるように住人たちを倒していく。

そして、人数が徐々に少なくなり、本郷は重くなつた足を精一杯動かしながら、金縛りの個性を使う男の意識を奪おうと進む。その時だつた。

「なんだ？」

カメラの映像が乱れて、画面の中の蝙蝠男や本郷も俺と同じようなセリフを吐く。

『な、なんだ！』

蝙蝠男が振り向いた先には、屈強な肉体に触角のように伸びたに髪型をした男。つまりはいつものアイツである。

「余計な邪魔を……！！」

もう少しで仮面ライダーに変身するだろうというところでヒーローのお出ましというところだろうか。

『SNSの投稿通りだな。例のビールスの感染者に……そのベルトはショッカーの改造人間か！』

『お前がオールマイトか』

『私を知っているのか。シヨツカーでも有名人とは光栄だね』

SNS? そう言われて、ケータイを見てみるとビールス感染者がとあるスナック近くに現れたことがニュースとなっていた。考えるにこのスナックはおやつさんらしき男が経営していて、ビールス感染者がおやつさんか店に来ていた本郷を襲って、他の客が写真で撮って拡散させたのだろう。

にしても、こいつどこにでも現れるな。というか、SNSやってるのかこいつ。いや、意外とおやつさんが通報したら来たのかもしれない。分からないけど。

『キキキキツ、俺は貴様に構っている暇はない! 死ね!』

かかれと本郷へと向けられていた住人たちが一斉にオールマイトへと駆け出ししていく。



『これはまたまた随分と、多いなっ!!』

オールマイトの言う通り、その数は彼が過去に相手にした数よりも多く、しかも今回は蝙蝠男が直接命令を下しているため個性も使ってくるという厄介さを併せ持つ。さしものオールマイトと云えど、屋上という開けた場所で囲まれてしまつては自由に身動きが取りにくいだろう。

だが、それをなんとかしてしまうのがヒーローだと言わんばかりに彼は誰一人として怪我させることなく、拳の風圧や、首への手刀で意識を奪いながら、呆然と立ち尽くす本郷へと言い放った。

『君！ 私が来るまでありがとう！ あとは私に任せろ！』

『逃がすか!』

差し向けられた住人の半分を相手しているオールマイトへと、蝙蝠男は追加で他の階

からも傀儡を招集して襲いかからせると同時に屋上の出入り口を塞がせると、2人の退路を断つてしまう。

『これで逃げられまい!』

『俺は逃げも隠れもしないぞ!』

『ダメだ! そいつは君が相手できるやつじゃない!』

『黙れ! 貴様はそこで大人しく死んでいろ!!』

激昂した蝙蝠男が傀儡とした人間の残り全てをオールマイトへと向けて、本郷猛と対面する。これで邪魔者はいないと蝙蝠男は構える本郷へと牙をギラつかせる。

『くつ、くそつ! 仕方ないっ……!』

ジリジリと距離を詰めて近づくと蝙蝠男の後ろで、様々な個性を使って自分を足止めし

ようとしてくる傀儡となった住人たちへ謝罪の念を募らせながらオールマイトは自分の下へと拳を突き出した。

『デトロイトスマッシュ!!』

コンクリートの地面へと突き立てられた拳はシヨツカーカメラを遠くへと吹き飛ばすほどのソニックブームを起こし、周囲にいた住人たちをも吹き飛ばす。その威力からカメラと共に屋上の外へと吹き飛んだ者もいたが、それをオールマイトはすかさず救出して安全な場所へと寝かせる。その間に非常時のために待機させていたシヨツカーカメラを起動させる。

屋上に意識を持って残るは蝙蝠男と退路を塞いでいる5人の感染者のみとなり、蝙蝠男は本郷よりも先にオールマイトを倒すべきだと判断すると歩みを止める。

『そんなに殺して欲しいなら、まずは貴様からだ!』

だが、蝙蝠男が襲いかかろうとした時、デトロイトスマッシュとは違った衝撃波がマ

ンションの屋上で走る。オールマイトと蝙蝠男の立ち位置からちようど中間地点に降り立った巨軀なるワシの姿をした怪人に、その場にいた全ての者が息を呑んだのがわかった。

それは多くのヴィランを倒してきたオールマイトも、自分の能力と力に絶対的な自信を持つ蝙蝠男も、改造人間となつて常人離れた力を持った本郷猛だけでなく、蝙蝠男に傀儡とされて自意識を奪われていた住人たちですら、その怪人へ畏怖を抱かずにはいられなかったのだろう。

九州制圧に出ていたはずのアジャーラレクスがわざわざここまでやってきた理由は分からない。他のヒーローの乱入で仮面ライダーとの戦いに支障が出るようならば駆けつけろという命令を下した覚えはないし、志村菜奈個人が蝙蝠男に対して何か特別な感情があるということはないだろう。

『お前は本郷猛を始末しろ。オールマイトは私がやる』

『あ……ああ、わかった』

突然現れたアジャーラレクスに戸惑った蝙蝠男だが、腰に巻かれているシヨツカーベルトから同胞だと理解すると、踵を返して本郷へと再び向かっていく。対して本郷は蝙蝠男を迎え討つべく構えるも、仮面ライダーになる様子はない。仮面ライダーへの変身は今のところ、変身ポーズではなく風力エネルギーが必要である。けれども、その風力はオールマイトの起こしたもので十分に蓄積されているはず。なのに変身しないのはオールマイトの目を気にしているのだろう。

『ツツツツツ?!?!?』

やはり邪魔だなと考えると、アジャーラレクスは俺のその意思を感じ取ったように何の発言もなく、大きく羽を広げるとオールマイトを遥か後方へと吹き飛ばす。アジャーラレクスもオールマイトを吹き飛ばした方向へと飛翔していく。

その様子に蝙蝠男が気を取られている隙に本郷は変身の最後のひと押しのため上空へと飛び上がる。変身に必要な風エネルギーが注入され、彼の身体に内蔵されていたベルトが浮かび上がり、全身が黒と緑のアーマーに覆われていく。この間0.5秒であ

る。なので、俺が見たのはいきなり現れた仮面ライダーの姿のみ。

『な、なんだ貴様は!?!』

オールマイトの方を見ていたらいきなり現れた戦士に、蝙蝠男は動揺を隠せていなかった。こいつ蜘蛛男が死んだ時のビデオ見てないな。

だが、いい反応だ。驚きすぎな節があるが良しとしよう。

『いくぞ、ショツカーの改造人間! 仮面ライダーが相手だ!』

『何をっ!』

そこからの戦いは瞬く間であった。仮面ライダーへと変身したことで能力のリミッターが解除された本郷猛は改造人間となったその力を存分に振るう。まさかの蝙蝠男がピンチになったら仮死するという能力を使う暇がないほどに仮面ライダーは強かった。

『これで勝ったと思うなよ!』

蝙蝠男が最後の手段として屋上の扉の前へと配置していた5人の傀儡に仮面ライダーの足止めを命じる。その中にはオールマイトが来るまで本郷の動きを止めて居た男も混じっており、仮面ライダーの動きが鈍くなる。さらには糸を出して仮面ライダーの足を拘束し、ボンドのような粘着質の固まりを吐いてもう片足の動きを制限し、残りの2人が仮面ライダーの腕を取り押さえる。噛みつかないのは仮面ライダーの厚く硬い装甲には自分達の牙が通らないという判断なのか、あるいは蝙蝠男が自分の手で下したいからなのか。多分どっちもだろうな。

『無様な仮面ライダー! お前の守ろうとしている人間に裏切られた気分はどうだ!』

『……っ!』

『冥土の土産に教えてやろう。こいつらを元に戻す方法だ! 俺の羽根や身体について

トゲの中にある血清を撃ち込めば元に戻る!　だが、俺を倒すことすら出来ないお前には不可能な話だ!　キキキキキッ!』

あつ、これは(察し)。

『ふふふ、ははははは……!』

『死ぬ間際で気が狂ったか仮面ライダー!』

『俺は正気だ!』

そう言い放った仮面ライダーは右足を地面と接着していたボンドを引き剥がし、両腕をクロスして無理矢理に拘束していた2人の頭をぶつけさせて気絶させる。そして、左足に巻きつけていた糸をチョップで切り落としてしまう。

『き、貴様まさか俺に血清のことを話させるためにわざと!』



『その通りだ、いくぞ!』

声を荒らげた蝙蝠男へと、一足で一氣に距離を詰めた仮面ライダーは蝙蝠男の顔面に右左、右左と殴打を浴びせていく。あまりの攻撃の連打に思わず蝙蝠男がよろけたところを狙って仮面ライダーは血清が入ったトゲの多くついた羽へと狙いをつける。

『ライダーチョップ!!!』

『キキキキイツ——!!!?!』

右羽がちぎられて悲痛の声をあげる蝙蝠男へと追い打ちをかけるように左の羽も切り裂かれると蝙蝠男はあまりの痛さに地面をのたうち回ったうちにオールマイトが吹き飛ばされた際に柵のなくなった場所を通過して、数十メートル下へと落下していく。羽根がなくなり、飛行能力を失った蝙蝠男では、いくら改造人間でもあの高さから落ちてしまうと死は免れられない。その証拠に数秒後にはけたたましい爆発音が響いた。

仮面ライダーは蝙蝠男が爆発した場所に誰もいないことに安心したのか肩を落とす

と変身を解除する。そこには仮面ライダーの姿はなく、本郷猛の姿があった。

本郷はちぎった蝙蝠男の羽からトゲを抜いて、主君を失って目的を見失って彷徨する糸を使う個性の人間へと突き刺す。

『あつ……………ん、ん……………俺は一体……………何を……………?』

突き刺された男は特に苦しむ様子もなく、口から出るほどに伸びた牙はなくなり、顔に浮かび上がっていた紋様もなくなっていた。

『良かった、本当に良かった』

こうして本郷猛、いや仮面ライダーは蝙蝠男を倒して2年もの間未解決となっていたビルス感染事件に終止符を打った。けれども、彼はこのことを公表しないだろう。それはおそらく政府や警察組織も同様だろう。本郷猛はおやつさんと自分の研究室の伝手を使って、血清を政府の医療チームへ送る話をしているのを観てショックカーカメラを帰還させる。

オールマイトのおかげでマンションの屋上に設置されていた監視カメラは破壊されている。だから、仮面ライダーの存在は捉えられないことなく、彼らはオールマイトが倒したのだと考えるだろう。

そういえば、オールマイトとアジャーラレクスはどうなったんだ？

## 強くなるろう

「いたた……！」

突然現れたワシかタカかわからない怪人に吹き飛ばされたオールマイルトは背中を擦りながら立ち上がると周囲を見渡す。鉄骨や重機が見えることから工事現場であることがうかがえる。怪人が意図したのかは分からないが、人気のないところで良かったとオールマイルトは正面を向く。

夜という時間帯なことあつて、工事現場に人はおらず作業用の明かりはついていない。明かりは月のみとこれから戦うには少しばかり厄介だなと悪態つきながらオールマイルトは目の前に降り立った改造人間を見る。

「随分な挨拶じゃないか、シヨツカーの改造人間」

マンションの屋上からどれくらい飛んだのか。マンションの屋上の怪人との繋がりは？ 残された青年は大丈夫なのだろうかと疑問や不安は尽きない。だが、眼前にいる怪人から発せられる強者のオーラから、これまでの怪人やヴィランとは一線を画す存在であることがわかる。そのオーラはオールマイトにとつての宿敵にも相当しており、手には汗が滲み出す。

「無口なのかな？ それともお喋りは苦手かな？」

「不安を隠そうとするな」

低く、のしかかるような重厚ある声。体格と合わさって男性であることは分かった。ショッカーにさらわれた無個性の人間は数知れない。しかし、自分に匹敵する体格の持ち主となればそう数は多くはないだろう。

だが、この情報を持ち帰れるかどうかは現時点で不明だとオールマイトは敵の言葉を待ちながら考える。

「その貼り付けたような笑顔。不安を隠すためのものだろう」

「違う」

人々を笑顔で救い出すヒーローは決して悪に屈してはいけない。オールマイトが笑うのはヒーローの重圧、そして内に湧く恐怖から己を欺くためである。さらには、亡き恩師によって与えられた言葉からオールマイトは常に笑顔を絶やさない。どんな事があっても笑っているやつが一番強いからだから。

「哀れだなヒーロー。その心の鎧を脱げば楽になれるというのに」

「違うー！」

これ以上、今までの自分、これからの自分、亡き恩師の理念を否定させる訳にはいかない。オールマイトは構える。敵の能力は未知数。それでも戦うのがヒーローだ。

「どうした来ないのか」

「……まだ私は君に吹き飛ばされただけで怪我はしてないからね」

しかし、オールマイトにはまだ確信がない。マンシヨンにいた怪人は、無関係な人々をビルルスで侵して傀儡とした罪がある。けれども、目の前にいる怪人はヒーロー活動の邪魔はあれども、大きな危害を加えたわけではない。

「なるほど、戦う理由には不十分か」

「君と戦ってる場合じゃないってのもあるけどね」

「……ああ、奴なら問題ない。1人でもどうにかするだろうさ」

目の前のヴィランが強力な怪人であるのは確信できている。しかし、オールマイトとしては屋上に残された蝙蝠の怪人と対峙していたごく普通の青年と怪人に操られた住人たちの解放の方が急務である。戦っている暇はないが通してもらえないのなら仕方ないとオールマイトが戦闘態勢へと移る前に怪人は「理由をくれてやる」と爪先を差し出す。雲間から出てきた月光によって照らし出された爪先はどす黒く染まっている。

だが、左手の爪先は彼本来の色が晒し出されている。その意味を察するのに時間がかかるほどオールマイトは未熟な人間ではなかった。

瞬間、オールマイトが肉薄した。

「貴様、何人殺した」

「まだ43人くらいだ」

オールマイトの振り抜いた拳を怪人は容易く受け止める。さらにオールマイトが左手を突き出す。それも怪人は強靱に発達した腕で受け止めながら「知っているか？」とオールマイトに問いかけた。

「九州のヒーローが続々と殺されているという話だ」

「……知っているとも」

何が言いたいんだと睨みつけるオールマイトに怪人は抑揚のない声でこう答えた。



「私が殺した」

「ッ!!」

「ヒーローを名乗るからもつと齒ごたえがあると思つたが……情けないな」

オールマイトの乱打を、まるで予測しているかのように躲しながら感情の籠っていない声でそんなことを口にする。それが余計にオールマイトの神経を逆撫でした。

「彼らは君という悪に全力で立ち向かったはずだ!」

「否。奴らは所詮、ヒーローという名の皮を被った偽善者だった」

最近、全国で悪事をはたらいているという悪の秘密結社ショッカー。どれだけ政府側が存在を隠そうとも、世界各地で活動する彼らの存在を完全に隠すというのは不可能な話であった。ショッカーのことは名前が出されなくても、週刊誌やインターネット上で

仄めかされていた。

噂を聞いた一部のヒーローとはある考えを抱いた。政府が隠すほどの存在であれば、組織の一員と思わしき者を捕らえる、あるいは討伐したとなれば自分の株が上がるのでは無いのかと。

そんな彼らは今、オールマイトの目の前にいる怪人、アジャーラレックスの餌食となつた。戦闘員に特に意味の無い暗躍行動をさせて、ヒーロー達を炙り出すとアジャーラレックスは彼らと戦闘を行った。数の利でアドバンテージを取っていたヒーローたちは、初めはアジャーラレックスへの自首によるシヨツカーの情報提供を勧告したが、無反応であつたために総攻撃を開始。そして――。

「初めは意気揚々と挑んで来た者も仲間が手も足も出ずに殺されたのを見て腰を抜かしていた。逃げ出した者もいたし、自害を選ぼうとした者もいた。中には私に命乞いをしてきた者もいた」

一人一人ヒーロー名を言いながら何をしたか教えてやろうかと、オールマイトの右フックを片手で受け止めながら提案するアジャーラレックス。歯噛みしながらオールマイトは「結構だ！」と答えると一歩距離を取ってから、再び攻撃へ移る。

それを見ながらアジャーラレクスは嘆息した。

「パワーもスピードも十分にある。だが、それにかまけて動きが単調だな」

見なくても躲せるぞと最小限の動きで、オールマイトの連撃を躲していくアジャーラレクスは「落ち着け」と彼から初めて攻撃を加える。鳩尾に強烈な一撃が入り、オールマイトの口の中には鉄の味が広がり、腹部には修行時代に何度も味わった痛みに勝る激痛が走る。

「がああっ!!」

「自分より強い力にはやはり弱いのか」

これでもまだ2割くらいなんだがとオールマイトを見下ろしながら呟く。片膝をつきながら、痛みに苦しむオールマイトは宿敵以来の自分よりも遥かに強い存在に笑顔が消えかかっていた。

「だが、悪くない。お前はまだ強くなれるだろう」

死ななければなど付け加えるアジャーラレクスに、オールマイトは痛みを耐えながら声を絞り出す。

「お前は、なんなんだ」

ただのヴィランではない。悪辣的に人殺しを楽しんでいるようにも思えないし、私怨からヒーローを殺しているように思えない。今も自分を殺す隙はいくらでもあったはずなのに、腹部への一撃のみで済んでいる。この怪人の真意を尋ねるオールマイトに、怪人は肩を竦めた。

「知ったところでお前には何も出来ない」

知りたければ私を倒せと暗に言う怪人に、オールマイトはやはり真つ当なヴィランとは言えないと考える。目的はヒーローの殲滅ではなく、真のヒーローと呼ばれる存在の発掘？ いや、そうだとしたらそれに自分が当てはまると考えているのは傲慢が過ぎる

かと首を振る。

「私はこれからもヒーローを殺す。邪魔するのなら、警察官でも、力無き者も殺す。止めなければ強くなるんだな」

遠くから聞こえてくる爆発音のようなものが耳に届くと、終わったかと呟いたアジャーラレクスは、オールマイトに背を向けてこの場から立ち去ろうと歩き出す。

「待てー！」

オールマイトはそんな敵の背中に声をかける。かけてから、これからどうするかを考える。勝ち目の薄い敵に今、自分ができることはなんだと。このまま放っておくと多くの命が失われることになる。けれども、圧倒的な力の差を思い知らされて折れかけた心と身体の痛みを抱えて勝てる相手では無い。言葉を失うオールマイトにアジャーラレクスは無言で翼をはためかせると月が雲に隠れて完全に暗くなつた空へと消えていく。

敵が無傷で立ち去っていくのを見上げることしか出来ない無力さに、憤りを感じながらオールマイトは立ち上がる。世の中の人々が幸せに笑い合える世界に近づくために、

最高のヒーローになるためにオールマイトは拳を握る。

「もっと頑張ろう」

## 大首領の苦悩。

仮面ライダーが生まれ、俺がシヨツカーを作り出した目的を果たそうとした矢先、重大な問題に直面していた。まさかこの世界にも本郷猛なる男が存在するとは思わず、テキトーに作っていた改造人間。いや、能力とか見た目は真面目に作ったが、彼らの来歴は無個性ならなんでもいいやとばかりにしていたツケが回ってきてしまった。

その理由は仮面ライダー好きなら誰もがわかるだろう。蜘蛛男、蝙蝠男と来れば次の怪人は誰か。そう、お察しの通りサソリ男である。

仮面ライダー抹殺を目的としたM1号作戦計画を実行するさそりの改造人間である。小さな人喰いさそりを操り、しつぽから放たれる赤い液体は人間を溶解してしまう。

怪人本体ももちろん強力であり、左手のハサミを武器にしてアクロバティックな動きで戦闘員と共に仮面ライダーと戦った姿は今でも俺の記憶に残っている。しかし、ライダーシザースという技の前に倒れてしまった。

ここまではいつも通りの改造人間だが、その正体は本郷猛の親友、早瀬五郎なのだ。本郷猛に勝つために進んで改造手術を受けたというエピソードがある。親友と共に

シヨツカーと戦えると思った本郷の笑顔が、早瀬五郎が正体を表した時に曇るのは気の毒でたまらなかつた気がする。

しかし、シヨツカーと戦う覚悟を決めていた本郷は、自分の能力を分析して更なるパワーアップが見込めることを示唆している。ちなみに、緑川博士の娘さんが助手となるのもこの辺りだ。まあ、この世界の緑川博士は独身なので娘はいないのだが。

つまるところ、さそり男が普通の改造人間なのか、本郷猛の親友なのかで彼の今後の方向性が変わるかと言われたら微妙な話なので俺がここまで悩む必要は無いのだが……せつかくここまでこたわってきたのだししっかりと守っていきたい自分の方が強い。

だが、問題が一つ。この世界の本郷猛。ぼっちなのである。

スペックが高い人間がいつの世も排他されるように、驚異的なIQと恵まれた身体能力を持つ本郷猛は個性社会の進んだ現代でも異端児であり、調べたところ彼の身近な人間に親友どころか同級生の友人もいなかった。

いたのは緑川博士や立花藤兵衛のような歳上か、風見志郎という歳下くらいである。……いや、緑川博士はまだいいさ。いたっておかしくはない気がするんだ。まだ俺も許容できる気がした。でも、後の2人は流石におかしくないだろうか。

立花藤兵衛。ヒーロー学部の大学で個性使用許可免許を取得するも、ヒーローの資格



は得ずにバイクメーカーに就職。30代後半で脱サラした後には昼も夜も空いてるクラブ『アミーゴ』のオーナーになる。この世界ではオートレーサーという職業が廃れているから、彼の経歴が多少なりとも変化しているのは仕方ないが、俺の知る立花藤兵衛と概ね変わらない人生を送っているように思う。個性は最大で常人の100万倍もの力を発揮出来る『百万馬力』。だが、フル出力を使うと通常の睡眠時間に加えて6時間くらい寝込むらしい。

風見志郎。本郷猛と同じ大学に通っており、本郷とは大学からの付き合いのようだ。本郷猛に影響されてバイク免許を取得している。個性は気分の高揚で身体能力を底上げできるという『情熱』。しかし、個性使用許可免許は取得していない。恐らくは無意識で自動発動の個性のため、使用許可があってもなくても変わらないからだと思われる。家族構成は両親に中学生の妹。

2人とも世界観の違いから個性を持っていたり、周囲の関係性に変化が生じているが、仮面ライダーのおやつさんである立花藤兵衛、後々仮面ライダーV3になる素質がある風見志郎という人間に遜色ない。むしろ、個性を持つてる分変身しなくても戦闘員1人くらいならなんとか出来そうなのが恐ろしい。

2人が概ね変わりないのに対して、本郷猛に親友がないというのは些か疑問であるが、そこはこの世界が俺の知る仮面ライダーの世界とは異なる部分なのだろうと1人納

得する。個性とかヒーロー、ヴィランの存在の時点で分かっていたことだし。

それで、問題はさそり男をどうするかだ。洗脳して本郷猛の親友を名乗る不審者に仕立て上げることは簡単だ。でも、そんな奴が本郷猛の前に現れても、知らない人間に親友だと言われて、シヨツカーを倒すことに協力してくるわけだし困惑の極みだろう。更にはシヨツカーの改造人間でした！　ってオチは俺にもよく分からない。

今からエヴァのカヲルくんよろしく、友情を育んでから殺しあつてもらおうのも一興ではある。ロンリーヒーローとしての、明確でブレない姿勢を植え付けつつ、シヨツカーの非道性を本郷により知らしめることが出来る。

「というか、まずは伊藤老人も必要なんだよな……」

シヨツカーの目論見は、シヨツカーから逃げ出した死刑囚である伊藤老人を本郷猛に匿わせてから殺し、さらに追跡させて自らの正体を明かすことで本郷猛の戦意を喪失させることである。嬉しいことに今のシヨツカーに不要な人間は一人もおらず、逃げ出させて殺すというもつたないことは出来ない。

「今回は普通に戦わせるか」

一応、本郷猛を殺すという目的とは一致しているし、過程や方法は一旦無視していいだろう。まあ、そもそも俺の目的は仮面ライダーの良さを世の中に知らしめることで、この世界の本郷猛を苦しめることじゃないし……既にかなり苦しめてるけど。

物語の結末を決めるのは俺ではなく、この世界の人々に委ねる。彼らが仮面ライダーの素晴らしさを受け入れるのであれば、俺は素直に華々しく仮面ライダーに倒されよう。しかし、仮面ライダーという真のヒーローを拒むのであれば、容赦はしない。

「そのためには、そろそろ政府には俺たちのことを公表して貰わないとな」

片肘をつきながら呟いた俺は、国会中継を見ながら昼飯の弁当を食べ終えた。美味かった。

###

謎のビルス事件は、感染者を収容する病院に匿名で届けられた血清により無事終息した。突如として発生したという新規の感染者も、警察やヒーローが駆けつけたときに

はマンションで倒れ伏しており、全員気を失ってはいたが命に別状はなく、病院に運び込まれた後に送られてきた血清によって呪縛から解かれた。

このニュースは瞬く間に日本中に広がり、人々を湧かせた。マンションでの感染者は意識が朦朧気であったが、断片的に記憶があった。それらを繋ぎ合わせていくと、コウモリと人間を足したようなヴィランに噛みつかれ、さらに噛み付かれた者が他の人間へと噛み付いてビールスを広げていったことも判明した。中にはオールマイトが助けてくれたことを覚えており、助けてくれたことの感謝に涙を流しながら供述する者もいた。この発言もあり、ヴィランを倒して血清を手に入れたのはオールマイトでは無いかという話が広がるも、オールマイト本人は否定。

ヴィランとの決戦が繰り広げられていたという屋上も、オールマイトの一撃で監視カメラが破壊されており、絶命する姿は映っていない。

——ただ、マンション側の道路には何かが落下して爆発したような痕跡が残されていた。

この痕跡と証言の中に『腰にワシかタカのようなマークのついたベルトをつけていた』というものから、警察は今回の事件に繋がるヴィランをショットカーの改造人間だと断定した。

「にしても、倒したのがオールマイトじゃないなら誰なんだ？」

「それを調べるのが今回の俺たちの仕事だ」

特殊犯罪対策チームでは、上司からの命令とオールマイトからの要請でマンション周囲の監視カメラからビールス感染者となっておらず、単身でマンションに乗り込んだ男を探していた。

男と分かっているのはオールマイトが言ったためである。自分が駆けつけた時に明らかにビールスに感染しておらず、怪人と敵対していた青年、それが特殊犯罪対策チームの搜索対象である。

「オールマイトが倒してないなら、その場に居たっていう男が倒したんだよな？」

「でしょうね。でも、ショッカーの怪人って相当強いのによく倒せましたよねその人」

見てみたいかもと呟きながら、手を忙しく動かしているとSNSに投稿された1枚の写真が目に入る。そこには都内にある小さなスナック『アミーゴ』にやべー女が来た

という本文に、顔に青紫の模様と鋭利な牙を生やしたやべー女が1人の男性と交戦しているところであった。

「先輩！ それみてください！」

「なんだ？」

「どしたどした」

珂神が騒ぐとそれに群がるようにして後藤や渡真利が集まってくる。

「珂神、場所わかるか？」

「調べました。事件のあったマンションからかなり近い場所にあります」

「よし、俺はアミーゴに行く。珂神は写真の投稿者にコンタクトを取ってくれ」

「はい」

渡真利の言葉に頷いた珂神はすぐさま、投稿者にDMを送る。渡真利はジャケットに腕を通すと、足早に部屋を出ていく。特に何も告げられなかった後藤は、所用で出ている福井とオールマイトへとこの事を告げようとケータイを取り出す。

しかし、そのケータイが何者かに取り上げられて「なにすんだよっ」怒気を含みながら顔を上げた。

「アアツアツアツアツ」

緑色の体躯にカメレオンのような独特な目をした怪人が、不気味で高い声を出しながら後藤の首を掴む。

「あがあっ」

「い、後藤さん!?!」

一瞬。バキリと首が折れる音を立てた後、後藤はピクリとも動かなくなり、カメレオン男の手から逃れると床へと倒れ伏す。驚き立ち上がった珂神はあまりの唐突さに混乱し、パソコンの画面から目を離してしまう。

「な、な、なんなの、アンタ……」

恐怖からちびりそうな下腹部を堪えて、口を開いた珂神にカメレオンは嘲笑い、こう告げた。

「お前たちにはショツカーの悪名をより轟かせ、世間に知らしめるために利用されてもらう」

「なにを……っ!？」

カメレオン男がそう言うと、珂神の肩から何か突き出ている。鉄を非常に鋭利にするまで研いだサーベルの先が背中から貫通しており、その事実珂神は身体を震わせ、瞳は見開かれカチカチと歯と歯がぶつかる音がする。恐る恐る後ろを振り向けばそこ



に居たのは女性。けれども、見た目が普通ではない。緑色の大きな目に、髪は紫で肌の色も青い。背中にはスズメバチのような羽が生えており、人間と昆虫の特徴を併せ持つという外見はまさに自分たちが追っている組織の率いる改造人間の典型例そのものであった。

「お前はここで終わり。でも、大丈夫。その身体は私たちが使うから」

「っ……」

耳元で囁き、サーベルを引き抜いて今度は心臓を一突きすると珂神も絶命し、頭から地面へと倒れる。それを見下ろすのは2人の改造人間で、2人は互いの姿を元の生物――

カメレオンと蜂へと変えると死んだ2人の体内へと入り込む。

すると、どうだろう。首が折れて死んだはずの後藤と心臓の活動を停止させられたはずの珂神は起き上がる。折れた首も、刺された傷口も塞がった。警察内部に潜ませていた戦闘員から着替えを受け取り、代わりに血の着いた衣服を渡して捨てさせた。

そして、2人は何事もなかったかのように自分達の席に座る。珂神はDMを送った相手とコンタクトが取れると直接話がしたいとメッセージを送る。後藤は窓から、アミー

ゴへと車を走らせる渡真利を見下ろしながら薄く微笑んでいた。

## 出現！ サソリ男！

蝙蝠男の事件からしばらくして、日本につかの間の平和が戻った。とは言っても、ヴィランの起こす犯罪は絶えず、ヒーローや警察が人知れずであつたり、公の場で事件解決をするといういつもの日々だ。シヨツカーが日本に残した爪痕は大きく、国の上層部はシヨツカーの次の行動に警戒心を抱き、シヨツカーと戦い唯一生還したオールマイトを対シヨツカー用の切り札に据えた。

しかし、アジャラーレクスに敗れたオールマイトはその任を拒絶し、代わりに今のナンバーワンヒーローへと委ねられた。手に持った棒状の物全てが金属と同じ硬さ重さへと変わり、それを剣のように操ることから『剣士』と名付けられた男はシヨツカーに敗れて気を落とす次世代の後輩にナンバーワンの強さというものを見せてやろうと奮起していた。

「オールマイトくん。俺に任せてくれ。シヨツカーの怪人は俺が倒してみせるよ」

「ありがとうございます、グラディエール」

力強く言うナンバーワンヒーロー・グラディエールに、オールマイトは頭を下げつつ、彼に耳打ちをする。

「シヨツカーの怪人の能力は未知数です」

だから油断してはダメだと言おうとしたオールマイトをナンバーワンは手で制した。

「大丈夫。これでもナンバーワンなんだ。油断なんてしたことないよ」

ヒーローという立場上、いつだって死と隣り合わせなのだ。それはヒーローという職務をこなしている時だけに限らず、プライベートの間も命を狙ってくるヴィランを見たナンバーワンヒーローがよく知っている。だから、常に伸縮する棒を両ポケットに忍ばせて、奇襲に対応できるようにしているグラディエールに油断など有り得ないと本人は自信満々に言ってみせた。

一方、その頃本郷猛は蝙蝠男の1件から警察に目をつけられることになっていた。街

の至る所に監視カメラが置かれるようになった日本において、蝙蝠男事件の目撃者、あるいは関係者である本郷猛という人間を見つけるのにはそう時間はかからなかった。渡真利が本郷を見つけたのは事件から一週間後のことであり、それから3日を要して彼の詳しい情報を手に入れることとなった。そして、今日は彼とコンタクトを取り、あの日に何があつたかを聞き出そうと、本郷の住むアパートへと足を踏み入れようとした時。

「んあ?」

唐突にバランスを崩してしまった。

「いてて、くっそ、何も無いところでコケちゃった」

こんなザマでは後輩の珂神に笑われてしまうと苦笑してしまう。最近あんまり寝れてなかったからかなと誰かにする訳でもなく言い訳を作りながら立ち上がろうとした渡真利であつたが、何故か右足に力が入らない。足をくじいたか? いや、それだけで感覚が無くなるなんてことは無いだろうと自身の右足を見た。

「はっ?」

見れば右足の足首がなくなっていた。綺麗にハサミで切られたかのようにぱつくりと裂かれた足を見て、声をあげそうになった渡真利の首元へと赤色の手が伸びてくる。

「あゝ あゝ ツ?!」

アパートの塀へと叩きつけられたショックと首を締めてくる赤い手により、普段の生活では出ないような声を漏らした渡真利は、その手の主を見るために呼吸を整えながら顔を上げた。いたのは明らかに人間という存在からはかけ離れているであろう怪物であった。明るい赤ではなく、乾いた血のような黒や茶色を混ぜたような暗い赤の体躯をしたサソリのような怪物が渡真利の首を締め続ける。締めている5本の指が生えた普通の手の逆の手は鋭利で斬れ味の高そうなハサミの形をしており、刃には血が滴っており、自分の足首を切った相手はこいつかと渡真利は歯を食いしばる。

「お、おま、えは、なん……だ!」

「俺か？ 俺は復讐者だ」

「ふ、くしゅう、しゃ……？」

「そうだ。俺は本郷猛を殺す者。やつを俺は許せない」

くぐもった声から発せられる強烈な殺意は、いくつものヴィラン事件と関わったことのある渡真利ですら恐怖を覚えるものであった。殺意を向けられた対象が自分ではないにも関わらず、膝は震えて、齒はカチカチと恐怖の音を立てている。

「じ、じゃあつ、お、おれ、おれは！ 関係つ、ないだろう!？」

「ああ、ないな」

そう言われて安堵した渡真利であったが直後にサソリ男に告げられた言葉と共に彼の視界は真つ暗になった。

「だから、死ね」

1人の警察官の首から上が飛び、地面へと落下する。アパートの塀の向こう側へと落下した生首を踏み潰しながらサソリ男は宿敵の住むアパートへと眼を向ける。本郷猛本人だけでなく、本郷猛に関係する者、本郷猛に近づく者。それら全てはサソリ男の中の男にとつては殺すべき敵なのだ。断末魔を上げさせることなく渡真利を屠ったサソリ男は怪人態を解除すると、どこにでも居そうな普通の男になる。先程の殺害を捉えているであろう監視カメラもショットカー科学人が映像を書き換えて何も無かったことにし、渡真利の死体もどこからともなくやってきた戦闘員が回収してしまう。それを見送ったサソリ男の中身、中野は本郷の住む部屋の扉をノックする。返事はない。昼間だから、まだ帰ってきていないのかもしれない。となれば、いるのは立花藤兵衛の経営するアミーゴかと中野は踵を返した。

###

ショットカーから改造手術を受けた本郷猛は自身の力に戸惑いつつも、緑川博士の死と



オールマイトに誓った人間の自由のためにシヨツカーと戦うという自ら課した使命を果たすべく、シヨツカーの情報を探っていた。しかし、公にはシヨツカーの情報は開示されておらず、蜘蛛のようなヴィランの情報を調べれば本郷の見た怪人とは違うヴィランが出てくる。さらに最近まで世間を騒がせていたビルス事件の首謀者である蝙蝠男に關しても、オールマイトが倒したという話だけで止まっている。

「シヨツカーのシの字もないな」

立花藤兵衛は本郷の話聞き、本当にそんな存在がいるなら大変なことだと、共に調べているが目に付くような情報は少なく、本郷の妄想ではないかと思いついていた。だが、実際にシヨツカーの怪人や戦闘員、科学人を目にした本郷は、彼らの手がかりを見つけ出し、一刻も早くシヨツカーを壊滅させなければと血眼になっていた。

「そうだ。俺と緑川博士が捕まっていた施設に行けば何か手がかりがあるかもしれない」

「場所は覚えているのか？」

藤兵衛の問いに頷いた本郷はすぐに行きましようというアミーゴを出ようとするが、そこに1人の男が入ってくる。その男に本郷は見覚えがあった。

「よう、本郷久しぶりだな」

「……中野か」

本郷と中野の関係は小学校からであり、彼とは高校まで同じであった。しかし、大学受験の際に本郷と同じく城南大学を志望していた中野であったが、彼は受験に失敗し浪人生となった。高校を卒業してからは会っていなかった知人との再会であったが、本郷にとって今優先すべきはシヨツカーのアジトに行くことであり、中野を無視して外へ出ようとする。「待てよ」と肩を掴まれた。

「どこへ行くこうって言うんだ?」

「すまない。俺には行くべきところがあるんだ」

「シヨツカーのアジトならもう引き払った後だぜ？」

「何っ!？」

さも普通に会話する中野に本郷は距離をとった。どうしてシヨツカーの事を知っているのかと問いただす前に、中野はポツポツと語り始めた。

「いたんだよ俺も。お前と……誰だっけな、名前は忘れたが城南大学の教授さんが収容されていた場所にな」

「何故だ」

シヨツカーが捕らえているのは無個性の人間か、有能な科学者だけだ。中野は個性があり、科学者ではない。どちらにも当てはまっていない中野を攫うメリットがシヨツカーにはないのだ。

「俺も聞いた話だから本当かは知らないが、シヨツカーは個性を抜き出す男を組織に迎え入れたか、あるいは同盟を結んだって話だ」

「個性を抜き取る? どっかで聞いたような話だな」

「知っているのか、おやつさん」

「ああ、まあ結構前の話だけだな」

藤兵衛曰く、個性が発現してすぐの頃、個性発現者の中に魔王と呼んでも差し支えの無い男がいるという噂が立ったらしい。その男の個性というのが他人の個性を抜き取り、自分のものにしてしまうというものであつたらしい。藤兵衛が知ったのは身の回りで優秀と呼べる個性持ちが何人も行方不明になるといふ事件からであり、今回のシヨツカー事件とはかなり酷似していた。ただ、攫う相手は個性持ちからなしに変わっている。なので同じ犯人とは言えないというのが藤兵衛の所感であつた。

「なるほど、それで個性を持っている人間も攫うようになったのか」

だったら、本郷や中野のような一般人でなくても、ヒーローや大物ヴィランのような個性持ちを攫う方がショッカーにとつてはメリットが大きい気がすると思つた本郷ではあつたが、一般人の方が攫いやすいからかもしれないと結論を出して中野の話に戻つた。

「中野が攫われた理由は分かつたが、それでどうしてここに？」

「ヒーローに助けて貰つてな。逃げ出してきたんだ」

本郷と緑川博士が脱走した後、機関部をやられたショッカーはそのアジトを放棄するか否かの選択を迫られていたという。そんな時に山岳部を中心に活動するというヒーロー達にアジトが見つかり、蜘蛛男という柱のいなくなつたそのアジトはもぬけの殻で、捕まっていた人間達はヒーロー達によって解放されたという。

「それでさ、ヒーローにボコられる前に命乞いをした戦闘員が言つてたんだよ。1人改造手術を受けたにも関わらず逃げ出した化け物があるって。俺たちを殺す前にそいつ

を殺してきたらどうだつてな」

「……それが俺だと?」

「ああ。ご丁寧にも名前も教えてくれたんでね」

逃げ出して、他の脱走者は警察に向かったが、中野は本郷のところの方が安全かもしれないとこちらにやってきた。警察に向かう途中にシヨツカーの襲撃に合う可能性の方が高いと考えたのだ。

「実際、こつちの方が気楽そうだし、警察にシヨツカーの事を伝えようにも下の方のやつが出てくると笑われそうだろう?」

たしかに知り合いという間柄の人間が被害者にいれば、話は通りやすいかと納得した本郷は、他にシヨツカーの情報はなかと中野に尋ねた。

「いや、今言った情報と……あとはもう一つの基地の場所くらいだな」

「どこだそれは」

「ここからそう遠くない廃墟だ。真偽は分からないが」

行ってみるかと思ふと中野が目線で問いかけると本郷は頷き、2人はバイクでその廃墟へと走り出す。

本郷にとつて小学校から高校まで苦楽を共にした知人がシヨツカーと戦う仲間になったことは孤独であると思ひ込んでいた彼に光を灯していた。同じシヨツカーの被害者という絆で結ばれていると感じていた本郷であつたが、中野の案内した廃墟に着いた時、本郷は凄惨な状況を目にすることになった。

「これは……」

シヨツカーのアジトがあると聞いていた場所はたしかに今は使われていないであろう廃墟であつた。しかし、廃墟の壁にはたくさんの生首が打ち付けられていた。打ちつけられた顔にはどれも見覚えがあり、記憶を遡れば小学校から高校まで、テストや通知

表の成績が本郷や中野よりも良かった者達の顔であった。

「見ろよこいつらの顔を。綺麗な顔だろ? 死んでるんだぜえ!」

ギャハハと下卑た笑い声を上げる中野に何のつもりだと本郷は睨みつけた。

「見て分からねえのかよ! ここにいるのはな! 努力もせずに個性の恩恵を受けて、俺よりも成績トップに躍り出やがったクズたちの墓場だ! そして本郷! てめえもこいつらの仲間にしてやろうってことよ!」

「……俺は個性などに頼っていない!」

本郷は自らの個性をIQ700と公言していたが、実際には個性とは全く関係のない、彼本人自身が持つポテンシャルによるものだった。

「ああ知ってるよ! だから余計にムカつくんだよ!!」



だが、中野は知っていた。本郷が誰よりも努力していたことを。両親が厳しく優しく彼を育てて文武両道、個性を使われなければ誰にも負けないであろう男であったことを。だからこそ、中野は本郷を恨んだ。個性を持ちながらも、本郷に勝てない自分を。学力も身体能力も、中野は本郷に届くことは無かった。必死に努力すれば個性持ちすらも超えることができると信じてきた中野であったが、どうしても学年順位5位以内の壁は厚く、いつも知能上昇や記憶力系統の個性持ちや本郷猛によって阻まれてきた。

しかし、それもあいつらは俺よりもいい個性を持っているからという逃げ道があるから納得出来た。でも、本郷猛は違った。無個性でありながらも努力して個性持ち達と並ぶほどの能力を持っていたのだ。

「だから、俺はお前を許せない！ お前だけは、俺が殺す！ 首領は俺にそのための力をくれた！」

「……ッ！ まさか！」

「そのまさかだ！ 改造人間がお前だけだと思ふなよ!!」

強風が吹き、砂が舞うとと共に中野の身体が変わっていく。ただの人間から異形の右手とサソリのようなシルエットを帯びた怪物へと変貌していく。憎悪を身に表したような体色をした怪人サソリ男は本郷猛へと襲いかかった。

「ぐっ!」

「死ねっ! 本郷!」

ひと振りで人の首を切断できる右手を振るい、左手で本郷を掴もうとする。

「くそ!」

一方的に追い詰められる本郷は、廃墟の中へと逃げ込んでいき、それをサソリ男は嘲笑った。

「そうかそうか。そんなにそいつらと死にたいか。だったら望み通りに……ッ!」

してやろうとした時、廃墟の中へと足を踏み入れたサソリ男が目にしたのは本郷猛の姿ではなく、緑色のマスクと赤いマフラーが特徴的な戦士であった。

「来い！ サソリ男！ 仮面ライダーが相手だ！」

「何が仮面ライダーだ！ 死ねえッ！」

廃墟に来る前とサソリ男が変身する際に風エネルギーを溜め込んでいた本郷はすぐさま変身することができ、自分と同じく改造人間に成り果てた中野とあいまみえた。しかし、首領だけでなくオールフオーワンからも認められる程の改造素体であった本郷猛と、ただ本郷猛に対して恨みを持っているからという理由だけでサソリ男に選ばれただけの中野には明らかな力の差があり、生身の人間ならスパスパ切れるハサミも弾丸すら弾く胴体を持つ仮面ライダーには無力であり、そもそも当たりさえしなかった。

「くそっ！ くそがあッ！ なんで当たらねえんだよ！」

柔道や空手を学んだ本郷にとって、ナイフを持って振り回す素人のような動きをする

ような中野は敵ではなく、知人という温情から一切手を出すことは無かった。だが、逆にそれが中野の怒りに油を注いだ。

「ちきしょうつ! 舐めやがつて! こうなつたら……!」

自分の力では本郷を倒せないと悟つたサソリ男は逃げるようにして、マンホールの下へと逃げ込むと、仮面ライダーは逃がすまいと追いかける。

「待て!」

「待つのはてめえだ! 少しでも動いてみる! 俺の体内に駆け巡る猛毒をこの放流水に流し込んでやる! そうなればどうなるかな!」

放流された水は浄水施設で綺麗な水となり、再び生活水として使われる。だが、放水された水の中に通常の手段では浄化できない猛毒が入っていれば。

「やめろ中野! これ以上罪を重ねるな!」

「黙りやがれ!! 正論はもううんざりなんだよ!」

もうダメだ。自分の言葉はもう届かないと踏ん切りを付けた本郷は怒りで我を忘れてかかっているサソリ男が猛毒が流そうと意識を集中した瞬間に攻め込んだ。一瞬でも心を許し、共に戦おうと決意した知人を殴り、蹴り、改造人間となつてかつてのクラスメイト達を血祭りに上げた男に温情もなく、地下道から地上へとかち上げる。

「お、お前は俺をどれだけコケにすれば、気が済むんだよクソが!!」

前のめりに突っ込んできたサソリ男へとライダーキックを決め込もうとした仮面ライダーであつたが、仮面ライダーを倒す攻撃力はなくとも、彼自身を守る防御力がありそうな右腕先の大きな鍔が邪魔になると判断した仮面ライダーは自身の最大の特徴である脚部の力を最大限に使う。鍔まるごとさそり男の首を開いた両脚で挟み込み、捻り上げるようにしてさそり男の自由を奪いとると、彼は大きく叫んだ。

「ライダーシザース!」

結果として、断末魔も上げさせることなく自身の復讐心を満たすために人殺しを行ってきたサソリ男は皮肉にも、自分も声をあげることなく体内の爆破装置が起動し、その体を四散させた。

知人ですらも敵として送り込んでくるショックの恐ろしさを改めて実感した仮面ライダーは赤いマフラーを靡かせながら、サソリ男が散った場所を見下ろしていた。

## 大首領のお仕事

サソリ男が倒されたのを皮切りに次々と怪人を送り込んだ我らがシヨツカー。仮面ライダー1号こと、本郷猛の周りで起きる奇怪な事件の数々。しかし、それらを経験してこそ真のヒーロー、正義の味方と呼べる存在が育っていくというもの。

カマキリ男、サラセニアンが倒されて続いては死神カメレオンという筋骨きだ。悪の秘密結社という体裁を持ちながらもシヨツカーの存在を知らしめようと警察官の身体を乗っ取らせたはいいが、有用な使い道が見つからずに難儀していた。

ナチスの財宝がないために、やる事が本郷猛抹殺くらいしかない。しかも、カメレオンの名に恥じず、姿を消すことが出来る他、変装の達人でもある彼をここで亡くすのは惜しいとも感じてしまう。

けれども、仮面ライダー1号が強く成長するためには必要な過程であり、1つでも省いてしまつて新1号へと至る前に死なれては困る。真のヒーローの誕生のためには致し方ないかと思いつつも俺は適当にでっち上げた宝物を用意する。こちらの歴史は俺のいた世界と似通っている部分があるため、ナチスの財宝や徳川家の残した秘宝だとか

言っても問題はないのだが、専門家が見てしまうと偽物なのがバレてしまう。オマケに本郷猛は驚異的な知能指数を持つわけだし。

本郷猛抹殺計画だけを押し進めるには、死神カメレオンはやや火力不足だ。けれども、1号のときに敵怪人が2体以上同時に現れる場面はトカゲロンとの戦いまでなかったはずだ。2号やV3以降だとよくあることなんだけどね。

かなり雑になってしまいが、どっかの誰かさんの邪魔が入らないうちに1号の経験値を蓄積させてもらおう。他にもやることはたんまりある。2号候補の発見に、素の身体能力でキックが強力な改造人間の素体と……うーん、死神カメレオンの代わりを見つけないとなあ。

### 「大首領」

はあとため息をついていると背中に声をかけられる。見れば変身態を解除したアジャーラがいて、彼女から今日の予定が伝えられる。頭の中にコンピュータ積んでいるから、人間の秘書よりは使えるだろうと俺のスケジュール管理を任せてみたが、これが使えすぎて居なきや無理なレベルになってきた。加えて科学陣が何をしたのか、料理やら家事全般はこなせるし、一般的に公開されている人工知能を凌ぐほどの学習能力を



持つせいで感情表現も豊かになってきた。けど、君、いずれは俺の代わりに死ぬんだよね。

おかげさまで、家事代行サービスを雇わなくても家の中は綺麗だし、健康的かつ美味しい食事にもありつけている。デメリットとしてはヒーローやヴィラン掃討に出てる時は俺の部屋は汚くなり、まともな飯にありつけないということだろうか。いや、インスタント食品も美味しいんだけどね。やはり、人から作ってもらった方が温もりがあるっていうか……あ、こいつ厳密には人じゃなかったわ。でも、人造人間だし、一応は人間なのか？　とうとう心も持ち始めたし、人間と言っても差支えは無いのだろうか。これがシヨツカー最高戦力かあ……たまげたなあ。

「じゃあ、行ってくるよ」

「はい。死神カメレオンの宝石庫、強奪計画はこのまま進めていいでしょうか」

ああ、たしかナチスの財宝の代わりに、宝石から新エネルギーを抽出するために盗んで来いって計画書を渡したんだっけか。やっぱり寝ぼけながら書くのは良くないな。うん。

「任せる」

「かしこまりました」

これなら宝石庫をめぐる2話くらい戦ってくれそうだし、その間に死神カメレオンの代わりでも作ろう。けど、姿を消せて、諜報活動に向いている怪人って他に居たっけ……？

###

もうみんなはお忘れかもしれないが、俺の本職は悪の秘密結社の大首領であると同時に医者である。知名度も腕も底辺であるにも関わらず、クソ面倒な会議に呼び出されるのは同期の医者が全て悪い。

「そう怒らないでくれ。俺も1人じゃ肩身が狭いんだ」

「知るかよそんなの」

俺の同期にして高校時代から医大にかけての知り合い、穀木球大という俺でも知つて  
るような医師の下で働く男だ。若手は出る必要も無い医師会の会合が終わると馴れ馴  
れしく絡んできた後に、こうして近くの居酒屋へと俺を連れ込むとケラケラと笑いなが  
ら、酒を飲む。

俺と違つてエリート街道を歩いているこいつは、若くして名の通つた総合病院に勤め  
ている。まだ研修医扱いらしいが、あと5年もすればそれなりの地位が貰えるだろうと  
俺は睨んでいる。

「お前は小児科医のくせに、脳の手術の方が上手いからな。病院ができたら外科医とし  
て俺が推薦しよう」

「遠慮するよ」

変に上手くやると、面倒な仕事を頼まれるからな。腕のいいフリーランスの医者は高  
い手術料を渡されたら、ホイホイと出向いていくが俺はそんな事しない。脳の手術のス

キルは磨きあげるのに実践が必要だったからやったにすぎない。

「しかし、お前も無個性だと苦勞するよな」

医者は個性じゃなくて腕次第で這い上がれるからヒーローやヴィランにならなくて良かったなどと語る同期に俺は適当に相槌を打つ。

「そうだ。最近、先輩が新しい論文を書いててな。これなんだけど、どう思う？」

「どうって……」

見てみればタイトルは「個性特異点」。世代を経るごとに混ざり、より複雑に、より曖昧に、より強く膨張していく「個性」。その容量の膨らむ速度に身体の進化が間に合わず、コントロールを失う現象が現れるのではないかという趣旨の内容だ。まだ公表はされていないらしいが、著者の院内では既に有名ならしい。

容量に身体を適応させなければ人は制御できなくなるため、新たな進化が望まれるか。じゃあとりあえず、宇宙に対応した新人類でも作ってみたいんじゃないですか

ねという感想しか出てこなかった。

「これ、お前のところではどうなの?」

「どうつて、そりゃ……」

彼は言葉にせず、おどけたように首を振つて全く取り合われていないと伝えると再び酒を飲み始める。確か、個性は脳と結びついていているから、個性が発現した時に脳のキヤパシティを超える人と人間はヒトとしての活動に支障を来すようになるつて話も聞いたことがあるな。多分、同じ著者が書いたことなんだろうが。榎木先生とは会う機会はないが、この人と会うために論文を書くというのも何か違う気がする。

いざとなつたら洗脳か何かで話し合いにまで持ち込めばいいだろうし、今は話す必要も無いだろう。仮面ライダーに個性は関係ないしな。

だが、彼の言う話が本当だとしたらデストロン怪人を作る時に2つの個性を与えると動かなくなるやつも出てくるつてことか。そうなる頃には個性の研究も進んでいるかもしれないが、頭の片隅くらいに留めておいた方が良さそうだ。

## トカゲロンと怪人軍団

シヨツカーの行った日本への攻勢計画は、俺の計画通り仮面ライダーの手によって見事に阻まれていた。

シヨツカーの資金調達と新エネルギーの発見を名目にした死神カメレオンによる宝石強奪作戦。世界で最高峰純度と輝きを持つ宝石にして、特殊なエネルギーを秘めているとされる魔宝石の奪い合いは宝石庫に潜んでいた仮面ライダーによって、阻止され死神カメレオンはライダーキックとライダーチョップを受けて倒れた。

続いて新規労働力確保のためという名目で失踪事件を起こさせた蜂女。催眠音波の誘導装置が取り付けられたメガネを買った人間を誘い、毒ガス製造工場へ誘導したものの、工場を仮面ライダーに発見され、蜂女にライダーキックが炸裂した。

全世界の金を奪うために出動したコブラ男は左腕につけたコブラの口から毒ガスを噴射してあらゆる物質を溶解させる能力を持っていたが、当たらなければどうということとはなく、一度は仮面ライダーの前に倒れるも、シヨツカー科学陣の力で復活。ここで再生怪人のノウハウを得て、原作通りコブラ男の強化にも成功したがライダー返しとい

う技を身につけた仮面ライダーには勝てなかった。

立て続けにやられていった怪人たちを見て、オールフォーワンから煽りが入ったがこれも計画通りと悟られる訳にいかないため、かつて敗北した怪人たちの戦闘データをコンピュータで解析し、長所だけをよりすぐった怪人、ゲバコンドルを生み出すことになった。まあ、ただ生み出すだけでなく簡単なのだが、ゲバコンドルを最強にするには若い女の生き血が必要という設定があったので、結婚式のために訪れる新婦達からゲバコンドルが血を奪っていた。しかし、ここでも仮面ライダーの邪魔が入る。ただ、意外だったのはこの世界にも滝和也が存在したことである。本郷猛との関係は不明だが、原作通り結婚式中にゲバコンドルが現れてそこに仮面ライダーが危機に割って入る。ここから本来ならゲバコンドルに仮面ライダーは1度倒されるのだが、予想以上に仮面ライダーが強かったのか、ゲバコンドルが吸血した量が少なかったのか、滝和也というFBIのせいとか、ゲバコンドルはあっさりと死んだ。ちなみにこの回から藤岡さんがバイク事故で出演できなくなるのだが、この世界の本郷猛は藤岡さんでもなければ、バイク事故も経験していないため健在である。個人的に喜ばしい反面、シヨツカーは追い詰められており、最強怪人と宣って出した怪人がやられてしまったため本格的に強い怪人を作らざるを得なくなった。だって、電光ライダーキック見たいじゃん？

ということで、最強怪人トカゲロンとその取り巻きである再生怪人作成のための時間

稼ぎに生み出したのがヤモゲラスである。原作では動物を瞬時に骨にするデンジャーライトの性能実験とさらに強力にするために白川博士を攫うという作戦なのだが、この世界に緑川博士はいたのに白川博士はいなかった。なんで滝はいるのに細々としたキヤラは居ないんだよ。なお、この回は藤岡さん不在のためルリ子さんが大活躍するのだが、この世界にルリ子さんはいないし、本郷猛は健在なので普通に倒された。というか、ヤモゲラスには悪いが適当に作りすぎたせいでハチヤメチャに弱かった。シードラゴンシリーズかよ。

しかし、彼の死は無駄ではなかった。この世界にも少数ではあるがサッカー選手はおり、その中から世界的に注目を浴びる選手、田本健を誘拐することに成功した。彼をベースにトカゲの力をぶち込んだ結果生まれたのが、キック力だけなら仮面ライダーをも超える怪人トカゲロンである。だが、キック力のみ強くても仮面ライダーには勝てないからと再生怪人達も用意してオールフォーワンには「勝ったなガハハ」と言っておいたが、俺にはトカゲロンと再生怪人たちがトカゲロンの蹴ったバリア破壊ボールが仮面ライダーによって蹴り返されて爆死する未来が見えていた。まあ、再生怪人はライダーのパンチ数発で死ぬんですけども。

東洋原子力研究所の強力なバリアを破壊するため、また仮面ライダーを倒すために張り切るトカゲロンを憂いに満ちた目で送り出した俺は彼の活躍を小型カメラから送ら



れてくる映像を介して見守っていた。

###

東洋原子力研究所を襲い、東京を放射能まみれにしようと企むショッカー！ それを阻止せんと現れた仮面ライダーに変身した本郷猛だったが、今までの怪人とは一線を画す強さを持ったトカゲロンに、必殺のライダーキックを受け止められ、今まで怪人達を打ち倒してきた技を使うも、それもトカゲロンには何の効果もなかった。

そして、トカゲロンの必殺シュートをもとに喰らって重傷を負わされた仮面ライダーは変身解除に追い込まれてしまう。あやうし！ 仮面ライダー！

「やった！ 勝ったぞ！ 俺は仮面ライダーに勝ったアー！」

勝利の雄叫びを上げるトカゲロン。だが、そこへ駆けつけたのは都内で活躍するヒーロー達であった。

「大丈夫か君！」

「な、なんなんだあのヴィランは……!」

東洋原子力研究所周辺で争う声がするという通報を受けてやってきたヒーローたちはトカゲロンと傷だらけになって倒れている本郷猛を見て酷く狼狽した。

「長いことヒーローをやっているが、なんだあいつは……」

雰囲気でわかる。あのヴィランは強いと。それにトカゲをモチーフにしたトカゲロンのフォームは非人間を思わせるような恐ろしさを秘めており、それが人間に備わる生存本能に「戦うな」と強く呼びかけていた。しかし、市民を守るためにヒーローは立ち上がらなければならない。

「ここは俺が相手をする! 君はその青年を病院に!」

「えっ、でも……!」

「いいから早く行け！」

一人で戦うのは無謀だと後輩ヒーローは口にしようとしたが、ここで全滅して生存者がいなくなるよりはと本郷猛を背負うと戦場から駆け出す。しかし、背中に響く声は先輩ヒーローの悲痛な叫び声だけだった。本郷を病院に送り届けてから翌日、全身骨折と出血多量という直視することが難しい状態で発見されたのは先輩ヒーロー、自分と本郷を逃してくれた先輩ヒーローであった。

「く、クソ……い、何がヒーローだ！　何が、人を助ける、ためだ！」

後輩ヒーローが顔を涙で濡らしている頃、本郷猛は病院から抜け出していた。早くトカゲロンを倒さなければ東京が大変なことになってしまう。これ以上死人を出すわけにもいかないと、本郷猛はトカゲロンに打ち勝つために立花藤兵衛と共に特訓を行った。

そして、先輩ヒーローの仇を取るため、単身で東洋原子力研究所を守っていた後輩ヒーローのピンチに仮面ライダーが駆けつけた。

「なんだ、仮面ライダー。また死にに来たか！」

「シヨツカー！ お前たちがやろうとしていることはもう分かっている！」

「フフ、だからどうした！」

「もちろん、俺が止めてやる！」

トカゲロンへと向かおうとしたその時、仮面ライダーに四方八方から様々な攻撃が襲いかかる。動きを阻害する白くネバネバした糸が腕に絡み、足に痺れを起こさせる毒針が刺さり、小さなサソリたちが自身の足を食いちぎろうと近づいてくる。さらに緑色の触手が太ももへと伸びてきた。また首元には鋭利な鎌が迫り、何も無いところからは長く細い舌が仮面ライダーの胸装甲を貫こうと接近している。そして、それらの攻撃を行う怪人達の周りには先日倒したばかりの蜂女、コブラ男、ゲバコンドル、そしてヤモゲラスが今か今かとトカゲロンの攻撃指示を待っていた。

「とぅっ！」

危機的状况を脱するためライダージャンプで跳躍した仮面ライダーは、手足に絡まった糸や触手を振りほどき、近くまで迫っていた舌や鎌の攻撃から逃れると、距離をとるために高台へと着地するも、飛行能力のある蝙蝠男が襲いかかってくる。

「キキキキキッー！」

「ウヒューー！」

蝙蝠男の攻撃を躲すと、不意打ちにゲバコンドルの爪がライダーの肩を抉る。一体一体は大したことのない再生怪人とはいえ、これだけの数を一人で相手にするのは難しいと仮面ライダーはどうやって倒していくかを考えた。しかし、悠長に一体ずつ倒しているとトカゲロンのバリア破壊ボールが研究所へと蹴りこまれてしまう。どうしたものかと考えている時にも、再生怪人たちの攻撃は続いていく。中身はかつて倒した同級生でなくても、能力は変わらないサソリ男の攻撃をいなし、腕に触手を這わせたサラセニアンを蹴り倒す。だが、次々に仕掛けられる攻撃に仮面ライダーも手を焼いていた。その時だった。

「キイーツ!？」

突如として蜂女が悲鳴をあげながら高台から転げ落ちていったのだ。何事かと仮面ライダーは蜂女が先程まで立っていた場所を見た。するとそこに居たのは――

「私が、来た!」

筋肉隆々な肉体に触覚のように立った金色の髪、そして恐れを知らないような笑顔を浮かべたオールマイトは仮面ライダーと目を合わせると口を開いた。

「仮面ライダー!　ここは私たちに任せろ!」

「私たち……?」

仮面ライダーが首を傾げようとすると、仮面ライダーを取り囲んでいた怪人たちが悲

鳴を上げていく。そして、その出処を見れば本郷猛でも知っているようなネームバリューの高いヒーロー達が再生怪人を相手に奮戦しているのだ。

「これは……！」

「ほん……仮面ライダー！」

驚きの声を上げると崖下から聞きなれた声が仮面ライダーの耳に届いた。視線の先には仮面ライダーに協力すると最近、親交を持った滝和也と本郷猛にとってのおやつさん、立花藤兵衛が手を振っていた。

まさかこの2人がヒーローたちを呼んでくれたのかと仮面ライダーが驚愕しているとゲバコンドルを取り押さえながらオールマイトが口を開く。

「行け！ 仮面ライダー！ あの怪人を止めるんだ！」

「……おう！」

頷いた仮面ライダーは再びライダージャンプでトカゲロンの前へと立つ。しかし、その距離はやや遠く、トカゲロンは「何がしたいんだ仮面ライダー」と嘲笑うとさらに煽るようにして続けた。

「まさか俺の必殺シュートを止めるって言うのか？ 昨日止められなかったお前に止められるとでも？」

仮面ライダーは答ええない。だが、いつでも来いという気迫がトカゲロンにも伝わってくる。洗脳されたとはいえ、強者に立ち向かうことを生きがいとしていた田本健の気質が残っており、面白いと口角を上げた。

「行くぞー！ 今度こそ死ぬー！ 仮面ライダーー！」

大きく勢いをつけた足から放たれたシュートは、バリア破壊ボールの重量をもものともせず、20 m離れた東洋原子力研究所へと向かっていく。シュートが放たれた瞬間、仮面ライダーは跳躍していた。



(思い出せ……！)

やられた自分に失望することなく、さらなる力をつけるために、新たなる必殺技を生み出すのに付き合ってくれた立花藤兵衛の思いを。

(刻みつけろ……！)

自身を改造した後悔に蝕まれながらも、人類のために戦えと言って死んでいった恩師の言葉を。

(何のために俺はいるのかを……！)

滝が呼んできてくれたヒーロー達が再生怪人を抑えてくれている。それは何のためかを。

「人間の自由と平和のために、お前たちを倒すためだ！」

稲妻が迸る。文字通り仮面ライダーの右足にバチバチとエネルギーの奔流が集合し、その一撃がトカゲロンの放った必殺シユートに込められたパワーと激突する。

「電光ライダーキック!!」

必殺シユートを超えるパワーがバリア破壊ボールへと注がれ、ボールはシユートを放ったトカゲロンの方へと加速しながら返っていく。

「……見事だ、仮面ライダー」

出来れば、もっと違う形で戦いたかったとトカゲロンは瞳を閉じて自分の敗北を受け入れると共に、バリア破壊ボールが腹部へとぶち込まれる。バリアを破壊するために注がれたエネルギーと、それを打ち返すために注がれたエネルギーの籠ったボールはトカゲロンの腹部で破裂し、彼の身体を爆発させた。

「今だ! デトロイト……スマッシュシユ!!」

一方、再生怪人たちもオールマイトや他のヒーローの必殺技を受けて爆散していく。九州、四国を襲ったヒーロー狩りを行っているとされるシヨツカーへの反撃に成功したヒーローたちは歓声を上げた。1人の死者を出したものの、東京を救い、名だたるヒーローたちが力を合わせての勝利に喜ばない者はいない。

「やったな、仮面ライダー！」

勝利の感動を分かち合おうとオールマイトは仮面ライダーの方へと近づくが、返ってきた答えは暗いものだった。

「いやまだだ」

シヨツカーがいる限り、俺たちは戦わなくてはならない。仮面ライダーはシヨツカーの攻撃がまだ終わらないことを予見していた。次はトカゲロンを超える怪人を作ってくるかもしれない。喜んでいる場合では無いのだと仮面ライダーはマフラーを風に靡かせながらバイクへと跨った。

「だが、ありがとう。君たちのおかげで俺はショツカーの怪人を倒すことが出来た」

また会おう。オールマイト。

仮面ライダーはそう言い残してバイクで走り去った。

ライダーはトカゲロンのバリア破壊を阻止し、再生怪人達もヒーロー達の手によって倒された。ここに危機は去った。しかし、仮面ライダーとオールマイトの果てしなき戦いは続くのである。

## 幕間：NEXT STAGE

謎の戦士とヒーローたちの活躍によって、謎の秘密結社ショッカーは倒された。

と、世間及び政府といった日和った脳天気なやつらはその事実だけを見れば、正義が勝った。そう思っているだろう。しかし、悪が栄えた試しはなくとも、悪が完全に滅びた実例は無いのだ。

人の持つ欲望は時として、人を滅ぼしかねない猛毒になる。その猛毒こそが超常現象社会に蔓延るヴィランという存在なのだ。

自己の利益のために他者の犠牲を顧みないエゴイスト。悪とはそういうものだ。では、俺がそうでは無いのかと問われたら、俺は何も答えないだろう。

俺は自分の信じる正義のために生きているだけで、そこに辿り着くまでの過程を振り向くことも気にすることも無い。エゴイストの頂点だ。けれども、結果的にどんな悪にも屈しない正義の戦士を作り出すのだから、終わりよければすべてよし。

勝てば正義、負ければ悪

俺が仮面ライダーを作り、育てる過程で俺に使い倒されたやつは俺から見れば負け犬。そして、最終的に仮面ライダーに倒されるのだから悪だ。そう、それでいい。俺は悪で良い。この世界に生まれ、仮面ライダーを作るといふ夢を抱き、そのために歩き出した俺は悪そのものでいい。

何故ならば、正義はいつだって悪がいなければ成り立たないのだから。俺という悪から、仮面ライダーが生まれるのなら俺は悪でよかつたと思つて死ぬ事が出来る。悪には悪の救世主が必要つてね。それが俺にとつては仮面ライダーつて話なのだ。

「それで大首領、ヒーローたちは君のとつておきたちを倒して勢いづいた。トカゲロンで倒すと言つていた仮面ライダーは健在。はてさて、どういふことか説明はあるかな？」

じゃあ、目の前で俺を糾弾してくるこの男にあるモノはなんなのか。悪の王、魔王にでもなりたいたいのかと思えるような独善性と、それを可能にする力を手にした男。真の悪にとつての正義はなんなのか。聞いてもいいが、どんな答えでも俺は「ああ、そうか」と答えて終わりだ。だって、興味無いし。

そもそもこいつから近づいてきたくせに偉そうなんだよな。まあ、無個性人間の提供

とかしてもらって、互いに利用する仲ではあるんだけど。俺がこいつにとってのエンターテインメントを提供出来ているうちは殺されることはないんだろうけど、それが無くなればこいつは俺の個性を奪って躊躇なく俺を殺すに違いない。

「説明も何も、ヒーローと仮面ライダーが協力する可能性を考慮できていなかった私の落ち度……といえれば満足だろうか？」

個人的には熱い展開だったので申し分ない。オールフォーワンとのこれがなければの話だが。

「トカゲロンがダメならば次だ」

かと言って、先程述べた通りこいつの力は改造人間を作る上で必ず必要になる。無個性の人間をベースに他の生物を取り込ませ、その上から原典の能力を科学技術で付与するという手順はショッカー改造人間の系譜を担う上で絶対だ。

それに個性の力が強まっているとはいえ、1つの個性をベースに別の生物をぶち込むことになるだろう。ゲルショッカーやデストロン怪人を作るにはまだ俺自身の経験値が

足りない。

悪いとはこれっぽっちも思っていないが、謝っておくならオールマイトを殺すのはまだ先になる。というか、俺は別に邪魔だとは思っていないし、オールフォーワンが自分で蒔いた種ならお前が何とかしろよってのが本音だ。

でも、そう言う俺も巻き添えを喰らう。そんなことを言っつて、せつかくの好機を逃すのは良くない。トカゲロンが倒された次は誰かって？

「へえ、次は何を作るんだい？」

そりゃあもちろんメキシコからの使者、サボテグロン——ではない。

「仮面ライダーを倒すのは……仮面ライダーだろう？」

ライダー2号を忘れていたな！

忘れるわけないだろう。後に力の2号と呼ばれることが確約された存在を。そう、一文字隼人を。



# # #

東洋原子力発電所を襲った怪人トカゲロンと再生怪人たちを倒して以後、オールマイトの活躍をニュースで見ない日はなくなりつつあった。敵を倒したというニュースはもちろん、自然災害や立てこもり、銀行強盗といった事件も解決していき、次期ナンバーワンヒーロー候補と目されつつあった。

インタビュには最低限かつ最高の答えを返して、オールマイトは次の事件解決に向けて飛び去っていく。今日もまた東京都内で起きた事件をひとつ、またひとつと解決していくと、そこには彼を褒め称える喝采と今注目度ナンバーワンヒーローの言葉をもらおうとマスコミで溢れかえっていく。

「オールマイト、一言お願いします！」

「こちらにもお願いします！」

「こっちにも！」

「H A H A H A！ インタビューはまとめてやらせてもらおうよ！ 次があるからね！」

6度目の事件解決にして、6度目となる報道陣による突撃取材に嫌な顔をすることのないオールマイトは、向けられた多くのマイクやボイスレコーダーに取材陣を通して向かうであろう世間へと声を発する。

そんな中、1人だけカメラを向けては微笑んでいるだけという変わった男が目映った。

「おい君イ！ 遠慮して写真撮影だけかい!? 15秒ならインタビューに答えてもいいよー！」

謙虚な姿勢にご褒美だとオールマイトがそう言うと、自前のカメラをオールマイトへと向けていた青年は首を振った。

「いいや、真のヒーローつてのは言葉がなくても姿形だけで映えるもんなんですね。言葉は嬉しいけど、俺はこの辺で」

そう言うのと軽く頭を下げて雑踏の中へと消えていく青年を見ながらオールマイトは顔を抑えた。

「ンンン〜!! 嬉しいこと言ってくれるねえ! じゃ、彼の言葉に応える為にも私は行かせてもらうよ! では、また事件解決後に!」

すぐさま飛び去りその場から消え去ったオールマイトは、空を飛びながら考える。本当にシヨツカーはあれで終わったのかと。世間の言う通り、多数の怪人を送り出したシヨツカーに人員的余裕はなく、世界での破壊活動も鳴りを潜めている。しかし、それだけでシヨツカーが壊滅したと言えるのか?

まだ自分が触れることすら許されなかった改造人間の存在が脳裏にチラつき、あれも仮面ライダーが倒しているのならばもう脅威は去ったと言えるだろう。けれども、九州で活躍していたヒーローたちのほとんどは謎のタカカワシの個性を持ったヴィランに再起不能にされ、そのヴィランは四国で猛威を振るっているという噂もある。

オールマイトが倒すべき敵は今自身が手にしている個性が生まれる原因となった巨悪を滅ぼすことだ。だが、彼の目標はヴィランという悪が消え去り、みんなが笑って暮らせる社会。そのためならオールマイトはどんな敵でも倒すと決めた。倒す力が今は

なくとも、これから、あるいは誰かと手を取り合うことが出来ればと、オールマイトは仮面に赤いマフラーの戦士を思い起こす。

「彼となら、奴も、あのヴィランも……その先も……！」

オールマイトの考えが実現するのはそう遠くない未来かもしれないし、実現する可能性は無に等しいかもしれない。けれども、悪のあるところに必ず正義は現れるのである。

お見せしよう！ 仮面ライダー！

「世界から悪はなくなるか？ いや、何をもってして悪なのか俺には分からない」

唐突な自分語りで恐縮だが、俺は自分を悪だとは思っていない。

「仮面ライダーという正義の味方を作る。そのために土台となるショッカーを作る。俺の考えに間違いはない」

悪の定義が一般的に地球で暮らす人命を脅かす者、あるいは害する者だとするのなら、俺の行いは悪か。答えは否だと断じる。

「何故ならば、仮面ライダーという正義の味方を生み出したんだ。その過程で何人死のうが、未来で救われる人間の数の方が多い」

俺の夢は仮面ライダーという存在をこの世界に君臨させること。そのために正義の味方が倒すべき敵を作るため、また明確な世界の敵から作られた存在という肩書きのためにシヨツカーを生み出した。何も無いところから仮面ライダーを作ってもそれはただ力を持ちすぎた怪物になってしまう。仮面ライダーは人間の自由のために戦うからこそ、正義の味方なのだ。

「人間の自由を脅かす存在といえどシヨツカーだ。この世界は悪人が多くても、悪人を束ねる首領がない。だから組織が生まれない」

と、思っていたのだが、個性発現黎明期から生きている真の化け物がいた。そいつの下には忠誠を誓った者や、奴自らが個性を与えて手下とした改造人間に近いやつもいる。組織としての活動力は未知数にしても、この世界で素朴に生きる人々にとっては脅威に違いない。

さらには、まだ個性が「異能」と呼ばれた時代に異能の自由行使は人間として当然の権利と謳った解放主義者達によって結成された過激派組織も存在しているらしい。他にもヴィラン専門のブローカーや、個性を神からの授け物としてそれを日常生活から制限するということは神への冒瀆とする宗教集団までいる。

要するに、シヨツカーを作らずとも仮面ライダーが倒すにふさわしい敵はこの世界にも多く存在しているわけだ。しかし、先程の通り仮面ライダーには、望んでもいない強大な力を世界の敵から授けられてしまうというバックボーンがあつてこそ光り輝くもの。

「世の中のヒーローが紛い物とは言わない。彼らは彼らで自分の責務を全うしている」

おかげで俺はすくすくと誰の邪魔も受けずにシヨツカーという組織を作りあげ、その大首領になることが出来たのだから。さて、先程誰の邪魔も受けずにと云つたが、訂正しよう。1人、個人的にかなり嫌いかつめんどくさいのがいる。

オールマイト、というよりは奴の個性に執着を見せているオールフォーワン。奴のおかげで個性を持たない素体を集めるのに苦労はなかったが、それはそれ。悪意なき悪意を持ちながらも自分を魔王と称して、悪の体現者を名乗る化け物は仮面ライダーの敵だ。

「一文字隼人。いや……仮面ライダー2号」

本郷猛、仮面ライダー1号と、なんならオールマイトや他のヒーローと力を合わせてもらっても構わない。個性は自然発生の力。それを奪い、全て扱えるというまるで平成ライダー10周年記念に出てきたディケイドや15周年記念に出てきたフィフティーン並の厄介さを持つ巨大な敵を打ち崩すのには、やはり正義の味方の力を結集してこそだ。

「お前はこれから、自由だ」

モニターの向こう側で脳改造の前に研究員たちを蹴り倒し、一文字隼人を救う仮面ライダー1号の姿を見て、口角が吊り上がる。これから2人がどんな道を歩むのか、どんな敵を倒すのか。俺はここから眺めているだけでいい。サボテグロン、ピラザウルスを初めとした2号に倒される予定の改造人間の製造は既に完了している。さらにはヨーロッパへと刺客を放ち、1号がそちらへと向かわざるを得ない状況を作り出し、倒された怪人たちの再生も順次進めている。

そして、全ての怪人が倒され、2号が1号並の経験値を積んだ時、仮面ライダーの名声はこの世界に轟いていることだろう。



###

日本の東京。その山岳地帯においてサボテンが生えているという奇妙なニュースが飛び込んだのはオールマイトがナンバーワンヒーローの座を手に入れた3日後のことであった。国民栄誉賞を辞退し、ヒーローとして当たり前の事だと言って、最低限の賞与しか受け取らなかった男はこのニュースを単なるイタズラであろうと考えていた。

SNS発信のこのニュースは、誰かが意図的にサボテンを置いて、SNSでの地位確立やフォロワー稼ぎといった恣意的なものであろうと考えられていた。メキシコでは”メキシコの花”と呼ばれるサボテンに触れると、死に至るといふ怪奇現象が起きており、それに便乗するタチの悪い冗談だと思われた。しかし、最初の発信者である日下部という男は自宅にも勤め先にも顔を出しておらず、連絡が取れなくなっていた。

環境省は地元の調査員に命じて、サボテンの伐採と入手ルートの調査をさせた。しかし、いくら待ってもその結果は知らされることはなかった。不審に思った省庁の人間が警察やヒーローに呼びかけて、現場調査を依頼したところ、とんでもないことが起きていることが起こった。

「……い、今わかったぜ。なんで、これの発信者が見つからないのか。どうして調査員が

戻ってこなかったか！」

警察官は震えながら、大声で無線機へと先程目の前で起こったことをありのまま伝えようとした。サボテンの周りに落ちていた携帯電話や、調査員の持ち込んだと思われる機器の数々。それらが放置されていたことを不審に思ったヒーローが、偶然サボテンに触れた瞬間、サボテンは爆れて飛び散り、瞬間にそのヒーローの命を奪ったことを。

「こんなの、普通じゃねえ！ 爆弾型のサボテンを作る個性、もしくは触れた物を爆弾にするとか……と、とにかく分からねえが、やばいのは間違いない！ 野次馬とか、余計なのが来る前には、はやく、手を！」

無線機へと現在置かれている状況の奇異さを伝えようと必死に言葉を紡ぐ上司を見た後、部下の一人は先程自分とも交友のあったヒーローが散った場所へと視線を動かした。個性化社会が進んでいるとはいえ、ここまでの恐怖はいつ以来だろうか。触れれば爆発するサボテンなど、どう対処しろというのか。しかも、爆発の威力は凄まじく、4人の調査員らが全て死亡したと確信するには十分な爆発力であった。自分も上司も遠巻きに見ただけだというのに爆発の際に起きた衝撃波で身体の至る所に傷がで

きていた。

そんな彼らに絶望は絶えずやってくる。そう、死ぬまで。

「キキキーツ！」

突然地面から現れたのはサボテンと同じく深い緑色の肌をした人型のナニカ。警官はとても同じ人間だとは思えず、冷や汗を垂らしながら警棒を引き抜き、化け物へと問いかけた。

「な、なんだ、お前は!？」

「俺はサボテグロン！ メキシコ支部での功績が認められ、日本侵略作戦の指揮を任された偉大なるシヨツカーの改造人間だ！」

「シヨツ、シヨツカーだと!？」

シヨツカーといえば、数年前、都内の各所で少人数ではあるものの事件関係者に大きな傷跡を残していった悪の組織の名前であり、それもナンバーワンヒーローとなる前のオールマイトを始めとしたヒーローたちにより壊滅させられたと警官は聞いていた。しかし、実際は壊滅などさせられておらず、今日この日まで日本侵略の機会をうかがっていただけと知ると、警官は背筋が凍った。

「このっ！」

固まっていた警官の危機を救うため、無線での通信を切り上げた上司がピストルを構えて、セーフティを外し、発砲した。1発、2発、3発とデタラメに放った弾丸の1つはサボテグロンの肩部へと直撃するも、弾丸の硬度や威力をもとめない強化皮膚と人工筋肉で練られたサボテグロンのボディに傷1つつけることも出来ずに弾かれた。

「ば、馬鹿な！ この銃は45口径だぞ!？」

「キキ……ッ、その程度の武器で私が倒せるものか!？」

今度はこちらの番だと、サボテグロンは手に持っているサボテンの棍棒を硬直して動けなくなっている警官へと振りかざした。

「避けるオーツ！ 飯田アー！」

上司の声は虚しくも棍棒によって骨と肉が裂かれる音の中に消えていき、飯田と呼ばれた警官は上半身が真っ二つに分かれて、血を垂れ流しながら悲鳴をあげる暇もなくこの世から絶命した。

「あ、あ、ああ……いい、いい、いい……」

「次はお前だ」

飯田から浴びた返り血をふるい落とした棍棒を向けて、歩いてくるサボテグロンに警察官は膝を着いた。この怪物には地元ヒーローでは勝てないと。通報してから5分。場所の面もあってヒーローが来るには時間が足りなさすぎる。自分が助かったとしても、駆けつけたヒーローがどうなるかと考えると警察官は動悸が抑えられずにその場に

蹲った。

「死ねえっ！」

棍棒が振りかざされる。ああ、俺の人生はこんな所で終わるのかと、家で待つ妻や息子と娘のことを思いながら、警察官は瞳を閉じた。

「ぐはがあっ!?!」

しかし、耳に届いたサボテグロンの驚きの声と、怪物の身体へと響いたキック音に警察官は顔を上げた。振り下ろされるはずだった棍棒と共にサボテグロンは何者かによって地面に倒され、代わりに立っていたのはヒーローでも警官でもない、黒のアンダーシャツに小麦色のノースリーブのジャケットを羽織った得体の知れない男だった。

「大丈夫かい、おまわりさん」

「あ……あ、ああ……」

「そりゃよかった」

見たところ外傷は大したことないようで、恐怖によって汗をかきすぎて脱水症状の様子はあるがまだしばらくは大丈夫だろうと判断した青年は立ち上がってきたサボテグロンに視線を向けた。

「この俺を吹き飛ばすとは、何者だお前は」

「……」

サボテグロンの問いかけに対して、青年は口を閉ざしたまま1歩、1歩、サボテグロンの周りを歩きながら警察官が被害を受けないような位置に移動してから口を開く。

「ショッカーの敵、そして人類の味方」

青年の発した言葉に警察官は「それは……まさか」とある噂を思い出した。オールマ

イトと交流のある警察官が漏らしていたこの世の人々にまだ名前の知られていない存在。フルフェイスのマスクに、赤い複眼のような目と赤いマフラーが特徴的な、シヨツカーを倒すために生まれてきたヒーロー。

「まさか、お前」

確か、その名前とは警察官が思い出そうとした時、青年が着ていたジャケットのファスナーを引き下ろした。

「お見せしよう！ 仮面ライダー！」



## 仮面ライダー2号

「では、お話を聞いてもよろしいでしょうか」

「はい。私は今回、世間を騒がせていた”サボテン爆弾事件”の調査のため、部下と共にサボテンが咲き乱れているという地点に向かいました」

警察官の巡査部長という立場にして、異例の記者会見を開いたのは”サボテン爆弾事件”の顛末を見届けることになった竹山という男で、彼の前にはカメラやボイスレコーダーを持った多くの記者たちがパイプ椅子に腰掛けていた。

事の始まりは、遡っていくと山岳地帯を中心に見られたサボテンで、それらは花屋やホームセンターに持ち込まれ販売されていた。緑の丸みのあるボディに針の生えたその植物の魅力に惹かれた人々は、購入して持ち帰って、観葉植物としての役割を果たさずであった。

買った人間の9割が行方不明になるという怪奇な事件が判明したのはつい最近のことである。原因を調べると、サボテンに触れれば爆死するという恐ろしいものであり、

彼らは行方不明になったのではなく、骨も塵も残さずにこの世から去ってしまったのだ。

警察が事件を知ることになったのは、「関東平野にサボテンあんだけどw」という呟きであった。これは投稿者がSNSでの地位確立やフォロワー稼ぎを狙ったプチバズのために、わざとサボテンを置いたもの……というのが当初の見立てであった。この呟きには「嘘乙」「あほくさ」「サボテンが花をつけている……w」といった懐疑的なコメントが多く寄せられており、メキシコで起きていた「メキシコの花」と呼ばれるサボテンに触れると、死に至るといふ怪奇現象を真似たタチの悪い冗談だと思われていた。しかし、最初の発信者である日下部という男は数日、自宅にも勤め先にも顔を見せておらず、連絡が取れなくなっていた。それを不審に思った彼の上司が家族へと連絡し、被害届が出されたことで、模倣犯に巻き込まれた可能性を考慮して調査を行った。

環境省は地元の調査員に命じて、サボテンの伐採と入手ルートの調査をさせた。しかし、いくら待ってもその結果は知らされることはなく、警察が現場調査を行おうとしたところ、ソレは現れた。

「同行していたヒーロー、スレンダー氏は私と部下の飯田の目の前でサボテンに触れて殉職。その後、飯田もまた、サボテグロンと名乗るヴィランに殺されました」

「どんな風貌をしていたのでしょうか？」

「……サボテンのような深い緑色の皮膚に、言葉では表しにくいのですが、不気味な感じでした。人間に近いようで少し違うような……あ、あと、長いサボテンを手に持っていました」

「それで飯田さんは撲殺されたと事前調査ではおっしゃっていましたが、事実ですか？」

「はい……」

突然地面から現れたサボテグロンに、飯田は震えながら警棒を構えるも、押し寄せてきた恐怖に体を動かせなかった。部下のピンチに竹山は持つていた45口径の弾丸を乱射するもサボテグロンにダメージを与えることができず、棍棒によって骨と肉が裂かれ、飯田は上半身が真っ二つに分かれて、血を垂れ流しながら悲鳴をあげる暇もなく絶命した。

そして、次はお前だと宣告された所であの男は現れた。

「わたしが、殺されそうになった時、青年が助けてくれて……」

「青年？」

初耳だと記者たちが首を傾げると、そこからはと隣に座っていた警視總監がマイクに向けて口を開いた。

「その青年については素性が不明であり、現在調査中です」

「竹山さんはその青年に助けてもらったんですよね？ お礼を言う際に名前は聞かなかったのですか？」

「いえ、そんな暇はありませんでした。私は彼が怪物を引き付けてくれていた間に、乗ってきたパトカーで署まで戻りました」

怪物についても行方を眩ませると同時に、サボテンを売買していた販売店も忽然と

姿を消して事件は闇の中。しかし、サボテンによる行方不明事件はパタリと止んで、警察は解決という方向で話を片付けた。

こうして記者会見を開いたのは有り得ないと思えるような事が起きてても無闇矢鱈に近づかずに、専門家やヒーロー、警察の指示を仰ぐようにして欲しいという呼び掛けのためだった。

だが、記者たち、いや世間はそのサボテン怪人のことが気がかりであった。1年前も謎のビールルスによつて、マンシヨン内の住人たちが操られる事件や、東洋原子力研究所を破壊して、東京を放射能まみれにしようとしていたトカゲ怪人と似た思考ルーチンを持つ犯罪を起こしたのは誰なのかと。

「犯人の目星はついてるんですか？」

「現在調査中です」

「個性殉教者グループや異能解放軍のような、どこかの組織的犯罪でしょうか？」

「それも現在調査中です」

「……仮面ライダーが事件を解決したという話を聞きましたが事実ですか？」

淡々と答える警視總監の眉根がぴくりと動く。質問した記者の方に目を向ける。かれこれ数年今の役職に就いて、記者会見をしてきたが、その女性は見慣れない顔であった。

「……あなたは？」

「申し遅れました。最近出来たばかりの出版社、ビブリオユートピア出版の新堂です。以後、お見知りおきを」

「……はあ、仮面ライダー……ですか。聞いたことありませんし、その何者かが事件を解決したという記録はありません」

「……そうですか」

分かりましたと潔く引いた新堂は席に着くと思いきや、会見場をあとにした。仮面ライダー、オールマイトが口にした”ヒーロー資格を持たない人類の味方”。複眼のような目が特徴のマスクと赤いマフラーを巻き付けた謎の存在に助けられたというオールマイトの発言を受けて、警察は調査を進めていたが、シヨツカーにより特別捜査班は壊滅させられ、シヨツカーが関わっている事件にしか姿を現さないため捜索は難航しており、本当に人類の味方なのかと疑問視する者もいることから、世間への発表は控えていた。

しかし、シヨツカーの被害者となった人物は多く、そのうちの何名かは仮面ライダーに助けられたと話しており、マスクを被ってバイクで去っていくのを見たと言っている。

竹山はその名前を聞いて「そうです」と言いたかった。自分は仮面ライダーに助けられたのだと。

あの時の青年の発した言葉を竹山は今も覚えている。

「シヨツカーの敵、そして人類の味方」

青年が着ていたジャケツトのファスナーを引き下ろす。腰に巻き付けられたのは見たことも無いベルト。青年はそれを見せつけながら、サボテグロンへと言い放った。

「お見せしよう！ 仮面ライダー！」

瞬間、青年の姿は消え去り、代わりに空から現れたのは黒いマスクに、赤い目とマフラー、そして先程の青年が巻き付けていたベルトと全く同じものを巻いた戦士。

「出たな！ 仮面ライダー！」

サボテグロンが声を張り上げると、仮面ライダーは地を蹴る。10メートルの距離を瞬く間に詰めると、サボテグロンへと殴り掛かる。だが、そのパンチは躲され、サボテグロンは怪しく嗤う。

「ケケケツ！ 貴様の相手をしているほど私は暇ではない！」



言うど、どこからともなく黒い衣服に身を包んだ戦闘員たちが現れる。囲まれた竹山はゴクリと喉を鳴らした。そこに仮面ライダーが背中を合わせる。

「その銃、残りは何発だ？」

「え、ええ？ え、ええつと……た、たぶん、3発、です」

「よし、じゃあ、1発くらいは当ててくれよ」

「えっ?! ええっ?!」

竹山の返事を聞かずに仮面ライダーは駆け出すと、戦闘員へと向かっていく。いる戦闘員は6名、そのうちの4名を仮面ライダーが相手取っているが、残った戦闘員は目撃者である竹山を消そうと近づいてくる。

「く、くそ！ やってやる！ やってやるんだ！」

このまま死んでたまるかと、拳銃を向ける。サボテグロンと違って、戦闘員たちは怪人という気配はなく、人間に近い。身体にダメージはなくとも、目のような網膜やレンズといった割れやすいものでしか覆われてない部位ならと弾丸は通るはずだと、竹山は自身が有する個性”超集中”を用いてよく狙い――

「イイーツ!!」

「よしっ!」

左目を潰されて悲鳴を上げている戦闘員に、仲間意識があるのか意識が逸れたもう一人の戦闘員の足首裏を狙う。

「イイーツ!!」

「ハハッ!　ざまあないぜ!」

「やるな、アンター！」

ほんの僅かな時間稼ぎを任せたつもりだったが、竹山のあげた功績は大きく、動きを封じられた戦闘員は他の4人を鎮めた仮面ライダーによって同じように倒される。

あつという間に敵が倒れ、死の恐怖から逃げ果せた竹山の身体から緊張がほどける。その場にへたり込んで、自分を助けてくれた仮面ライダーへお礼を言おうと顔上げた時、既に仮面ライダーの姿はなく、耳に届いたのは遠のいていくバイクのエンジン音だけだった。

「あ、あれが、仮面ライダー……か」

あの後、サボテグロンがどうなったのかは定かではない。しかし、サボテン爆弾が機能しなくなったということを鑑みれば、きつと仮面ライダーがああ怪物を倒したに違いないと竹山は感じていた。